You,
Unlimited

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

2019年度
活動報告書

第一部　災害復旧・復興支援に関する活動報告

第二部　ボランティア・NPO 活動センター活動報告

龍谷大学ボランティア・ＮＰＯ活動センター

●ボランティアに関する講座や研修①

◆ボランティア入門講座　（詳しくはＰ71～74）

ボランティア初心者向けの体験活動を伴う全３回連続講座を、５～６月に実施しています。第２回目のボランティア体験では、８か所に分かれて８７名が活動しました。

◆海外体験学習プログラム（詳しくはＰ64～69）

海外でのボランティア等に関心のある本学学生に向けて、貧困・福祉・環境問題など様々な課題を抱える国を訪れ、その現状に触れながら現地の NPO・NGO などとの交流を通じて体験的に学ぶプログラムを夏期・春期の長期休暇中に実施しています。写真は、夏の海外体験学習プログラムで行ったタイ王国での様子です。

◆国内体験学習プログラム（詳しくはＰ52～63）

国内の様々な地域の住民、NPO 等との交流を通じて、地域の抱える問題に触れると共に、ボランティア等の体験学習を通じてより深く社会の問題について考えるきっかけを作るプログラムを、夏期・春期の長期休暇中に実施しています。

滋賀県近江八幡市のプログラム

福島県のプログラム

●ボランティアに関する講座や研修②

◆オリエンテーション合宿　（詳しくはＰ78～80）

新しく入った学生スタッフがボランティア・NPO活動センター（以下ボラセン）の目的や学生スタッフの役割を理解し活動できるように、毎年 6 月ごろに、オリエンテーション合宿を行っています。深草キャンパスで２日間に渡って実施し、新入生と上回生合わせて８３名が参加しました。この合宿を年度のスタートとして、気持ちも新たに活動していきま

◆夏合宿・春合宿　（詳しくはＰ80～84）

深草キャンパス夏合宿の様子

瀬田キャンパス夏合宿の様子

学生スタッフの成長や資質向上を目的に、深草・瀬田キャンパスのそれぞれで、年 2 回の長期休みに１泊２日の合宿を行っています。夏合宿では、前期の活動から見えてきた課題を取り上げ、さらに後期の活動をより充実させるために話し合います。春合宿では後期の活動および年間の振り返りを行い、新年度の目標をみんなで考えます。（春合宿は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて中止）

●ボランティアに関する講座や研修③

◆ボランティアリーダー養成講座 （詳しくはＰ74～76）

ボランティアやサークル活動などをしている学生を対象に、スキルアップ講座を年２回実施しています。第１回は「伝える力、巻き込む力を鍛えよう」、第２回は「今日からできる､いいチームづくり　～正しく悩めば面白いチームはできる！～」をテーマに行いました。ワークショップも交えた実践的な講座となりました。

第１回の様子

第２回の様子

◆ボランティアコーディネーション力３級検定 （詳しくはＰ76～77）

ボランティア活動をしている学生や市民活動に関わっている方がこれからの活動にも役立てられる「ボランティアコーディネーション力３級検定」を、特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会と共催し、本学で実施しました。学生、地域の方を合わせて 41 名の受検者がありました。

◆スタディツアー合同説明会 （詳しくはＰ48～49）

龍谷大学大阪梅田キャンパスにて、スタディツアーを企画している 13 の NGO が集まり合同説明会を行いました。NGO 職員やツアー経験者から直接話が聞ける機会とあって、関西圏から多くの参加がありました。

●近隣地域でのボランティア活動

◆サマーフェスティバル 2019 （詳しくはP37～38）

深草キャンパス近隣の児童館で、子どもたちに夏休みの一日を楽しく過ごしてもらおうと始まった学生スタッフオリジナルのボランティア企画です。6 年目となり、前年度までの反省をふまえて、毎年バージョンアップしています。

◆大津祭ボランティア （詳しくはP39～40）

今年も30名を超える学生がボランティアとして参加しました。ただ山を曳く、沿道整理をするだけでなく、祭り関係者や他のボランティア参加者、観光客との交流もこのボランティアの魅力の一つです。大津祭を経験せずに大津を離れてしまうのは、もったいないことでしょう。

◆深草ふれあいプラザ　（詳しくはＰ41～42）

深草地域 5 学区の地縁団体や小学校、行政などが協働して実施されている秋の恒例イベントです。このイベントに協力する中で、本学の学生にボランティア活動や地域の方と交流する楽しさを知るきっかけにしてもらおうと、学生スタッフが学内で参加者を募集し、一緒に活動しました。

◆スペシャルオリンピックスを知ろう！

（詳しくはＰ42～44）

障がいのある方との相互理解を目的に、スペシャルオリンピックス日本・滋賀のボウリング大会をサポートしました。100名をこえる交流の場となり、初めて参加した学生たちは、学生スタッフとともにゲームを楽しみました。

◆南区民ふれあいまつり　（詳しくはＰ44～45）

京都の東寺境内で行われるまつりの『ちびっこひろば』という子ども向けのコーナーで、遊びのブースを運営する活動です。学生スタッフが工作アイデア等を考え、たくさんの子どもたちや家族連れでブースは大賑わいでした。

●学内での啓発活動

◆各センターでのボランティア紹介 （詳しくはＰ19～23）

ボランティアをやりたいと考える学生が、気軽に相談ができるように、そして希望に沿ったボランティアを紹介できるように、学生スタッフは日ごろからさまざまな工夫をしています。団体からのボランティア情報を分野別に整理し、魅力的な広報のあり方について、試行錯誤しています。

◆瀬田龍谷祭 （詳しくはＰ32～33）

『ひろがり』をテーマに、ボラセンの活動紹介、ボランティアの魅力や学びについての展示を行い、２日間で２９１名の来場者がありました。

◆深草龍谷祭 （詳しくはＰ30～32）

『～学びを発掘！～ボラセンミュージアム』をテーマに、ボラセンの活動紹介、ごみ問題や子ども向け体験コーナーなど、６つのブースを設置し、３日間で５２０名の来場者がありました。

◆Let’ s ボランティア　（詳しくはP 29〜30）

ボラセンの中に入りにくいという学生の声を受けて、食堂前にブースを設け、ボランティアの紹介や、チラシ配布を行いました。夏期休暇中に参加できるボランティアを紹介しました。

◆ボラセンの紹介　（詳しくはP 22）

春の新歓活動では、新入生に対して、ボランティアについて、ボラセンの学生スタッフについて説明しています。また、ゼミなどで、授業中にボラセンへの訪問があるときには、学生目線でボランティアの魅力をわかりやすく伝えています。

◆サークル活動・ボランティア活動情報交換会　（詳しくはP 35〜36）

学内のサークルと情報交換を行う場として、年に 5 回、ボラセンにて行っています。学内にはボランティア活動を行うさまざまなサークルがあり、活動内容について情報共有をし、サークルのネットワークづくりの一助となっています。

●東日本大震災復興支援活動 （詳しくはP6〜15）

東日本大震災の発災以降、本学では宮城県石巻市雄勝町で復興支援ボランティア活動を毎年行っています。また、学内でも東日本大震災に関する啓発活動や追悼法要など、復興支援に関する取り組みを実施してきました。2019年度も 2 回の復興支援ボランティア活動を実施し、いずれも防災学習を受講すると共に、地元の方から震災当時のお話を聴く機会も設けています。また、雄勝ローズファクトリーガーデンのお手伝いも行っています。

◆防災教育：大川小学校を訪ねて

第1回の様子

第2回の様子

◆防災教育：旧雄勝小学校裏山を津波到達点まで登る

第1回の様子

第2回の様子

◆防災教育：南浜つなぐ館とその周辺を訪ねて

第1回の様子

第2回の様子

◆防災教育：女川町で語り部と共にまち歩き（第 1 回）

シーパルピア女川にてまちづくりの説明を受ける様子

女川町の模型を見ながら説明を受ける様子

◆雄勝湾灯籠流し（中止）準備と雄勝納涼祭（第 1 回）

灯籠作りの様子

納涼祭の様子

◆雄勝小学校祖父母交流会（ほってぇ皿作り）とレクリエーション（第 2 回）

祖父母交流会でほってぇ皿作りをしている様子

子どもたちとレクリエーションの様子

◆雄勝ローズファクトリーガーデンでの活動

草刈りの様子

土入れの様子

◆学内での活動報告会

深草キャンパスでの報告会の様子

瀬田キャンパスでの報告会の様子

◆追悼法要

深草キャンパスの法要で活動報告した
川村さんと松田さん

瀬田キャンパスの法要で活動報告した
朝倉さん

― 2019（令和元）年度報告書目次 ―

2019年度のボランティア・NPO 活動センターをふりかえって（センター長）…… 3

第一部　災害復旧・復興支援に関する報告 …… 5

１．2019年度　東日本大震災等の復興支援に関する活動 …… 6

○はじめに

○2019年度東日本大震災等の復興支援に関する活動実績

２．東日本大震災等復興支援活動の紹介…… 9

○第１回東日本大震災　復興支援ボランティア活動

○第２回東日本大震災　復興支援ボランティア活動

○東日本大震災　復興支援ボランティア活動報告会

○東日本大震災追悼法要における報告とパネル展示

○2019年度　その他大規模災害に係るセンターの動きについて

第二部　ボランティア・NPO 活動センター活動報告 …… 17

ボランティア・NPO 活動センター　2019年度の取り組み…… 18

１．ボランティアコーディネート…… 19

○ボランティアコーディネート集計（月別、活動希望分野別、学部別相談者数）

○団体登録制度とボランティア募集情報シート

○外部団体来室内容と広報依頼件数

２．ボランティア情報の提供、センター事業の広報…… 22

○チラシの配架やポスターの掲示

○講義やゼミ（演習）でのセンター紹介

○メールマガジンンの配信

○ホームページ

○ボランティア・NPO 活動センター通信

○ SNS（Facebook、Twitter）

３．学内におけるボランティア活動の実践と参加のきっかけの提供…… 24

○リユース傘プロジェクト in 深草

○ Re-Use 傘プロジェクト in 瀬田

○深草キャンパス広報誌「ボラゴン」の発行

○瀬田キャンパス広報誌「Volunteer News」の発行

○ Let's ボランティア

○第97回　龍谷祭への出展（深草）

○第97回　龍谷祭への出展（瀬田）

○収集ボランティア～自宅に眠っているもので支援ができる！～

○サークル活動・ボランティア活動情報交換会およびボランティア活動支援

４．活動を通じた地域との連携　～学生と地域をつなぐ～…… 37

○サマーフェスティバル2019

○大津祭へのボランティア協力

○第29回深草ふれあいプラザへの協力

○スペシャルオリンピックスを知ろう

○南区民ふれあいまつり「ちびっこひろば」へのブース出展

○「防災・減災そなえパークの日」へのブース出展

５．共催・協力事業…… 48
○ NGO スタディツアー合同説明会
○その他報告

６．体験学習プログラム～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～…… 51
○国内体験学習プログラム
・福島県　福島スタディツアー　～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～
・滋賀県近江八幡市　近江八幡スタディツアー　～ボーダレスなまちづくり～
○海外体験学習プログラム
・タイ王国　インド洋大津波からの復興タイ験スタディツアー
・台湾　台湾の自然・文化体験エコツアー
○体験学習プログラム報告会

７．ボランティアリーダー育成事業…… 71
○ボランティア入門講座
○第１回ボランティアリーダー養成講座
「伝える力、巻き込む力を鍛えよう」
○第２回ボランティアリーダー養成講座
「今日からできる、いいチームづくり～正しく悩めば面白いチームはできる！～」
○ボランティアコーディネーション力3級検定
「市民の社会参加を支える“チカラ”を身につけよう！」

８．センターを運営する学生スタッフの育成…… 78
○2019年度オリエンテーション合宿「継続は力なり～合宿だけでは終わらせない～」
○夏合宿
・深草夏合宿
・瀬田夏合宿
○春合宿
○大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2019
○大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナー2020
○ KAGAVOCO ボラセンエキスポへのブース出展

９．新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴うセンター事業の状況について…… 91

龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター規程 …… 94
2019年度龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター名簿 …… 95
2019年度の主な新聞記事 …… 97

2019年度のボランティア・NPO活動センターをふりかえって

センター長　筒井のり子

本センターは2001年度創設以来、さまざまな組織や人々と連携、交流を深め、学内外におけるボランティア活動の振興が図れるように事業を実施してきました。2019年度も多くの方々のご協力、ご支援をいただきました。ここに改めてお礼申し上げます。

本センターの運営は、学生スタッフ、職員、教員の3者によって行われています。2019年度も3者によるセンター会議、教職員によるセンター委員会を開催し、センターの様々な事業について多角的に検討し実施してきました。それらの中から、主なものを紹介したいと思います。

〈東日本大震災等復興支援の取り組み〉

本学では2011年の東日本大震災発災以降、継続して復興支援活動に取り組んでいます。2019年度も宮城県石巻市雄勝への復興支援ボランティアバスを8月と9月の2回運行し活動を行うとともに、2月には福島スタディツアー（5回目）を実施しました。学生たちにとって、災害復興のあり方を考えるとともに、南海トラフ地震の発生予測を踏まえて、自分自身や地域における防災についても深く思いを巡らせることができたことは、大きな意味があったと思われます。

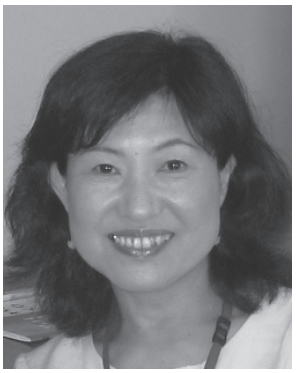
また、この数年日本各地で大きな災害が発生していますが、2019年度も台風15号／19号による暴風・豪雨災害をはじめ、多くの自然災害に見舞われました。これらの災害に対して、ボランティア活動に関する情報収集と提供、活動グッズの貸出、義援金活動などに取り組みました。

〈国内・海外体験学習プログラム〉

これらは、体験を通した「学び」に主眼を置いたものであり、2019年度は国内では2月に福島県と滋賀県近江八幡市でスタディツアーを実施しました。海外は夏季に1つ実施しました（タイ王国：NGO主催のスタディツアーに参加）。春季には3つ（アメリカ、台湾、インド）を企画していましたが、残念ながら新型コロナウィルス感染拡大に伴い、台湾以外は止むを得ず中止となりました。

〈ボランティアリーダーの育成〉

初心者向けの「ボランティア入門講座」、また「ボランティアリーダー養成講座」を2回開催し、センターの学生スタッフやグループ運営で悩んでいる他サークルのリーダー等へも学びの場を提供することができました。また、深草学舎の教養教育特別講義「ボランティア・NPO入門」への協力を行いました。さらに「ボランティアコーディネーション力3級検定」（JVCA）の共催も行いました。



〈学生スタッフ企画〉

この他、深草・瀬田の両センターの学生スタッフによるボランティア実践やボランティア活動へのきっかけ作りなどのさまざまな企画が実施されました。いずれも何度も企画を練り直し、あるいは学外団体の方々との細かい調整を行いつつ実施したものです。こうしたプロセスも学生にとって重要な学びとなっていることと思います。

〈ボランティアコーディネートの充実〉

センター事業の基盤ともいうべき日常的なボランティアコーディネートですが、コーディネーターと学生スタッフが協働し、学生・教職員からの多くのボランティア活動希望者の相談に対応しました。また学外団体からのボランティア募集や運営相談にもコーディネーターが対応しました。

〈センター20周年への準備〉

これらに加えて2019年度は、2021年のセンター開設20周年に向けて記念事業の検討を行い、過去の学生スタッフへのアンケート調査など一部に着手しました。

2019年度終盤は、新型コロナウィルス感染拡大の影響により、海外体験プログラムや学生スタッフ企画、合宿などを中止にせざるを得ませんでした。afterコロナ、withコロナ社会では、これまでと同じ活動はできなくなるかもしれません。しかし、人と人が出会うこと、現場に出て体験することの重要性を認識し、センターとしてもさまざまな工夫をしていきたいと思います。今後とも、ご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

第一部
災害復旧・復興支援に関する報告

1．2019 年度　東日本大震災等の復興支援に関する活動

はじめに

2019年は、日本中に自然災害が多発した年でした。1月～8月にかけては震度6弱～5弱の大きな地震が熊本、北海道、宮崎、福島、千葉などでたてつづけに起きました。8月13日～9月24日までの間に、暴風雨及び豪雨によって起こった水害（令和元年8月から9月の前線等に伴う大雨のこと。台風第10号、第13号、第15号 及び第17号の暴風雨を含む）は激甚災害に指定されました。また、その直後に発生した台風19号と続けて発生した20号、21号でも、激甚災害及び、特定非常災害指定を受けるほどの甚大な被害を広域に及ぼしました。

ボランティア・NPO 活動センターでは、大規模な自然災害が発生すると、速やかに被害状況と災害ボランティアに関する情報収集に努め、相談に訪れた学生・教職員に対して、情報提供と活動に必要なグッズの貸し出し、安全に活動するためのレクチャーを随時実施しています。また、京都市災害ボランティアセンターとのパートナーシップ協定に基づき、センターが実施する災害ボランティア募集の広報協力等も行いました。その結果、10月～11月にかけて、把握しているだけでも、43名の学生・教職員が今回の災害に関するボランティア活動に参加しました。

この項では、2019年度のボランティア・NPO 活動センターが関わった災害復旧・復興支援に関する取り組みについてまとめています。

2019年度も、まずは年度初めに石巻市雄勝町を訪問して地元ニーズをヒアリングした上で、PJ 会議（本学に設置されている「東日本大震災等復興支援プロジェクトチーム」。略して PJ 会議と呼称）と協議し、本年の活動計画を作成しました。

本学では、被災地域でボランティア活動を行った際には、必ず活動報告会を実施して経験を学内で共有できるように努めています。この取り組みが功を奏し、被災地域でのボランティア活動を呼び掛けると、多くの学生が募集説明会に集まり、毎回定員を大きく超える応募があるという状況が続いています。

この活動は、教職員や保護者・親和会・校友会などから寄せられる多くの寄付によって支えられており、まさに「チーム龍大」として復興支援ボランティアを続けることができていることをご報告させていただきます。詳しくは、次項からの各報告をご一読ください。

【第1回 東日本大震災復興支援ボランティア】

【第2回 東日本大震災復興支援ボランティア】

2019年度 東日本大震災等の復興支援に関する活動実績

2019年5月	5月 9日（木）～11日（土）	筒井センター長、平井課長、國實･竹田コーディネーターが宮城県仙台市、石巻市を訪問し、現地の情報収集と東日本大震災復興支援ボランティア活動の調整
	5月20日（月）	第1回 PJ 会議
6月	6月24日（月）	【第1・2回】2019年度　東日本大震災復興支援ボランティア参加者募集説明会 【深草】
	6月25日（火）	【第1・2回】2019年度　東日本大震災復興支援ボランティア参加者募集説明会 【瀬田】
	6月27日（木）	【第1・2回】2019年度　東日本大震災復興支援ボランティア参加者募集説明会 【大宮・瀬田】
	6月28日（金）	【第1・2回】2019年度　東日本大震災復興支援ボランティア参加者募集説明会 【深草】
7月	7月 2日（火）	【第1・2回】2019年度　東日本大震災復興支援ボランティア参加者募集説明会 【深草】
	7月11日（木）	文学部斯文会より　東日本大震災等復興支援募金へ寄付をいただく
	7月12日（金）	2019年度　東日本大震災復興支援ボランティア参加者発表
	7月23日（火）	【第1回】2019年度　東日本大震災復興支援ボランティア参加者説明会 【深草】
8月	8月12日（月）～8月16日（金）	【第1回】東日本大震災復興支援ボランティアを実施 【宮城県石巻市雄勝町､牡鹿郡女川町】 学生30名、引率3名 「雄勝湾灯籠流し」の灯籠作成と夏祭りの運営補助。大川小学校の視察、雄勝ローズファクトリーガーデン防災教育受講、その他、3.11みらいサポート、女川町で震災について学ぶ
	8月23日（金）	【第2回】2019年度　東日本大震災復興支援ボランティア参加者説明会 【深草】
	8月31日（土）	夕照コンサートで東日本大震災復興支援ボランティアの活動展示 【瀬田】
9月	9月 3日（火）	「令和元年8月から9月に発生した大雨の災害ボランティアを考えている皆さんへ」を HP で発表 ※台風第10号、第13号、第15号、第17号に関わる水害ボランティアの情報提供
		災害ボランティアに必要なグッズを貸出開始
	9月 4日（水）	石巻専修大学・山崎ゼミが来校し､「復興ボランティア学ワークショップ」を開催
	9月11日（水）～9月14日（土）	【第2回】2019年度東日本大震災復興支援ボランティアを実施 【宮城県石巻市雄勝町】 学生30名、引率3名 「石巻市立雄勝小学校の祖父母交流会」への参加。雄勝ローズファクトリーガーデンにて、防災教育と花壇の手入れの手伝い、大川小学校の視察、3.11みらいサポートの方より津波について学ぶ
10月	10月 1日（火）	【第1・2回】東日本大震災復興支援ボランティア活動報告会 【深草】
	10月 3日（木）	【第1・2回】東日本大震災復興支援ボランティア活動報告会 【瀬田】
	10月15日（火）	「2019（令和元）年　台風被害への災害ボランティアを考えている皆さんへ」を HP で発表 ※台風19号を中心とした水害ボランティアに関する情報提供
	10月23日（水）	京都市災害ボランティアセンターとのパートナーシップ宣言に基づき、「令和元年台風第19号災害 被災地支援ボランティア」（第1回）を緊急募集
	10月25日（金）	第2回 PJ 会議
	10月26日（土）～27日（日）	龍谷祭【瀬田】で学生スタッフが2019年度の東日本大震災復興支援ボランティア活動や防災グッズを展示。また､台風19号被災者支援のための募金箱を設置。模擬店で販売した「フライドオレオ」の収益を台風19号被災者支援のために寄付 【瀬田】
11月	11月 2日（土）～ 4日（月）	龍谷祭【深草】で学生スタッフが地震や津波、水害時の避難の仕方、東日本大震災復興支援ボランティア、台風19号の被害について、防災グッズ等を展示。また、台風19号被災者支援のための募金箱を設置。模擬店で販売した「シューアイス天ぷら」の収益を台風19号被災者支援のために寄付 【深草】
	11月 5日（火）	京都市災害ボランティアセンターとのパートナーシップ宣言に基づき、「令和元年台風第19号災害 被災地支援ボランティア」（第2回）を緊急募集
12月	12月 4日（水）	令和元年台風19号災害義援金を中央共同募金会に寄付
2020年1月	1月17日（金）	第3回 PJ 会議

2月	2月16日（日）～2月20日（木）	国内体験学習プログラム・福島スタディツアー 「福島の“今”を見、福島を生きる人々の“言葉”を聴き、そして“自分”を見つめる」を実施 【福島県福島市、南相馬市、浪江町等】 学生14名、引率2名 ※活動報告会は2020年4月に開催予定だったが、新型コロナウイルス感染予防のために報告会は無期延期
3月	3月 2日（月）～3月16日（月）	東日本大震災に関する展示を顕真館と樹心館のロビーにて 【深草・瀬田】 本学卒業生でもある志麻克史氏の東日本大震災を語り継ぐために調査した調査報告も展示
	3月 4日（水）	東日本大震災追悼法要 【深草】
	3月 6日（金）	東日本大震災追悼法要 【瀬田】
	3月 8日（日）	瀬田学生スタッフの企画で「防災・減災そなえパークの日」へ参加し、防災と減災についてのブースを出展し、啓発活動を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染予防のためにイベント中止 【瀬田】

2．東日本大震災等復興支援活動の紹介

龍谷大学では、2011年3月11日の東日本大震災発災以降、被災地でのボランティア活動や学内での啓発活動等、様々な取り組みを実施してまいりました。

2019年度も「見て、聴いて、感じる」をテーマに2回ボランティアバスを運行して活動しました。活動後は必ず学内で活動報告会を開催し、ボランティアを通した気づきや経験を学内で共有しながら啓発する努力を継続しています。そうした学内での啓発活動の成果もあり、雄勝町で活動するボランティア募集の参加申込者数が定員を下回ることはありません。説明会への参加は185名、応募は85名ありました。宿泊などの関係上、定員を増やすことができないため、苦渋の選択で選考を実施し、各回30名ずつ、計60名を選抜しました。キャンセル待ちをする学生も多く、希望する学生全員に参加してもらえないのが非常に残念でなりません。参加者募集説明会は、深草・瀬田・大宮の全キャンパスで開催し、学生・教職員に対してコーディネーターが活動趣旨・リスクを十分に理解した上で参加するように呼びかけています。

参加が確定した後には、毎回、別途説明会を実施しています。説明会では、提出書類（参加申込書、活動誓約書・保証人同意書）と参加費（2万円）の受領後、確定しているスケジュールの詳細説明と活動に関する質疑応答を行い、最後に、全学部を参加対象にしたプログラムのため、初対面の学生が多いことを考慮し、参加者同士の自己紹介等をおこなっています。

事　業　名	第1回 東日本大震災　復興支援ボランティア活動
実施日／場所	2019年8月12日（月）～8月16日（金）　宮城県石巻市雄勝町
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	33名（学生30名、引率3名）
参加者名	冨上弥生（政策4）　松岡俊希（法学3）　森谷祐生（法学3）　頼田翔平（理工3） 朝倉勇人（社会3）　大橋寛海（社会3）　川瀬貴愛（社会3）　辻　翔太（社会3） 横谷紅葉（社会3）　川村有希（政策3）　佐々木陽生（文学2）田中紗姫乃（文学2） 福沢里保（文学2）　中井康陽（経済2）　赤﨑　諒（経営2）　三品映太（経営2） 井上雄健（社会2）　下口　恵（社会2）　春木大輝（社会2）　松本萌花（社会2） 齋藤一紗（文学1）　浅井美羽（経営1）　恒藤龍太郎（社会1）　川野航士朗（政策1） 鈴木舞菜（国際1）　丸山桃佳（国際1）　山原ひなの（国際1）　田中里奈（農学1） 谷　優菜（農学1）　米田花梨（短大1） 引率教員：石原凌河 副センター長　引率コーディネーター：竹田純子、國實紗登美

1．概　要

第1回復興支援ボランティアのメインの活動は、「雄勝湾灯籠流し」の実施・運営の手伝いで、具体的な作業としては、地元の方が用意してくれたパーツを灯籠に組み立てることでした。地元の方に教わりながら約1000基を作製しましたが、台風10号の影響で灯籠流しは延期となってしまいました。

今年はそれ以外に、雄勝中央団地自治会が、移転後初の納涼祭を開催することになり、納涼祭のお手伝い兼参加者として、地元の皆様方と交流させていただきました。

ここ数年は、防災教育にも力を入れており、今年度は、毎年受講している一般社団法人 雄勝花物語による防災教育の受講の他、公益社団法人3.11みらいサポートの方に石巻市街地を案内していただき、大川伝承の会の鈴木氏にも、大川小学校を案内していただきました。

また、いつも宿泊していた雄勝町の宿が、高齢化のため宿泊が不可能になったことを受け、初めて女川町に宿泊し、女川町の観光ボランティアの方から、女川町内の被災状況や復興に

ついてお話を聴きました。

活動の終了後は、必ずふりかえりの時間を設け、それぞれの気づきや学びを共有する時間を作りました。

2. 活動スケジュール

日時	時間	スケジュール
8/12（月）	8：00	深草キャンパス発
	8：15	京都駅八条口団体バス乗り場発
	22：10	石巻グランドホテル着
8/13（火）	9：00	石巻市街地の見学
	11：00	大川小学校を見学
	13：30	旧おがつ店こ屋街で灯籠づくり作業
	19：00	ふりかえり
8/14（水）	9：00	旧おがつ店こ屋街で灯籠づくり作業の続き作業開始
	17：00	浜供養
	18：00	中央団地の皆さんと納涼祭
	20：30	納涼祭終了
8/15（木）	9：00	納涼祭の後片付け
	10：00	雄勝ローズファクトリーガーデンにて防災教育
	14：30	女川町内を見学
	16：00	ふりかえり
	20：30	上品の郷を発ち、京都へ出発
8/16（金）	9：00	京都駅八条口団体バス乗り場着
	9：15	深草キャンパス着

○8／12（月）【1日目】

・8時に深草キャンパスを出発し、バスの中でチーム作りのための自己紹介ワークや活動中の諸注意についての説明を行う

○8／13（火）【2日目】

・8時30分にホテルを出発し、公益社団法人3.11みらいサポートの方の案内で石巻市内を視察
・大川伝承の会の鈴木氏から大川小学校を案内していただく
・雄勝硯生産販売協同組合の工房前で灯籠作りの作業を地元の方に教わりながら実施
・女川町の宿に移動。各自で夕食
・女川フューチャーセンターでふりかえり

○8／14（水）【3日目】

・午前中は雄勝硯生産販売協同組合の工房前にて、前日の作業の続きを実施
・浜供養に参列
・雄勝湾灯籠流しが中止決定
・中央団地の地元の皆さんと納涼祭

○8／15（木）【4日目】

・納涼祭の後片づけ
・一般社団法人　雄勝花物語が運営している雄勝ローズファクトリーガーデンで防災教育を受講
・女川町内を女川観光協会のガイドさんの案内で視察
・ふりかえり

○8／16（金）【5日目】

・7時に起床し、朝食休憩の後、9時過ぎに京都駅と深草キャンパスにて解散

3. 参加者の声

●参加者アンケートや寄せられた声からの抜粋

・今回参加したのは、三回目であったが同じ活動、同じ話を聞いていても新たな発見、気づきがありとても充実した時間でした。今まで雄勝町を中心として活動していましたが、今回は女川での活動も追加されたことにより復興に関する考え方や町づくりの違いなどが比較出来たので、さらに考えが深まったと考えています。バスの運転手の方も含め、会う人会う人に、「よく来てくれた」とか、「龍大はいつも来てくれる」などのことばをよくかけていただきました。私たちのことを快く迎えてくださったことは本当に嬉しかったです。
・私は震災の怖さと、大切な人に想いを思った時にすぐ伝える大切さを学びました。参加する前はテレビで、「10m の津波が来た」「ビル3階分の高さ」と言われても全く予想がつかなかったです。しかし実際に見てみると予想以上に高く、これが目の前まで来た恐怖なんて計り知れないものだと感じました。電信柱などにも津波到達点と書かれてあり、町に今でも残る傷跡のようなものを感じました。
また、徳水さんのお話の中で垂直避難という言葉を初めて知り、ただ海から遠くに逃げるのは意味がないということを知った時は本当に衝撃的でしたし、これから実際に自分の身に津波が来ると分かった時には、次に自分の起こすべき行動を学びました。

4. コーディネーター所感

2013年から参加している「雄勝湾灯籠流し」は、今回初めて台風の影響で中止になるなど、天候の影響を大きく受けました。台風の直撃は免れたため、復興支援ボランティア活動自体は、なんとか実施することが出来ましたが、常に不測の事態を想定しながらの活動でした。

今回、灯籠流しは残念な結果となりましたが、納涼祭を実施していただけたので、住民の皆様方とたくさん交流することが出来て、学生たちはそれぞれいろんな話を聴かせてもらえたようです。

今年度の新しい試みとして、防災教育のボリュームを増やし、初めて女川町で宿泊し、女川町でも話を聴くことも実施しました。あまりに情報が多く、学生は混乱したかもしれません。学生たちは時間を重ねるごとに理解が進み、振り返りで語られる言葉もどんどん深くなりました。実際に足を運び、地元の方から学び、一緒に動き、話し、空気を感じる中でしか得られない学びがあります。これからもこの機会を大切にしたいと思っています。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事　業　名	第2回東日本大震災　復興支援ボランティア活動
実施日／場所	2019年9月11日（水）～14日（土）宮城県石巻市雄勝町
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	33名（学生30名、引率3名）
参加者名	富島奈々実（経営4）　萩森紀恵（経営4）　中尾明日香（政策4）　杢谷亜也衣（政策4） 梶谷幸佑（文学3）　河合政明（文学3）　髙島優菜（経済3）　清水優史（法学3） 小路万斗（法学3）　吉田　樹（法学3）　田辺海帆（社会3）　松田侑子（国際3） 竹村龍世（経済2）　本井玲渡（経済2）　吉田厚人（経済2）　河原田祐輝（理工2） 小東純也（理工2）　岸上莉子（国際2）　大屋晴太郎（農学2）　佐々木絢香（経済1） 水野広喜（経済1）　赤嶺咲希（経営1）　石井翔大（法学1）　島田侑真（社会1） 野神豪仁（社会1）　早藤涼花（社会1）　稲穂寛樹（国際1）　北田歩花（国際1） 辻元一貴（国際1）　羽原愛結（短大1） 引率教員：筒井のり子センター長　引率コーディネーター：竹田純子、國實紗登美

1. 概　要

第2回復興支援ボランティアのメインの活動は、雄勝小中学校併設校で開催される「祖父母交流会」への参加でした。この祖父母交流会では、「OGATSU　COMPANY」（雄勝小学校の「総合的な学習」の活動から生まれた「自分を元気に、みんなを元気に、まちを元気に」をテーマにする仮想会社）の“ほってぇ皿づくり”を地域の皆様方、子ども達と一緒に行いました。給食交流会や午後からの授業（ほってぇ皿作りの振り返り）にも参加しました。休憩時間には、グラウンドで小学生の子ども達と思いっきり外遊びを行いました。

他にも第1回の活動同様、公益社団法人3.11みらいサポートの方の案内で石巻市街地の見学、一般社団法人 雄勝花物語による防災教育の受講とガーデンの整備（芝刈り、堆肥入れ）を行いました。大川伝承の会の佐藤氏に、大川小学校を案内していただくなど、災害を学ぶことにも多くの時間を費やしました。

活動の終了後は、必ずふりかえりの時間を設け、それぞれの気づきや学びを共有する時間を作りました。

2. 活動スケジュール

日時	時間	スケジュール
9/11（水）	8：00	深草キャンパス発
	8：15	京都駅八条口団体バス乗り場発
	22：10	石巻サンプラザホテル着
9/12（木）	8：30	石巻市街地の見学
	10：30	雄勝ローズファクトリーガーデンにて防災教育
	12：50	ガーデン整備
	15：30	ガーデンの整備終了
	16：00	大川小学校を見学
	20：00	ふりかえり

9/13（金）	8：00	女川町のシーパルピアを車窓見学
	9：35	祖父母交流会開始
	12：25	交流給食会＆子ども達との交流の時間
	13：40	子ども達と一緒にふりかえり
	15：00	子ども達と交流
	16：00	ふりかえり（学生のみ）
	20：30	上品の郷を発ち、京都へ出発
9/14（土）	9：00	京都駅八条口着
	9：15	深草キャンパス着

○9／11（水）【1日目】
・8時に深草キャンパスを出発し、バスの中でチーム作りのための自己紹介ワークや活動中の諸注意についての説明を行う
○9／12（木）【2日目】
・8時30分にホテルを出発し、公益社団法人3.11みらいサポートの方の案内で石巻市内を視察
・10時30分に雄勝ローズファクトリーガーデンに到着。一般社団法人　雄勝花物語による雄勝ローズファクトリーガーデンで防災教育を受講
・ガーデンの芝刈り、堆肥入れ等のガーデン整備
・大川伝承の会の佐藤氏から大川小学を案内していただく
・華夕美で宿泊。夜にふりかえりを実施
○9／13（金）【3日目】
・女川町のシーパルピアを車窓見学
・雄勝小学校で祖父母交流会に参加
・子ども達と一緒に振り返り
・学生だけで全体のふりかえり
・雄勝病院跡地の慰霊公園に建立された慰霊碑「祈りの塔」を見学
・上品の郷で入浴・夕食を済ませ京都へ出発
○9／14（土）【4日目】
・7時に起床し、朝食休憩の後、9時過ぎに京都駅と深草キャンパスにて解散

3. 参加者の声

●参加者アンケートや寄せられた声からの抜粋
・僕は、今回のボランティアで、震災のことについて自分の頭で考えるという事を課題とし参加した。
4日間を終え、聞き、学び、考え、想像を超える心の痛みを知った。2日目大川小学校を訪れた。学校の横に山があった。もしこの山を登っていれば助かっていたかもしれない。どれほど悔しい思いをしたか。今現在でも津波による行方不明の子どもがいる。見つからない子どもを探して、今日も捜索している。我が子がどこでいるかわからないことが、どれほど悲しいことか。今回のボランティアに参加する前から、震災・津波で家が壊され、流され、人々の行方もわからないという状況を知らなかったわけではない。しかし耳を塞いで考える事を遠ざけてしまっていた。あまりに心が痛すぎるからである。今回僕は、震災について、向き合うことが出来たように思う。
・今回のボランティアでは想像以上にたくさんのことを学ぶことができました。現地の人の優しさや行動力に触れ、自分に何が足りないのかをより深く知ることができました。雄勝の子供達は少人数にもかかわらず、とても元気で生き生きと活動しており、小学生なりにたくさんのことを考え、行動していることがわかりました。自分が小学生だった時を思い出し、当時の自分と比べてとても頼もしく、強く生きているような感じがしました。

4. コーディネーター所感

今回、初めて祖父母交流会に参加させていただきました。学生の力が発揮しやすい運動会に比べ、“ほってぇ皿作り”でお役に立てることがあるのかと心配していましたが、子ども達や住民の皆様方と、共に笑ったり、話したり、交流しながら“ほってぇ皿作り”を行うことが出来てホッとしました。昼食のお弁当が届かないハプニングがありましたが、このことがきっかけで給食を少し分けていただいたりして、逆に面白い思い出になったように感じています。午後からは授業に参加し、子ども達と一緒に“ほってぇ皿作り”を振り返ったのですが、その際にカードを使用して、自分の気持ちを語るなどを

体験させていただき、そのユニークな学びに、学生たちはとても刺激されていたようです。

8月の活動よりも1日少なかったこともあり、学生からは「短すぎる」との意見もありましたが、天候にも恵まれ、予定していた活動をスムーズに行うことができました。地域の高齢者や子どもたちとの交流、防災についての学びなど、とても貴重な時間を過ごすことが出来ました。石巻市の市街地や雄勝町でお世話になった皆様、本当にありがとうございました。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事　業　名	東日本大震災　復興支援ボランティア活動報告会
実施日／場所	10月1日（火）17時30分～19時00分　和顔館1階　アクティビティホール【深草】 10月3日（木）17時30分～19時00分　6号館プレゼンテーション室【瀬田】
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	学生、教職員のべ90名

1. 概　要

深草・瀬田のキャンパスで、以下の通り報告会を開催しました。

①竹田コーディネーターよりこれまでの復興支援活動や雄勝町についての説明
②第1回（8月の活動）の活動についての報告（ムービーの上映）
③第1回に参加した学生からの報告
④石原凌河副センター長からのお話（引率教員）
⑤第2回（9月の活動）の活動についての報告（ムービーの上映）
⑥第2回に参加した学生からの報告
⑦筒井のり子センター長からのお話（引率教員）
⑧質疑応答の時間
※活動の詳細については、各回の報告をご一読ください。

2. ボランティア活動に参加した学生の声

・今回、実際に被災地に行って、話を聴いて、いろいろ見ました。「今、若者の自殺とか問題になっているけど、今回、石巻でたくさんの話を聴いて、知って、生きよう！生きないとダメだ！」と強く思いました。
・ボランティア終了後、家族とハザードマップを確認して防災について話し合いました。
・教員を目指しているが、学校は教育をする場所であるが、それよりもまず、子どもの命を守る場所でないといけない。子どもの命を守れる学校を作りたいし、子どもの命を守れる教員になりたいと思いました。

3. コーディネーター所感

今回は、報告会の時間を昼休みから夕方17時半からの開催に変更しました。参加者を集めるのは難しいかと思いましたが、十分な時間を

とって、学生の話を参加者に聴いてもらえるようにしたかったからです。参加者は、過年度に比較して少し減少しましたが、第1回と2回に参加した学生が同じ場所に行っても違う経験をしていることを聴き合うことが出来ました。また、学外や教職員の参加もあり、来場者から話してもらう時間も取れたので、より充実した報告会になったように感じています。

これからも報告会の実施の仕方に工夫を凝らしながら、活動に参加した学生達の声を届け、東日本大震災に関する関心の低下を防ぐ努力を続けたいと思います。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事　業　名	東日本大震災追悼法要における報告とパネル展示
実施日	東日本大震災追悼法要：【深草】2020年3月4日（水）12時00分～13時00分 【瀬田】2020年3月6日（金）12時00分～13時00分 パネル展示：【深草・瀬田】2020年3月2日（月）～3月16日（月）
場　所	【深草】顕真館及びロビー【瀬田】樹心館及びロビー
発表者	朝倉勇人（社会3）　川村有希（政策3）　松田侑子（国際3）
実施主体／運営	龍谷大学／宗教部／ボランティア・NPO 活動センター

1. 経緯・目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災では15,899人*の方々が亡くなられ、2,529人*の方々が行方不明となっておられます。地震と津波の被害、さらには福島第一原子力発電所事故により、9年を経過した現在においても約49,000人**の方々が避難生活を余儀なくされ、家族や友人の死や地域コミュニティの変容による孤独、放射能による健康不安等、悲しみ苦しみを抱えながら生活をされています。震災以降に震災関連死された方々も3,738人**にのぼります。本学では、これまでに、のべ700名近くの学生や教職員が、本学が主催する復興ボランティアに参加し交流するとともに、復興イベントを実施し、臨床宗教師の実習をおこなう等、被災者に寄り添った支援を続けてきました。また、建学の精神の実践として仏教 SDGs の取り組みを展開し、持続可能な社会と地域のあり方を発信しているところです。

東日本大震災以降も国内外でたびたび甚大な震災が発生している現実を目のあたりにし、東日本大震災のみならず、地震や台風等、様々な自然災害等により、多くの方が亡くなられ、被害にあわれた方々がおられることを思わずにはおられません。

このたび、犠牲となられた方々をしのびつつ、すべての被災者および関係者の方々に改めてお見舞いを申しあげ、一人ひとりの“復興”に寄り添うとともに、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」機縁として、東日本大震災追悼法要を勤修します。（*警察庁2019.12.10発表　**復興庁2019.12.27発表）

2. 概　要

宗教部が勤修した法要の中で、東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加した学生と、福島スタディツアーに参加した学生が「東日本大震災復興支援ボランティア」と「福島スタディツアー」で見た被災地の今と、活動を通した気づきについて報告を行いました。

また、法要会場の入り口に2019年度の東日本大震災復興支援ボランティアと福島スタディツアーの活動報告のポスターの展示と、本学卒業生（文学部 ’93年卒）でもある志麻克史氏の東日本大震災を語り継ぐために調査した調査報告を展示しました。

【東日本大震災追悼法要】

■大宮学舎

日時　2020年3月4日（水）9時～9時30分
場所　本館講堂
法要　勤行　讃仏偈
調声・講話　能仁　正顕　宗教部長

■深草学舎
日時　2020年3月4日（水）12時～13時
場所　顕真館
法要　勤行　讃仏偈
調声　能仁正顕　宗教部長
講話　入澤　崇　学長
報告　朝倉勇人、川村有希、松田侑子

■瀬田学舎
日時　2020年3月6日（金）12時～13時
場所　樹心館
法要　勤行　讃仏偈
調声・講話　杉岡孝紀　宗教部長代理
報告　朝倉勇人、川村有希、松田侑子

3. コーディネーター所感

本学では、2012年度から毎年法要が勤修され、法要終了後には、復興支援ボランティアに参加した学生が活動報告をする機会をいただいています。

学生、教職員のみならず、卒業生も自発的に集って、一緒に震災の犠牲になった人を想い、想いを分かち合い、追悼する時間を持てることは、龍谷大学の大きな特徴であり、強味だと感じています。

法要で報告する学生は、この活動を通じて、何を感じ、出会い、気づき、悩んだのか、心がどんなふうに動いたのかを自分の言葉で語ります。彼らの真摯な想いが聴衆の胸に刺さり、次につながっていくのだと思っています。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事　業　名	2019年度　その他大規模災害に係るセンターの動きについて

1. 概　要

2019年8月～10月に発生した台風によって起こった水害への対応を以下の通りまとめました。

まずは、センターとして被災状況やボランティアに関する情報収集に取組み、その後、センター長名でセンターホームページ、Facebook等のSNSを通じて、復興支援ボランティア活動を希望する学生・教職員に対し、センターが出来ること（活動に関する情報提供と活動の際に必要なグッズの貸出等）について呼び掛けました。

2. 活動概要

○9月3日（火）
・センター長名で、災害に関するメッセージをホームページ、フェイスブック等を通じて発信。併せて、ボランティアに関する情報提供やグッズ貸出について呼び掛け開始
・活動についての情報提供として、相談に訪れた学生･教職員に対し「活動情報の探し方」「安全に活動するために必要な知識」「ボランティア保険」等についての情報をまとめた「災害ボランティアに参加する前に知っておいてほしいこと」を作成し、活動希望者には個別レクチャーを実施したうえで配布できる体制を整えました。
・活動に必要な鉄板入りの長靴やヘルメット、ゴーグルなどの貸出、防塵マスクの配布の開始
・ボランティア保険の加入手続きも実施
○10月15日（火）
・再び、ホームページ、フェイスブック等で情報提供やグッズ貸出について呼び掛け
○10月23日（水）
・京都市社会福祉協議会との「大学のまち京都

災害ボランティアに係るパートナーシップ宣言」に基づいて、京都市災害ボランティアセンターが実施する10月27日（日）～29日（火）の長野市でのボランティアの緊急募集に協力

○11月5日（火）

・京都市災害ボランティアセンターが、実施する11月18日（月）～20日（水）の長野市でのボランティアの緊急募集に協力

○12月4日 (水)

・龍谷祭で学生スタッフが取り組んだ「令和元年台風19号災害募金」（学生スタッフのブース内のみで実施）と模擬店収益金の一部をあわせた￥95,062円を京都府共同募金会を通じて、中央共同募金会に義援金として寄付

●令和元年台風災害ボランティアについての相談

2019年9月～2020年1月の相談件数

	1回	2回	3回	4回	合計
文学	1	1		5	7
経済	1	1		3	5
経営					0
法学			2		2
理工					0
社会	2			1	3
政策	6	11	6		23
国際					0
農学					0
短大					0
合計	10	13	8	9	40

2019年度令和元年台風に関わる水害ボランティアについての月別相談者数

	深草		瀬田	
9月	4	武雄市でV活動 4人	0	
10月	4	台風19号V保健手続き、用具貸し出し 3人、台風19号V相談1人	1	長野水害V相談 1人
11月	24	長野水害V用具貸し出し23人 台風19号V相談 1人	1	長野水害V V保険加入、用具貸し出し 1人
12月	2	台風19号V相談2人	0	
1月	4	長野水害V用具貸し出し4人	0	
計	38		2	
総合計	40人			

3. コーディネーター所感

夏休みから立て続けに大規模な台風が発生し、日本各地に大きな被害を残しました。

被災状況や災害ボランティアについての情報収集や、学生・教職員への情報提供の準備は比較的迅速にできたように感じています。しかし、夏休み終了後は学校行事が続く上に、どの被災地も関西からは遠く、自力で向かうには厳しい場所であったためか、通常に比べ、学生の反応は鈍いように感じました。

移動手段を持たない学生や活動初心者の学生に対しては、参加しやすく、比較的安全も担保できる活動として、社会福祉協議会等が実施するボランティアバスなどを中心に紹介しましたが、活動日のタイミングに合わない場合が多く、相談に来た学生となかなかつなげることが出来ませんでした。把握している社協のボランティアバスで活動した学生・教職員は5名でした。

自力で向かおうとした学生もいましたが、受け入れ側の団体と活動日程が合い辛く、活動につなげるのが難しかったです。

反対に受け入れ先も移動手段も決まっているからと悪天候の中、被災地に向かおうとする学生もおり、安全喚起はより一層気を付けなければならないと痛感しました。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

第二部
ボランティア・NPO 活動センター活動報告

ボランティア・NPO 活動センター　2019年度の取り組み

	全キャンパス共通	深草	瀬田
年間通じての取組	●ボランティアコーディネート ●団体からのボランティア情報の受付 ● Facebook、Twitter での情報発信 ●チラシ・掲示板での情報提供 ●メールマガジンの作成・配信（月に1回） ●ホームページの更新（随時） ●学内サークルへのボランティア紹介 ●センター委員会、ボラセン会議の実施	●リユース傘プロジェクト in 深草	● Re-Use 傘プロジェクト in 瀬田 ●収集ボランティア（10月～3月）
4月	●ボランティア・NPO 活動センター通信37号発行 ●学生スタッフ新歓活動 ●2018年度春季体験学習プログラム報告会 ●新入生向け新歓ガイダンス ●サークル活動・ボランティア活動情報交換会① ●第25回セーフトラベルセミナーの共催	●広報誌「ボラゴン」春号発行	●広報誌「Volunteer News」春号発行
5月	●ボランティア入門講座第1回「ボランティアって何だろう？」（講義）		
6月	●学生スタッフオリエンテーション合宿「継続は力なり～合宿だけで終わらせない～」 ●ボランティア入門講座第2回「ボランティア活動を体験してみよう」（活動体験） ●ボランティア入門講座第3回「ふりかえり」 ●第20回 NGO スタディツアー合同説明会の共催 ● NGO スタディツアー学内説明会		
7月	●サークル活動・ボランティア活動情報交換会②		● Let’s ボランティア ●広報誌「Volunteer News」夏号発行
8月	●第1回ボランティアリーダー養成講座「伝える力、巻き込む力を鍛えよう」 ●海外体験学習プログラム（タイ王国） ● KAGAVOCO ボラセンエキスポへのブース出展	●サマーフェスティバル2019	
9月	●大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2019への参加 ●サークル活動・ボランティア活動情報交換会③ ●ボランティアコーディネーション力3級検定	●学生スタッフ夏合宿	●学生スタッフ夏合宿
10月	●2019年度夏季海外体験学習プログラム報告会 ●2018年度活動報告書の発行	●第29回深草ふれあいプラザへの協力 ●広報誌「ボラゴン」秋号発行	●大津祭へのボランティア協力 ●龍谷祭への出展（展示・模擬店）「ひろがり」 ●広報誌「Volunteer News」秋号発行
11月	●第21回 NGO スタディツアー合同説明会の共催 ● NGO スタディツアー学内説明会 ●サークル活動・ボランティア活動情報交換会④	●龍谷祭への出展（展示、模擬店）「学びを発掘！ボラセンミュージアム」 ●南区民ふれあいまつり「ちびっこひろば」へのブース出展	●スペシャルオリンピックスを知ろう
12月			
1月	●サークル活動・ボランティア活動情報交換会⑤	●広報誌「ボラゴン」冬号発行	
2月	●第2回ボランティアリーダー養成講座「今日からできる、いいチームづくり～正しく悩めば面白いチームはできる！～」 ●国内体験学習プログラム（福島県） ●国内体験学習プログラム（滋賀県近江八幡市） ●海外体験学習プログラム（台湾） ●大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナー2020への参加		
3月	●海外体験学習プログラム（アメリカポートランド）（中止） ●海外体験学習プログラム（インド共和国）（中止） ●2020年度用センターパンフレットの作成	●学生スタッフ春合宿（中止）	●学生スタッフ春合宿（中止） ●「防災・減災そなえパークの日」へのブース出展（中止）

1．ボランティアコーディネート

ボランティア・NPO 活動センターでは、ボランティア活動を希望する学生へ情報提供等を行い、地域団体からはボランティア募集の相談に応じるなど、この両者をつなぐ役割を担っています。

センターには学生スタッフが所属しており、相談に来室する学生の初期対応を担い、同じ学生ならではの視点でボランティア活動の紹介を行っています（ピアサポート）。その他の専門的な知識が必要なケースはコーディネーター（職員）が対応することになっています。

さまざまな相談対応を通して、ボランティアへの理解と参加の促進に努め、これを「ボランティアコーディネート」と呼んでいます。

大学内にセンターが存在することにより、学生や教職員の自発的かつ主体的なボランティア活動へのアクセスが容易となり、地域貢献にもつながっています。また、これらの活動を通して、学生自身の成長にもつながっています。

○ボランティアコーディネート集計（月別、活動希望分野別、学部別相談者数）

■月別相談者数（複数回答あり）

（件数）

月	ボランティア相談		学生スタッフ相談		センター企画相談		情報収集		その他		計
	深草	瀬田	深草	瀬田	深草	瀬田	深草	瀬田	深草	瀬田	
4 月	19	15	38	27	1	0	4	8	1	16	129
5 月	15	15	14	15	0	1	0	6	3	2	71
6 月	20	15	2	2	2	0	3	1	0	1	46
7 月	23	30	0	1	0	2	4	2	5	3	70
8 月	3	8	0	0	0	0	0	0	0	0	11
9 月	6	9	0	1	0	0	1	1	3	1	22
10月	21	34	0	1	0	0	1	3	0	1	61
11月	6	8	0	1	0	0	4	2	21	1	43
12月	13	8	0	1	0	0	2	0	1	0	25
1 月	17	10	0	0	1	0	0	0	3	1	32
2 月	4	5	0	0	0	0	0	0	0	0	9
3 月	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
合計	149	158	54	49	4	3	19	23	37	26	522

■活動希望分野別相談者数（複数回答あり）

（件数）

希　望　分　野	相談者数		計
	深草	瀬田	
子ども・青少年	56	83	139
高齢者	12	11	23
障がい児・者	18	21	39
医療	8	1	9
国際協力・交流・在住外国人支援	53	31	84
人権	4	4	8
貧困	10	7	17
環境	30	34	64
災害	67	17	84
文化・芸術	7	6	13
スポーツ	7	14	21
動物愛護	3	6	9
平和	7	1	8
まちづくり	18	31	49
中間支援	1	0	1
その他	67	50	117
合　計	368	317	685

■学部別相談者数

（件数）

所　属	相談者数		計
	深草	瀬田	
文学部	50	0	50
経済学部	34	0	34
経営学部	17	0	17
法学部	34	0	34
理工学部	3	20	23
社会学部	1	125	126
政策学部	48	0	48
国際文化学部	2	0	2
国際学部	55	0	55
農学部	1	75	76
短期大学部	12	0	12
大学院	0	0	0
他大学	0	0	0
教員	1	0	1
職員	0	0	0
無記入	0	0	0
合　計	258	220	478

○団体登録制度とボランティア募集情報シート

ボランティア・NPO 活動センターでは、ボランティアを募集する団体との協力・連携の体制を整備し、その団体の活動内容を把握することを目的として、団体登録制度を設けています。

学内でのボランティア募集情報の提供は、「団体登録票」を提出していただいた登録団体に限定しています。センター配信のメールマガジン（2019年度で配信終了）についても、登録団体のボランティア情報などを優先的に紹介しています。

また、登録団体から広報依頼を受けたボランティア募集チラシは記載情報（実費弁償や活動保険の有無など）にバラつきがあるため、ボランティア相談に来室する学生に対してより詳しい内容の情報を提供することを目的として、ボランティア募集情報シートを主に学生スタッフが作成し、活用しています。

これらは、ピアサポートの視点で学生スタッフによるコーディネートを目指している中、彼らが授業の空き時間などを各自調整してシフトを組み、ボランティア相談に対応している現状においても、情報を共有しやすい方法だと考えています。

今後、登録団体のボランティアの情報を充実した内容で提供でき、より良いボランティアコーディネートが行えるようになることを目指し、さらなるシステムの整備に取り組んでまいります。

■団体登録数

（件数）

分　　野	京都府	滋賀県	その他関西圏	関西圏以外	計
子ども・青少年	31	24	13	8	76
高齢者	9	5	1	0	15
障がい児・者	15	27	3	1	46
医療	3	1	0	0	4
国際協力・交流　在住外国人支援	4	3	2	2	11
人権	0	0	0	0	0
貧困	2	2	0	0	4
環境	6	5	1	4	16
災害	1	2	0	1	4
文化・芸術	7	5	0	0	12
スポーツ	2	4	3	0	9
動物愛護	0	0	0	0	0
平和	1	1	0	0	2
まちづくり	9	5	0	1	15
中間支援	5	6	3	1	15
その他	3	3	1	2	9
合　　計	98	93	27	20	238

○外部団体来室内容と広報依頼件数

ボランティア・NPO 活動センターには、多くの団体からボランティア募集やイベント・講座・セミナーの広報依頼があります。その他にも、国や他大学からの視察、行政との連携にかかる相談、さまざまなケースの来室に対応しています。今年度の主な受付内容は以下のとおりです。

■相談内容別（1件あたり複数内容の受付あり）

（件数）

相談内容	深草	瀬田	計
広報依頼（ボランティア募集）	216	176	392
広報依頼（ボランティア募集以外※）	389	273	662
視察・ヒアリング	7	5	12
取材	0	0	0
その他	36	7	43
合　　計	648	461	1,109

※講座、セミナー、イベント開催案内、ニュースレター等

■受付団体種別

（件数）

受付団体	深草	瀬田	計
一般個人	4	2	6
学内	3	4	7
NPO 法人	147	68	215
社会福祉法人	105	110	215
一般社団・財団法人	29	5	34
公益社団・財団法人	88	94	182
その他の非営利法人	28	16	44
任意団体	57	67	124
幼稚園・保育園等	1	0	1
児童館・学童保育	3	0	3
小・中・高	2	2	4
特別支援学校等	0	0	0
教育委員会	6	9	15
他大学・専門学校	33	19	52
企業	37	28	65
公共施設・社会教育施設	43	9	52
行政機関	58	23	81
その他	4	5	9
合　　計	648	461	1,109

■2019年度　センターに訪問いただいた大学

2020年1月15日(水)甲南大学地域連携センター

■広報依頼分野別（複数回答あり）

（件数）

広報分野別	深草	瀬田	計
子ども・青少年	158	137	295
高齢者	22	13	35
障がい児・者	65	57	122
医療	6	7	13
国際協力・交流 在住外国人支援	152	56	208
人権	1	1	2
貧困	37	31	68
環境	50	44	94
災害	35	23	58
文化・芸術	15	4	19
スポーツ	7	6	13
動物愛護	0	0	0
平和	3	1	4
まちづくり	37	29	66
中間支援	28	19	47
その他	210	115	325
助成金	16	15	31
総合情報	130	30	160
ニュースレター	248	150	398
合　　計	1,220	738	1,958

2．ボランティア情報の提供、センター事業の広報

ボランティア・NPO 活動センターでは、学生・教職員に対するボランティア情報の提供を目的として、地域の様々な団体のボランティア募集やイベント･講座の開催などのチラシを配架し、ポスターを掲示するとともに、希望者にはメールマガジンの配信を行っています。

リニューアルを行ったホームページでは、センター事業の予定や報告、発刊物のバックナンバー等を掲載し、学内・外に情報を発信し続けています。近年では、SNS（Facebook、Twitter）を活用して事業の広報のみならず、学生の活動の紹介など、様々な情報発信も積極的に行っています。

また、教員各位からの依頼に基づき、講義やゼミ（演習）のなかでセンター事業の紹介を行うことで、ボランティア活動のきっかけ作りやボランティア活動の理解促進に取り組んでいます。

○チラシの配架やポスターの掲示

数あるボランティア情報やイベント・講座・セミナーなどの情報を多くの学生に提供するために、パンフレットスタンドにチラシを見やすく配架し、センターの掲示板に情報を掲示しています。

センター事務室内外でのラックの設置とチラシの整理、掲示板の管理などを学生スタッフが中心となって行っており、学生に向けたアプローチを工夫するとともに、この活動をコーディネートに活用しています。

○講義やゼミ（演習）でのセンター紹介

センターではボランティア活動のきっかけ作りを目的として、講義やゼミ（演習）の中で、センターの紹介を行っています。

教員が希望する時間内で、ボランティアコーディネーター（職員）や学生スタッフが「ボランティアとは」、「センターの活動紹介」などをパワーポイントで紹介しました。また、学生スタッフが、自身のボランティア体験について語ったり、センターを案内し、センターの活用方法等を紹介しました。

2019年度は19件の依頼があり、センター紹介後に学生がボランティア相談に来室するなどの効果がありました。また、この他にもゼミ単位でセンターに寄っていただき、簡単なセンター紹介をすることもありました。

【センター紹介実施一覧】

	日	対象学部	担当教員名	科目名等
1	4月12日(金)	教養教育科目	筒井のり子	ボランティア・NPO 入門
2	4月17日(水)	グローバル教育推進センター		海外ボランティア
3	4月18日(木)	社会	岡野英一	基礎ゼミナール
4	4月18日(木)	社会	金子龍太郎	基礎ゼミナール
5	4月19日(金)	農	中川千草	入門ゼミ
6	4月19日(金)	農	中田祐子	入門ゼミ
7	4月19日(金)	農	山口道利	入門ゼミ
8	4月23日(火)	グローバル教育推進センター		海外ボランティア
9	4月23日(火)	社会	柴田和子	NPO 論（ボランティア論）
10	4月23日(火)	社会	松本　拓	社会学への招待
11	4月24日(水)	法	井出真也	基礎演習
12	4月25日(木)	社会	早瀬　昇	ボランティア・NPO 論
13	5月15日(水)	経済	松島泰勝	入門演習
14	5月17日(金)	文	三原龍志	日本語 B「別科 HR」
15	5月17日(金)	文	三原龍志	日本語 B「別科 HR」
16	6月28日(金)	農	山口道利	入門ゼミ（合同）
17	7月3日(水)	経済	上山美香	入門演習
18	10月4日(金)	国際	古川秀夫	NGO／NPO 論
19	10月10日(木)	グローバル教育推進センター		海外ボランティア

○メールマガジンの配信（2019年度で終了）

メールマガジンは学生や教職員などを中心に登録があり、今年度のメールマガジン登録者数は計987名でした。

4月は2回、5月からは毎月1回の配信を行い、今年度は計13回となりました。

内容は、

①センター主催のイベントやボランティア企画の募集案内

②地域団体からのボランティア情報やイベント・セミナー等の情報

③学生スタッフの執筆によるボランティア関連や社会問題に関する特集

④学生スタッフの紹介

という構成になっています。

学生スタッフが情報を把握し、コーディネートへ活かすことを狙いとしており、記事の作成は学生スタッフが担当し、事務局が最終的に修正を行い配信しました。

○ホームページ

今年度、ホームページのリニューアルを行いました。センターの自主事業や、東日本大震災等復興支援に関する活動を積極的に発信しています。今後も閲覧する方にとって情報を得やすく、ボランティア活動のきっかけとなるようなホームページ運営を行っていきたいと思います。

○ボランティア・NPO 活動センター通信

学内向けのニュースレターを4月に発行しました。センターの自主事業や学生の各種活動の報告と予定のお知らせ、センター紹介の案内などを掲載しました。

○ SNS（Facebook、Twitter）

深草と瀬田両キャンパスのコーディネーターと学生スタッフが協力しながら、タイムリーな情報発信を随時行いました。各種センター事業、学生企画に関する情報だけでなく、学生スタッフの日常などを切り取り、センターをより多くの方に知っていただくように工夫しています。

【Facebook 配信数】

4月15回、5月11回、6月32回、7月13回、8月21回、9月33回、10月34回、11月26回、12月7回、1月7回、2月23回、3月3回、合計225回

【Twitter 配信数】

4月23回、5月12回、6月29回、7月16回、8月13回、9月15回、10月27回、11月35回、12月7回、1月3回、2月13回、3月3回、合計196回

Facebook　Twitter　ホームページ

3．学内におけるボランティア活動の実践と参加のきっかけの提供

ボランティア・NPO 活動センターでは、学生スタッフが中心となり、ボランティアの第一歩となるような活動や啓発の場を提供しています。センターでは、日常的、定期的に行えるボランティアを数多く紹介、また、学生が社会の課題に気づけるようなイベントを実施して、ボランティアの裾野が広がることを目的として活動しています。

事　業　名	リユース傘プロジェクト in 深草（継続企画13年目）
日　時	2019年4月1日（月）～2020年3月31日（火）
場　所	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
利用者数	延べ138名
企画メンバー（学生スタッフ）	中野優太（文学4）　吉田　響（文学4）　小松舞由子（経済4）　渡辺早耶（経営4） 石﨑絵梨香（法学4）　山田京花（政策4）　長谷川鈴音（経済3）　吉田　樹（法学3） 佐々木大悟（政策3）　佐藤鴻河（政策3）　森日奈子（文学2）　松尾宗次朗（経済2） 西村志穂（政策2）　福島麻斗（政策2）　谷垣俊弥（法学1）　小林初音（国際1）

1．経緯・目的

本企画は突然の天候の崩れ等の際、傘を持っていない学生及び教職員がその時のためだけに傘を購入するのはエコではないという思いから始まった。

傘を必要とする方に対し、忘れ物として学生部で所定の保管期間後、廃棄することになった落とし物の傘を譲っていただき、「リユース傘」として貸し出すこと、また、貸し出す際にセンターの活動を広報することにより、センターの利用者数の増加を図ることを目的として、継続して実施している。

2．概　要

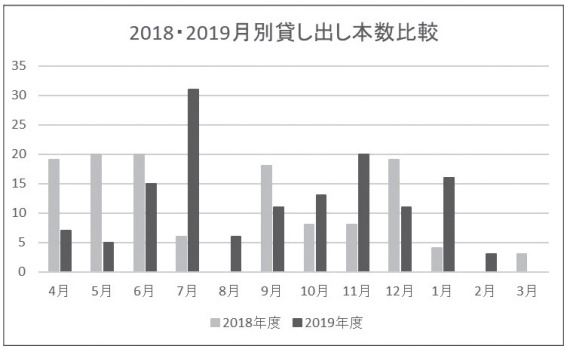
（1）日時：ボランティア・NPO 活動センター開室時
（2）貸出対象：龍谷大学の学生・教職員
（3）貸出時の流れ：
1.「リユース傘」を1本選択してもらう。
2. 学生証・教職員証を提示のうえ、必要事項（氏名・学籍番号又は教職員番号・電話番号）を記入してもらう。
3. 学生スタッフが傘番号を記入し、貸出期間は1週間であること、傘未返却の際連絡する旨を伝える。
4. 活動の広報を行う。

3．参加者の声・得られた効果など

今年度､深草学生スタッフの大きな目標が「来室者300名以上」であったことから、リユース傘についても「200本貸し出し」を目標に活動し、6月から7月にかけてチラシ配りや通年でのポスター掲示を行った。結果としては、138本と昨年度から13本上回る程度に終わった。

目標が達成できなかった要因として、新歓時期である4～5月にもっとリユース傘の広報をしておくべきだったことや、梅雨入りが遅かったこともあるのではないかと考える。2018年は6月5日梅雨入り、梅雨の時期の降水量（地域平均値）162％であったのに対して、2019年は6月27日梅雨入り、梅雨の時期の降水量（地域平均値）112％であった。

補足データとしては、学年別利用者数で2018年度3回生利用者が35名であったのに対し、2019年度は4回生以上の利用者が20名、2018年度2回生利用者が36名であったのに対し、2019



年度3回生（2018年度2回生）利用者が31名と合計20名減少した。その一方で、1・2回生利用者が2018年度に比べて増加している。

4. 学んだこと・今後の課題

2018年度と2019年度の利用状況を比較した結果、新入生の入学時期からチラシ、ポスターを利用しながら広報を行うのが効果的であると分かった。前期は新歓や梅雨入りが重なること等から広報中心の活動を行い、後期は利用者満足度を維持、向上するための勉強会等の活動を実施すると、次年度の利用者数増加に繋がるのではないかと考える。

現在、リユース傘を知ったきっかけについて調査ができていない状況である。より効果的な広報を実施するためにも今後は調査できる状況を作っていくべきだと考える。

また、今年度はリユース傘を新たに20本追加した。今後は破損、紛失等がないように維持管理を徹底して実施し、リピーターの増加を図る必要がある。

そして、来室者にセンターの取り組みやボランティアに興味を持ってもらえるような働きかけをしていきたい。

5. 経　費

チラシ用コピー用紙（B5サイズ500枚）　215円

〈報告者：吉田　樹〉

事　業　名	Re-Use 傘プロジェクト in 瀬田（継続企画3年目）
日　時	2019年4月1日（月）～2020年3月31日（火）
場　所	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
利用者人数	延べ64名
企画メンバー（学生スタッフ）	多田裕貴（理工4）　加藤翔汰（農学4）　山元　樹（理工3）　乾佐枝子（社会3）　東　里音（社会2）

1. 経緯・目的

予期せぬ天候の乱れで傘がなく困っている方に対してボランティア・NPO 活動センターでリユース傘を貸し出す。使用するリユース傘は、学生部（瀬田）に一定期間保管された後、廃棄される傘を譲ってもらったものを活用する。傘の貸し出しをきっかけにボランティア情報やセンター事業を紹介する。傘をきっかけにセンターに来てもらい、センターやボランティアについて知ってもらう機会とする。

2. 概　要

(1) 日時：センターの開室時
(2) 対象：龍谷大学学生・教職員
(3) 広報方法：立て看板・広報紙に挟み込みなど
(4) 傘の貸し出し手順：
①傘を借りに来た方に、貸し出しファイルへ氏名、学籍番号または職員番号を書いてもらう。
②学生スタッフは、選んでもらった傘の個体番号を記入し、貸し出し期間は1週間である事を伝える。
③各傘の返却期限をホワイトボードに書いて、貸出状況を確認する。
④返却期間を過ぎた場合には、メールで連絡をし、返却を促す。
＊貸し出しだけではなく、センター事業やボランティア等を紹介する。

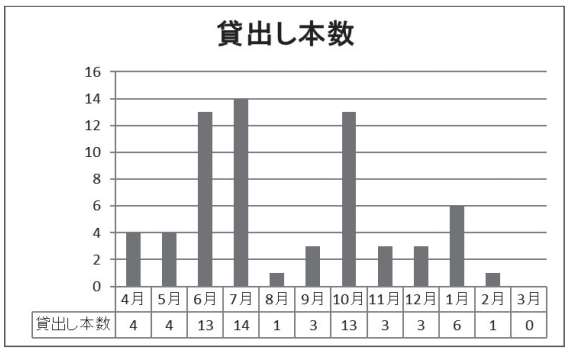
3. 参加者の声・得られた効果など

普段センターに来ない人や来にくい人にとって、立ち寄るきっかけになっている。また、傘の再利用につながっている。

傘の貸出しを行うことで、ボランティア・NPO 活動センターやボランティアに関心のない人に対して、興味を引き出すきっかけとなった。ボランティア・NPO 活動センターの存在を知らなかった人や、センターに入りにくいという人にも、リユース傘の貸し出しをきっかけに、センターがどんなことをしている場所なのかを知ってもらえた。

貸出時や返却時に情報提供をすることで、ボランティアや企画の広報につながった。

リユース傘貸し出しデータ



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
貸出し本数	4	4	13	14	1	3	13	3	3	6	1	0

4. 学んだこと・今後の課題

今年度は昨年度に比べ、貸出し本数が少なかったため、来年度はより積極的に広報を行っていく。傘の紛失や貸出し記録の字が読みにくいなど、管理方法について不十分な点があった。貸した傘の管理が難しく、定期的に貸し出し数と在庫をきちんとチェックする必要がある。今後は利用者への傘返却についての連絡、記録簿の丁寧な記載をこころがける。

5. 経　費

消耗品　　2,260円

〈報告者：東　里音〉

事　業　名	深草キャンパス広報誌「ボラゴン」の発行（継続企画11年目）
日　時	2019年4月1日（月）～2020年3月31日（火）
場　所	深草キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）　学生スタッフ広報班
企画メンバー （学生スタッフ）	土橋茉奈（文学4）　平尾匡識（文学4）　脇坂弾夢（文学4）　米本圭吾（経済4） 坂井　綾（経営4）　寺島安里沙（経営4）　井上愛加（文学3）　木村太翼（文学3） 荻原主基（経営3）　川村有希（政策3）　松田侑子（国際3）　神田瑞季（経済2） 森清文聡（法学2）　世田丈貴（法学2）　川根脩那（経済1）　園原　聖（法学1） 竹内祐人（法学1）　藤原壱成（法学1）

1. 経緯・目的

広報誌「ボラゴン」の発行を通して、本学学生や教職員にボランティア活動の啓発を行い、ボランティアに興味・関心を持ってもらうきっかけを作る。また、ボランティア・NPO 活動センターの周知を行い、センターの認知度向上を目指す。

2. 概　要

以下の通り年間3回、計2200部を発行した。春、夏、秋、冬の年4回を予定していたが、広報誌以外での広報手段についての話し合い期間を設けたため、夏号は中止した。

○春号10ページ（1500部発行）
- ・龍谷大学生のボランティア分野別関心度データ
- ・ボランティア体験談紹介
- ・センター紹介

○秋号8ページ（500部発行）
- ・学生スタッフ企画紹介
  - 深草ふれあいプラザ／南区民ふれあい祭り
- ・ボランティア紹介
  - 環境保全ボランティア／日本語教室ボランティア
- ・新学生スタッフへのインタビュー

○冬号8ページ（200部発行）
- ・ボランティアの魅力紹介
- ・ボランティア適性診断
- ・春休みにおすすめのボランティア紹介
  - ワークキャンプ in 余呉／梅小路プレイパーク／プラネット
- ・ボランティア保険紹介

3. 参加者の声・得られた効果など

・本誌を見てセンターへ来室し、ボランティア相談を受けた学生が6名いた。その学生の中には、ボランティア紹介記事を読んで興味をもった人もいた。

・企画メンバーにとって、記事を作ることで、ボランティアの魅力を再確認したり、ボランティア初心者に対するアプローチの仕方を考えたりする機会にもなった。

4. 学んだこと・今後の課題

・広報誌の表紙は最初に目が留まる部分であるため、表紙から内容が分かるように目次を記すなど、中身を読みたくなるような工夫が必要である。

・記事を作るにあたって大切なことは、一般学生の視点に立つことだと思っている。しかし、これを意識し続けることは難しいため、製作者同士で記事を共有し、初めて記事を読む人の視点で校閲する過程が重要だと感じる。
また、活動報告書の相談者データを参考にし、学生のニーズに応える記事を作っていきたい。

・製作期間が短いと感じるメンバーもいたため、完成度の高い記事を書くために製作スケジュールを見直し、ゆとりを持つ必要がある。また、一人一人がスケジュールを意識して取り組む必要がある。

・広報誌の良い点は、ボランティア募集チラシには載っていない、学生スタッフのボランティアに対するリアルな声を届けられるとこ

ろにあると思う。そのため、より学生スタッフのボランティアの知識や経験が求められる。

5. 経　費

消耗品（A4用紙、インクカートリッジ等）
4,008円

〈報告者：松田　侑子〉

事　業　名	瀬田キャンパス広報誌「Volunteer News」の発行（継続企画11年目）
日　時	2019年4月2日（火）～2020年3月31日（火）
場　所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）学生スタッフ広報班広報誌係
企画メンバー（学生スタッフ）	杉村歩美（社会4）　玉田遼河（社会4）　藤野凌河（社会4）　永井沙季（理工3） 井上沙雪（社会3）　澤　優希（社会3）　田井拓暉（社会3）　村田大河（社会3） 東　里音（社会2）　大和虹輝（農学1）

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）では、2009年度より、センターの活動や企画、また学生スタッフのボランティア体験を親しみやすく記事にし、学生スタッフの目線ならではの広報誌として発行している。

広報誌を配布することで、ボランティア・NPO 活動センターの本学学生や教職員への認知度を高めるとともに、当センターへの来室者の増加を目指し、ボランティア啓発を行うことを目的とする。

2. 概　要

(1) 春号（2000部発行）
　配布時期：4/2～4/8
　内容：センター紹介、学生スタッフの紹介など
(2) 夏号（500部発行）
　配布時期：7/18～7/19
　内容：センターの紹介、入門講座、ボランティア紹介
(3) 秋号（400部発行）
　配布時期：10/28～10/29
　内容：学生スタッフ企画の紹介
(4) 配布・設置場所
　学生スタッフによる手配り､ボラセン会議、説明会、報告会での配布。設置場所はセンター（瀬田）、学生交流会館パンフレットスタンド、V コーナー

3. 参加者の声・得られた効果など

・センター紹介やボランティア紹介の記事から興味を持ち、センターを訪れてもらうことができた。ボランティア記事がまとまっているので、センターでのコーディネートの際にも広報誌を使うことができた。
・学生スタッフがその時々の企画を記事として執筆する。内容やレイアウトで手直しする必要があるため、前もって早めに担当者に依頼をし、修正にあたっては相談するなど、時間のかかる作業となるため、スケジュール管理の大切さをこの企画を通して学んだ。

4. 学んだこと・今後の課題

記事作成から配布までの期間設定に余裕がなく、それぞれが慌てて作業することが多々あった。より良い記事を作成するためにも、時間に余裕のある作成期間を設定しなくてはならない。広報誌作成の日程や発行数、作成過程にお

ける問題点をまとめて期間設定に反映しておくことが必要である。今年度は作成する班員が少ないこともあり一部の記事を広報班以外の学生スタッフにも協力してもらった。連絡をこまめに取ることで作成時期にも間に合い、メンバーが少なくても作成できるということがわかった。

配布に関して、時期により人が集まらないこともあったが、他の企画と合同で広報を行うことで配り手を集めることが出来た。

広報誌は学生スタッフ全員で協力して作成、配布している。記事作成を協力してもらう、配布を合同で行うことなどは学生スタッフで協力する機会となるため今後も続けていきたい。広報誌を作成する意義や、直接手配りすることの意味を毎年度明確にし、学生スタッフ全体でより良い広報誌を作っていきたい。

5. 経　費

消耗品（インク、A4用紙）　4,264円

〈報告者：東　里音〉

事　業　名	Let's ボランティア（継続企画10年目）
日　時	2019年7月18日（木）・19日（金）12時35分～13時25分（昼休み）
場　所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
企画メンバー（学生スタッフ）	樋上翔太（理工3）　頼田翔平（理工3）　石川秀凱（社会3）　奥村　遥（社会3） 木村卓真（社会3）　正中菜帆（社会3）　瀬戸山瑠衣（農学3）　青山友香（社会2） 赤木宏斗（社会2）　近藤真佑華（農学2）　安原拓真（社会1）　小谷悠真（農学1）

1. 経緯・目的

(1) 時間に余裕のある夏季休暇中に何か新しいことにチャレンジしてみたいと思っている学生にむけて、休暇中に行くことのできるボランティアを広報することで、ボランティアに参加するきっかけを提供し、ボランティアに興味を持ってもらえるようにする。

(2) ボランティアには興味はあるがセンターには行きづらいと感じている学生に対して、学内の人目に付きやすい場所（食堂前）にブースを設け、ボランティア情報に触れる機会を作り、ボランティア参加の後押しをする。

(3) 他の班係や企画と積極的に連携し、広報活動を活発に行う。

2. 概　要

日時：7月18日（木）、19日（金）　昼休み

場所：食堂前、センター

食堂前にブースを設け学生を呼び込み、夏休みに行くことのできるボランティアを分野ごとに数種類用意し、ブースに立ち寄った学生にボランティア紹介を行う。また、興味を持ってくれた学生に対しては、センターに誘導してさらに詳しくコーディネートを行う。

ボランティアは、昨年度学生スタッフが夏季休暇中にボランティアに行った内容をまとめたノート「夏ボラ2018」に掲載されている中から夏らしいものを中心に数種類選び、紹介する際に写真を見せるなど活用する。

同時期に、広報誌配布と大津祭ボランティアの募集を行うので、協力して広報活動を行う。

3. 参加者の声、得られた効果など

【ブース来場者6名、センター来室者2名】

・チラシを受け取ってくれる学生が多く、学生のボランティア参加への関心があることがわかった。こちらから働きかけると学生も応えてくれるため、センターで来室者を待つだけでなく、こちらからの積極的な働きかけは効

果があると考える。
・紹介するボランティアを絞り、食堂前にブースを出したことにより、時間がなくてセンターに来れない人にもボランティアを紹介できた。

4. 学んだこと・今後の課題
・2日目は降雨のためか来室者が少なかった。また、ブースを出すか、出さないかの判断が遅れたため、活動を開始する時間が遅れた。企画時に雨の可能性を考慮しておかなくてはいけない。
・学生にチラシを配った際に、ブースまでの呼び込みができておらず、チラシを配る人と呼び込みをする人を分けるなど、ブースへの呼び込みをするよう学生スタッフに確認しておくことが必要だ。
・センターでのコーディネートでもそうであるが、学生スタッフが紹介したボランティアに実際に学生が行ったのか把握できない。コーディネートした学生に対し、アンケートを渡して後日回収するなど、活動に対する効果を検証できるようなしくみを考えていきたい。

5. 経　費
支出なし

〈報告者：青山　友香〉

事　業　名	第97回龍谷祭への出展（深草）（継続企画18年目）
日　程	2019年11月2日（土）～11月4日（月）
場　所	深草キャンパス22号館107教室（展示）、4号館前（模擬店）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
来場者人数	展示：520名／模擬店：540食
企画メンバー（学生スタッフ）	［展示］玉川隆明（文学4）　村井俊介（文学4）　吉田　響（文学4） 下岡祥人（社会4）　冨上弥生（政策4）　木村太翼（文学3）　吉田　樹（法学3） 川村有希（政策3）　武村祐資（政策3）　樋口大輝（政策3）　松田侑子（国際3） 森日奈子（文学2）　黒﨑雄太（経済2）　安本大輝（法学2）　世田丈貴（法学2） 早川歩伽（文学1）　永野凌平（経営1）　林　新　（経営1）　石井翔大（法学1） 園原　聖（法学1）　小林初音（国際1） ［模擬店］中野優太（文学4）　織田香朱美（政策4）　松岡俊希（法学3） 佐々木大悟（政策3）　神田瑞季（経済2）　西野亜優（経済2）　松尾宗次朗（経済2） 山﨑迅一郎（経済2）　福島麻斗（政策2）　濱田　葵（文学1）　川根脩那（経済1） 竹内祐人（法学1）　谷垣俊弥（法学1）　藤原壱成（法学1）

1. 経緯・目的
今回の龍谷祭における出展（展示、模擬店）コンセプトを企画メンバーで協議したところ、今年度のボランティア･NPO 活動センター（深草）の目標が「年間来室者数300名越え」であることから、その目標を達成するために「龍谷祭を当センターの認知度向上を図る機会とする」ということで一致した。また、本企画は例年、展示と模擬店とで異なるコンセプトで実施されてきたが、今年度はひとつの企画として一体感を作り出すために、展示・模擬店の両方に通ずる上記の目的を設定した。

これらの経緯で、以下の3点を実施目的として当企画を行うに至った。
・多くの龍谷大学生にセンターを認知させ、年間目標の達成につなげる。
・展示を通じて、ボランティアや身近な問題に対する興味・関心をもってもらう。
・模擬店を出店し、その利益を寄付金または活動資金に充てる。

2. 概　要
■展示『学びを発掘！～ボラセンミュージアム～』

展示タイトルにあるように「博物館」をイメージした展示物の製作を進めた。展示ブースとしては、センターの紹介をする「ボラセンブース」、ゴミの廃棄・分別に焦点を当てた「ゴミ

問題ブース」、フェアトレードや留学生の声をまとめた「国際ブース」、福祉マークを始め、様々なマークを紹介する「マークブース」、来場された方が災害や防災について考え易く工夫された展示をする「災害・防災ブース」、小さな子どもでも楽しめる「子ども向けブース」の6つを設置した。その他にも、展示会場内で直近の台風19号被害への募金活動を実施した。

■模擬店『ボラセン特製シューアイス天ぷら』
内容　シューアイス天ぷらの販売
価格　2個300円
トッピングには、チョコ、抹茶、はちみつ、黒蜜、きな粉を用意した。

3. 参加者の声・得られた効果など

■展示来場者の声
・見て触って体感できる内容が多く、面白かった。素敵な工夫と凝縮された情報によって楽しく勉強できた。
・自分もボランティア活動をしているので、いい刺激になった。
・熱心に説明してくれて、各ブースで紹介していた問題への関心が高まった。

会場内で実施したアンケートでは上記のような感想が多く見られた。今年度は模造紙だけに頼らず、展示物に来場者の注意を引く工夫を多く取り入れたため、小さな子どもにも学びやすいものとなった。来場者の傾向としては、龍谷大学生より一般の方が多いことが分かり、クイズラリーに参加している人がほとんどであった。また､広報手段として効果的であったのは、龍谷祭のパンフレットへの掲載であり、クイズラリーの対象会場になっていたことも大きな影響力を持つことが分かった。その他にも、受付や外回りに利用した看板を見て来場したという方も多く、龍谷祭パンフレットを含む当日広報が来場者数増加につながると考えられる。展示会場内で実施した台風19号被害への募金箱を設置することで、3日間で26,602円という額となり、多くの来場者の方の協力を得ることができた。

■模擬店購入者の声
・美味しかった。
・トッピングを1個ずつ変えられるのが良かった。

3日（日）と4日（月）は初日の評判を聞いて来て下さった方が多かったので、センターの認知度向上に貢献できたと考えられる。利益の一部（30,000円）は企画メンバーで話し合い、台風19号被害への募金に充てることにした。

4. 学んだこと・今後の課題

■展示
企画メンバーでブースを決定する際に、展示内容の方向性が明確でなかったため、ボランティアに直接つながる展示にすることができず､「ボランティア・NPO 活動センター」としての展示としては不足であったと感じる。アンケートの中にも､「他のボランティアに関する展示を行っている団体との違いがあまり分からない。」という意見が見られた。来年度はセンターならではの展示を意識し、積極的にボランティア情報を入れることが求められる。
また、今年度は製作に多くの時間を費やしてしまったため、初めて龍祭展示に関わった企画メンバーへのアプローチが不十分であった。この問題は長期休暇の有効活用をすることで、製作期間を前倒しすることで解消されると思われるので、次年度に引き継いでいきたい。

■模擬店

材料や機材等で大幅な費用の出費があったため、今後は借用する機材の価格を事前に龍谷祭実行委員に聞き、用意できる物は事前に用意すべきであると考える。その他に、今年度は油を使用したが、その油の使用について、油を十分に熱する、また、熱した油を冷ます時間に多くの時間を要することや、調理器具の清掃に手間がかかる等の問題が多々生じたので、油を使用しない商品との比較・検討を引き継いでいきたい。

5. 経　費

消耗品（展示用模造紙等）　9,943円

〈報告者：世田　丈貴、松尾　宗次朗〉

事　業　名	第97回龍谷祭への出展（瀬田）（継続企画17年目）
日　時	2019年10月26日（土）・27日（日）〈展示〉10時00分～17時00分 〈模擬店〉10時30分～16時00分
場　所	瀬田キャンパス2号館多機能室1、2（展示）／体育館横（模擬店）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
来場者人数	来場者数（展示）291名（1日目125名・2日目166名） （模擬店）214食　販売
企画メンバー （学生スタッフ）	橋本昌尚（農学4）　中川和謙（理工3）　二木亮英（社会3）　瀬戸山瑠衣（農学3） 青山友香（社会2）　堤　花成（社会2）　平井美来（社会2）　安原拓真（社会1） 川上賢人（農学1）　小谷悠真（農学1）

1. 趣旨・目的

(1)「ひろがり」をテーマに「ボラセンの存在」、「ボラセンの魅力」、「ボラセンの活動」や、「ボランティアの魅力」、「ボランティアの活動」、「ボランティアを通しての学び」を来場者にひろめると共に、来場者に対してセンターの活用や、ボランティアへの参加を促す。

(2) 龍谷祭に向けて展示製作を全員で進めることで、学生スタッフ自身がボランティアやセンターへの理解を深める。

(3) 模擬店も含めその運営を協力して行うことで学生スタッフの組織力・団結力の向上を目指す。

2. 概　要

(1) 展示

場所：2号館1階　多機能教室1・2

内容：①ボランティア・NPO 活動センターの活動紹介（動画での紹介）
- センターの役割について
- 学生スタッフとは
- 班係紹介
- 企画紹介(大津祭、コミュニティなど)

②ボラセン事業について
- センター事業とは
- ボランティア入門講座
- 東日本大震災復興支援ボランティア
- 国内体験学習プログラム・海外体験学習プログラム
- コーディネーション力検定、サークル情報交換会、ボランティアリーダー養成講座

③ボランティアについて紹介する展示
- 夏休みボランティアまとめ
- ボランティアコーデネートスペース

④体験型・参加型コーナー
・新聞紙スリッパ
・防災クイズ
・ポストイット「オリンピックボランティアについてあなたの意見をきかせてください」
⑤令和元年台風19号に関する展示

(2) 模擬店
場所：体育館横
内容：フライドオレオ
価格：2個入り200円
個数：2日間で214食
売上金：42,800円
収益：17,980円
利益の使途：台風19号被災地支援に全額寄付

3. 参加者の声・得られた効果など

・水害が最近もあり、タイムリーな話題を通してボランティアをより身近に感じることができ非常によかった。(本学学生)
・こんなに多くのボランティアがあることを知れて、とてもよい経験になりました。もっと積極的にボランティアに参加したいと思いました。(一般)
・学生さんの若いパワーを頼もしく感じました。40代の母親ですが、私にも何かできることがあるのではないかと考えさせられました。皆さんの活動にとても刺激を受けました。(一般)

展示でのアンケートに上記のような記述があったことから、趣旨目的のボラセンの活動や、ボランティアの魅力、ボランティア活動、ボランティアを通しての学びを広められたのではないかと考える。

4. 学んだこと・今後の課題

・模擬店のシフトに学生スタッフが時間通りに来ないことがあった。
・控え室に食材を保管せずセンターに置いていたため、途中で食材がなくなり、販売を一時中断することとなった。センターに食材を保管する場合、センターに取りに行ける時間を確認しておくべきだった。
・展示物の模造紙にふりがなをふっていなかったため、子どもに読みづらかった。
・コーディネーションコーナーを作り、チラシやラック、コーデ机を置いていたが、実際に来場者にコーディネーションをするのは難しかった。今後やり方を考えていきたい。
・学生スタッフ内で情報共有不足があった。
・昨年の課題であった展示での受付の対応の仕方は、学生スタッフに向けてマニュアルを作成したため、スムーズに受付対応することが出来た。
・模擬店では昨年の反省から試作会で分量の把握などをしっかりと行ったため、本番で準備や調理がうまくいった。
・製作物の決定や、龍谷祭実行委員とのやり取り、模擬店の準備などで、一部の企画メンバーに準備の負担がかたよってしまった。次年度のやり方を見直す必要がある。
・勉強会や本番での展示を通し、センターでの学生スタッフの活動についてふりかえることで理解が深まり、知識もつけることができた。また、来場者に話すことで、人に伝える力が身についたと思う。

5. 経　費

消耗品費（模造紙、画用紙など）　4,975円

〈報告者：青山　友香〉

事　業　名	収集ボランティア～自宅に眠っているもので支援ができる！～（継続企画2年目）
日　時	2019年10月16日（水）～2020年3月31日（火）
場　所	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
収集結果	本762冊、CD7枚、書き損じはがき16枚
企画メンバー（学生スタッフ）	西野大輝（理工3）　山元　樹（理工3）　乾佐枝子（社会3）　井上沙雪（社会3） 村田大河（社会3）　高岡宏幸（社会2）　橋本奈津子（農学2）　杉山わかな（社会1）

1. 経緯・目的

子どもを取り巻く社会問題が深刻となっている。社会保障４経費に子育てが含まれるなど、今日、急速に子どもの社会問題が認知されている。子どもの社会問題は様々で、「特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば」では、それに対する多くの活動が実施されている。そこで、龍大生・教職員にこの団体の活動とその背景にある社会問題を詳しく紹介することで、子どもを取り巻く社会問題について興味関心を深めてもらう。この団体への関わり方はボランティア参加や会員登録、事業指定寄付など様々な形があるが、忙しく、時間が取れない人には団体が募集している手軽で間接的な支援ができる物品寄付の仕組みを紹介し、寄付を募る。

2. 概　要

(1) 日時：
2019年10月16日（水）～2020年3月31日（火）
(2) 対象：龍谷大学生・教職員
(3) 内容
①寄付先：特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば
②取組の流れ：
1. 山科醍醐こどものひろばの「チャリボン」で募集している物品（本・書き損じはがき・DVD・CD）を学生・教職員から募集する。
2. 学内での広報活動により、収集ボランティアを知ってもらい、募集している物品（本・書き損じはがき・DVD・CD）のなかで、不要なものが自宅にあればセンターに持ってきてほしいと伝える。
3. 集まった物品を段ボールに詰め、「チャリボン」のインターネット無料集荷を申し込む。

※ charibon（チャリボン）：株式会社バリューブックスが運営している寄付システム。読み終わった書籍、DVD を集めて査定を行い、買取相当額が指定した団体に寄付される。

(4) 広報の方法：
○来室者に対しての広報：口頭説明、チラシ配布
○それ以外での広報：授業前広報、チラシ配布、立て看板、掲示物、食堂前ブース設置
(5) 収集結果：
本762冊、CD7枚、書き損じはがき16枚
すべて団体へ寄付

3. 参加者の声・得られた効果など

・山科区に住む学生が「この地域で育ったが、この団体の存在を知らなかった。地元に目を向けることの大切さを学んだ。」と話してくれた。
・忙しい人でも、家にある物品で支援ができるボランティアの存在を知ってもらえた。
・地域に住む子どもたちへの支援につながった。
・山科醍醐こどものひろばへのボランティアに学生スタッフが継続的に参加したことで、広報時により具体的なことを伝えることができた。
・学生が日本の子どもの社会問題の一面を知ることができた。
・授業前広報を広報手段の中心に据え、先生にお願いして、10分程度の広報時間をいただくことができた。このことにより、多くの学生に私たちの活動に対する思いを直接伝えることができた。
・授業前広報の際、先生に自分たちの思いが伝わり先生から多くの書籍を寄付していただいた。
・物品寄付の情報だけではなく、山科醍醐こどものひろばが募集しているボランティアを紹

介したことで学生とNPO法人をつなぐ架け橋となることができた。

4. 学んだこと・今後の課題

授業内で子どもの社会課題について学んでいる社会学部現代福祉学科の学生向けと、その他の学生向けの2パターンの広報チラシを用意したことで、学生に対して適切な情報を届けることができた。昨年度に比べ、学生の共感や理解が得られ、この企画へアクションを起こす学生が増えたと考える。

想像したより多くの方に協力いただけ、また、受け入れ期間を春期休暇中まで伸ばしたため、受け入れ時のチェックがあいまいになり、書籍数は把握できても、協力人数を把握できなくなってしまった。協力者に記入していただく受付表を用意していなかったのがその原因であった。次回にこの失敗を生かしたい。

本企画への参加者を増やすために活動を可視化できるように取り組んだのだが、そのためには伝える時間が必要になる。限られた授業前広報の時間では無理があるため、他の方法も考える必要がある。

授業前広報を広報の中心とし、学生に思いを直接伝えることができるよい方法であることが分かった。少数の企画メンバーのみでは広報が可能な授業数が限られてしまうため、他の学生スタッフにも協力を求め、幅広い授業、学部へアプローチを図っていきたい。

5. 経　費

なし

〈報告者：高岡　宏幸〉

事　業　名		サークル活動・ボランティア活動情報交換会およびボランティア活動支援	
サークル情報交換会	キャンパス	深草キャンパス	瀬田キャンパス
	実施日時・参加人数	2019年4月17日（水）2団体5名 2019年7月8日（月）4団体7名 2019年9月26日（木）3団体5名 2019年11月12日（火）1団体2名 2020年1月10日（金）2団体6名	2019年4月17日（水）3団体5名 2019年7月8日（月）4団体9名 2019年9月26日（木）2団体5名 2019年11月12日（火）2団体5名 2020年1月10日（金）1団体3名
		いずれも　12時30分～13時00分	いずれも　12時50分～13時20分
	場　　所	ボランティア・NPO活動センター	ボランティア・NPO活動センター
登録団体		手話サークルLEMON／学術文化局マンドリンオーケストラ／学術文化局ボランティアサークル／そでふれよさこいサークル華舞龍／Sept Couleur／手話サークル Do Activity Yourself／マジック&ジャグリングサークル Mist／国際ボランティア学生協会（瀬田）／うみいろ	
ボランティア活動支援	依頼件数	17件	
	調整件数	21件	
	活動件数	5件	
実施主体		ボランティア・NPO活動センター	

1. 経緯・目的

学内のサークルとの関係をつくり、ボランティア活動を促進することを目的とし、学内でのセンターの認知度向上、サークルの地域活動のサポート等のためにサークル活動・ボランティア活動情報交換会の実施、およびサークル

へのボランティア活動支援を行っています。

2. 概　要

(1) サークル登録制度

学内のサークル（宗教局、放送局、学術文化局、体育局、各種委員会や一般同好会）のうちボランティア活動への参加、情報提供を希望するサークルが登録を行っています。

(2) サークル活動・ボランティア活動情報交換会

年間5回両キャンパスで実施し、サークル同士のネットワークづくりやサークル活動に役立つ情報提供を行っています。具体的には、センターの活動紹介、サークルの特技を活かした地域でのボランティア活動について説明、助成金の情報提供等を行っています。

(3) サークルへのボランティア活動支援

自治会等の住民組織、社会福祉施設等、地域の団体からのボランティア活動やボランティア出演の依頼に対し、各サークルへのボランティアコーディネートを行いました。また、地域で活動したいというサークルからの要望についてもコーディネートを行いました。

3. 参加者の声・得られた効果など

「各サークルがどのような活動をしているのかを知る機会となった」「活動資金で困っていたが、参加することで助成金情報を得ることができてよかった」という声が参加学生よりありました。

サークルを紹介した地域の団体からは、「学生のおかげで大いに盛り上がった」「また来てほしい」等の声が寄せられ、学生の活動が地域交流、地域貢献につながっていることがうかがえました。ボランティア出演したサークルの学生からは「出演させてもらって楽しかった」「毎年依頼いただけるのは本当にうれしい」等の感想が寄せられました。

4. コーディネーター所感

情報交換会は、短い時間ではあるものの、他のサークルがどのような活動をしているのか、一緒に何かできないか等を話し合っています。また、その中で、熱心に活動しているサークルからは出費がかさむという話が出たことから、助成金情報の提供、申請の相談にのるなどの形でサークル活動の支援を行いました。

今後も、情報交換会がサークル間の交流ができ、学生にとって有意義な情報が得られる魅力的な場となるよう運営するとともに、サークルのボランティア活動をコーディネートしていきたいと考えています。

サークルのボランティア出演は、日頃の成果を幅広い世代に伝える場となり、サークル活動の幅を広げていると感じます。サークルとセンターのつながりを構築し、幅広いサークル、学生の活動をコーディネートしていきたいと思います。

〈報告者：國實　紗登美
（瀬田キャンパス　コーディネーター）〉

4．活動を通じた地域との連携　～学生と地域をつなぐ～

ボランティア・NPO 活動センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にもつながる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生達へ向けては、地域とつながる活動のきっかけとなるような体験企画を学生スタッフが中心となって提供しています。また、学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。

事　業　名	サマーフェスティバル2019（継続企画6年目）
日　時	2019年8月21日（水）12時30分～16時30分
場　所	京都市深草児童館
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	ボランティア参加者41名（学生スタッフ31名、一般学生10名） 深草児童館参加者58名
企画メンバー （学生スタッフ）	吉田　樹（法学3）　西村志穂（政策2）　福島麻斗（政策2）　田渕真玖（文学1） 濱田　葵（文学1）　川根脩那（経済1）　石井翔大（法学1）　園原　聖（法学1） 竹内祐人（法学1）　谷垣俊弥（法学1）　藤原壱成（法学1）

1．経緯・目的

深草児童館には歴代の学生スタッフが定期的にボランティアに行かせていただいており、2009年に初めて学生スタッフ企画の実施場所の一つとして活動を受け入れていただいた。そのつながりで2013年に中止になった『深草ふれあいプラザ』で行う予定だった防災劇をさせていただくことになった。これが好評であったため、今後も楽しめる企画を一緒に作っていこうと児童館と共同で始めたのがこの企画である。

夏休み中の児童館は通常とは異なり、子ども達は朝から夕方までの長時間、児童館に滞在することになる。そこで、深草児童館に通う子ども達と龍谷大学生を繋げ、「遊び」を通して夏休みの最高の思い出をプレゼントしようと2014年からサマーフェスティバルが始まった。さらに、この企画は初めてボランティアをする龍谷大学生にボランティアの魅力を知ってもらいやすく、次のボランティアにつながりやすいイベントではないかと考え、今年も以下の事項を目的として実施した。

①普段できないような遊びを通して、子ども達に夏休みの最高の思い出を提供する。

②私たち大学生が童心に帰って子どもと同じ目線で楽しみつつ、子ども達にとって大人のモデルであることの自覚を持ち行動する。そして将来子ども達がボランティアを始める契機にする。

③参加学生にボランティアの楽しさに気づいてもらい、次のボランティアへつなぐきっかけにするとともに、本企画を通じて「児童館」という場を知ってもらいたい。

2．概　要

1）プログラム内容

竹水鉄砲／段ボールフリスビー／紙相撲／工作

2）当日までの動き

5月中旬：児童館より正式依頼があり、実施決定

7月上旬：企画メンバーで話し合い、プログラム内容を決定

7月中旬：学内でのボランティア募集開始

8月3日（土）：竹水鉄砲用の竹切り作業

※竹切りに使用した竹は、『NPO 法人竹と緑』から提供いただいた。

8月7日（水）：竹水鉄砲制作

8月20日（火）：リハーサルを行い、最終調整
一般学生6名参加

3）当日のスケジュール

11：00　センター集合。アイスブレイク、勉強会、各プログラムに分かれて打ち合わせ後、児童館へと出発

12：30　深草児童館到着、準備開始

13：30　開会式後､サマーフェスティバル開始。竹水鉄砲、段ボールフリスビー、紙相撲、工作の4ブースに分かれて同時進行

15：20　ゲーム終了後、表彰式と閉会式を行うボランティア参加者にアンケート形式で振り返り

16：30　活動終了、深草児童館で解散

3. 参加者の声・得られた効果など

1）一般参加の学生の声

・子ども達が元気で逆にエネルギーをもらった。
・参加前はいろいろ不安なことはあったが、実際にはそんなことはなくとても楽しく取り組めた。

その他、タイムスケジュールの急遽変更にうまく対応できていたという意見や、竹水鉄砲にもう一工夫あれば良かったという意見もあった。

2）学生スタッフの声

・子ども達の表彰式での歓声や盛り上がりからとても楽しんでもらえたと思う。
・深草だけでなく瀬田の学生とも一緒にボランティアができたことにより、互いの企画に興味を持つきっかけになったと思う。
・例年課題とされていた大幅な時間のズレや交代時のてこずり、ごたつきを改善するために、子どもの各チームに1人ずつ学生を配置した。その結果、交代はスムーズに行うことができ、時間のズレもなく予定通りに終えることができた。

4. 学んだこと・今後の課題

［準備段階］

・企画責任者と副責任者の情報伝達や打ち合わせの仕方が甘く、あるべき姿のミーティングができなかった。
・情報共有が遅くなったことにより、参加を取りやめた一般学生がいた。
・作業のとりかかりが遅く、準備が全体的に後ろに押してしまった。
・前日リハーサルのための準備が十分ではなかった。

［当日］

・学生同士や児童館の職員さんと細かく定期的に情報共有をすることで、各ブースの時間のズレや誤差が発生しても素早く正確に対処できることを学んだ。
・竹水鉄砲を終えた子ども達からクーラーが寒いという声があり、児童館の職員さんから子どもが着替える時間も考えてスケジュールを組んでほしいという新たな課題をいただいた。
・遊びの内容やルールが全体的に淡白であるという声もあったので、遊びの内容や雨天時の遊びなどをもっと深く詰める必要がある。

5. 経　費

テープ、プログラムで使用した備品等に必要な経費は全額深草児童館より支出。(約10,000円)

大学からの支出は下記のみ

A4サイズ用紙500枚（広報用）　240円

〈報告者：西村　志穂〉

事　業　名	大津祭へのボランティア協力（継続企画14年目）
日　時	①2019年 7月 8日（月）～ 8月 2日（金）　学内広報Ⅰ ②2019年 7月 9日（火）　12時35分～13時35分　学内広報Ⅱ ③2019年 8月11日（日）　15時00分～17時00分　事前勉強会・町歩きⅠ ④2019年 9月 6日（金）　15時00分～17時00分　事前勉強会・町歩きⅡ ⑤2019年 9月 8日（日）　15時00分～17時00分　事前勉強会・町歩きⅢ ⑥2019年 9月 9日（月）　15時00分～16時30分　事前交流会 ⑦2019年10月 6日（日）　11時00分～16時00分　巡行サポーター説明会・曳初め ⑧2019年10月12日（土）　台風のため中止　宵宮 ⑨2019年10月13日（日）　7時00分～18時00分　本祭
場　所	・瀬田キャンパス内、深草キャンパス内（①） ・瀬田キャンパス野外ステージ前（②） ・大津祭曳山展示館、大津中心市街地（③、④、⑤） ・瀬田キャンパス学生交流会館カンファレンスルーム（⑥） ・大津市中央市民センター4階大会議室、大津中心市街地（⑦） ・大津中心市街地（⑨）
主　催	特定非営利活動法人　大津祭曳山連盟
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	実人数43名（学生スタッフ20名、一般学生23名） ③ 3名（うち学生スタッフ 1名） ④15名（うち学生スタッフ 9名） ⑤10名（うち学生スタッフ 4名） ⑥21名（うち学生スタッフ15名） ⑦11名（うち学生スタッフ 5名） ⑨39名（うち学生スタッフ17名）
企画メンバー（学生スタッフ）	川崎良祐（理工3）　石川秀凱（社会3）　澤　優希（社会3）　正中菜帆（社会3） 赤木宏斗（社会2）　木ノ上莉那（社会2）　高岡宏幸（社会2）　土肥亮太（社会2） 余村瑠香（社会2）　大屋晴太郎（農学2）　朝野健太（社会1）　吉岡秀太（社会1）

1. 経緯・目的

・国指定重要無形民俗文化財に指定されている大津祭にボランティア参加することで、龍大生に大津祭の伝統・文化について学び、知ってもらう。
・大津祭に限らず、大津祭曳山連盟が行っている地域活性化に関する活動を知り、新たな大津祭企画としての視点を広げる。
・企画メンバーの大津祭についての知識向上を図り、一般学生に大津祭の魅力を広く伝える。

2. 概　要

①学内広報Ⅰ
- チラシ配布
- 学生交流会館エキシビションの展示
- 青志館食堂、青雲館食堂、学生交流会館アッセンブリーへの三角柱設置
- 授業前広報
- ポスター、立て看板設置

②学内広報Ⅱ
- 大津祭曳山連盟の方々のお囃子実演
- ボランティア募集のチラシ配布

③④⑤事前勉強会、町歩き
- 大津祭曳山展示館訪問
- 大津祭曳山連盟の方からの大津祭の説明
- 大津中心市街地（旧大津公会堂、大津市立中央小学校、天孫神社）の散策、見学

⑥事前交流会
- ボランティア参加学生への大津祭の紹介
- 参加学生の顔合わせ、交流

⑦巡行サポーター説明会、曳初め
- 巡行サポーター説明会
- 月宮殿山、源氏山の曳初め

⑨本祭
- 西王母山の曳き手
- 垂れ幕を持ち、観客の安全確保
- 曳山巡行の先導
- 神輿の警備、巡行サポート

3. 参加者の声・得られた効果など

・ただ祭に参加するだけではなく、大津祭の歴史を知ることができる機会があったので、勉強になった。
・昨年も参加し、地元の方が覚えていてくださり、声をかけていただき嬉しかった。
・初めて参加したが、地元の方々と話をすることができ、よい経験になった。
・地域の団結力を感じることができ、祭に参加することで、その一員になれたと実感することができた。
・一日中曳山を曳いて歩き回り疲れたが、地域と一体となって盛り上がることができ、達成感があった。

4. 学んだこと・今後の課題

・昨年､ボランティア申込用紙の不備等により、参加者のLINEグループを作るまでに苦労した経緯があった。そのため、今年は申込用紙の項目を修正した。また、申込用紙を提出してもらった時点でLINEグループに招待することで、情報共有のためのグループづくりは比較的スムーズにできた。
・事前に連絡することが沢山あり、重要な情報が十分にいきわたっていなかった可能性がある。
・活動中、いつ休憩があるか、トイレの場所はどこかなどがわかりにくかったという参加者の声があった｡資料を事前に共有しているが、当日の流れや状況を口頭でも伝える必要があった。
・長い空き時間をどう過ごしてよいか悩んでいたという声があった。学生スタッフ同士で固まり、一般学生に対して十分に対応することができていなかった。学生スタッフとしての自覚を持ち、参加者への声かけなどをする必要があった。
・募集の時点で、祭の時間が長いことや、曳手のボランティアは体力が必要なことなどを丁寧に伝えたほうがよい。
・今年も参加者が多かった。昨年より変更し、事前勉強会を全参加者対象に実施したり、事前交流会でも大津祭について説明したりする事で、参加学生に大津祭についてより深く知ってもらえるように心掛けた。終了後のアンケートにも「学ぶ事もあって楽しかった」「素晴らしい祭りに参加して良かった」などの感想が多数あった。参加学生に大津祭の伝統・魅力などが伝わり、楽しんでもらう事ができたため、この企画の目的は達成されたと考えている。
・今回、大津祭に参加させていただくことで、龍谷大学がある大津市の伝統文化やその魅力、それを受け継ぐ難しさや大切さを学ぶことができた。大津祭曳山連盟の方々には、学内でのお囃子実演や、事前勉強会で大津祭の歴史、意義、特徴などについて説明いただくなど、多くのご協力をいただいた。伝統ある大津祭を非常に大切にされている事、その伝統を若い私たちに知ってほしい、受け継いでほしいという強い思いを感じた。私たち自身もこの思いに共感しており、大津祭曳山連盟の方々を始めとした、地域の方々の思いをしっかりと胸に留め、来年以降もこの企画を続けていきたいと思う。

5. 経　費

消耗品	530円
企画メンバー交通費	3,440円
ボランティア保険	3,300円
合　計	7,270円

〈報告者：土肥　亮太、大屋　晴太郎〉

事　業　名	第29回深草ふれあいプラザへの協力（継続企画9年目）
日　時	2019年10月20日（日）9時00分～16時00分
場　所	藤森神社（京都伏見区深草）
主　催	深草ふれあい事業実行委員会
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	52名（一般学生21名　学生スタッフ31名）
企画メンバー（学生スタッフ）	玉川隆明（文学4）　松岡俊希（法学3）　武村祐資（政策3）　神田瑞季（経済2）　黒﨑雄太（経済2）　松尾宗次朗（経済2）　山﨑迅一郎（経済2）　森清文聡（法学2）　世田丈貴（法学2）　平尾萌衣（政策2）　福島麻斗（政策2）　田渕真玖（文学1）　濱田　葵（文学1）　早川歩伽（文学1）　川根脩那（経済1）　永野凌平（経営1）　林　新（経営1）　石井翔大（法学1）　園原　聖（法学1）　竹内祐人（法学1）　谷垣俊弥（法学1）　小林初音（国際1）

1. 経緯・目的

『深草ふれあいプラザ』は、深草地域の団体（小学校、消防署、警察署、児童館、社会福祉協議会など約40団体）が集まり、互いに交流することで深草地域への愛着と世代間や地域間の結びつきを深めるためのイベントである。

私たち学生は同世代の人と関わる機会が多い一方で、他世代の人と交流する機会は乏しい。世代間や地域間の交流が盛んな深草地域であっても、学生などの若い世代の参加が少ないように感じられる。そこで、ボランティア・NPO活動センター（以下、センター）がこのイベントに関わらせてもらうことで、龍谷大学生と地域の方々が交流できる機会を設けることができ、参加者自身が深草地域の一員であることを認識できる場になると考えた。特に以下の3点を目的として実施した。

・龍谷大学生が地域のボランティアに関わることで、他世代のコミュニティに参加できるきっかけにする。
・事前に勉強会で深草地域について知ってもらうことで、自分の大学がある地域に関心を持ってもらう。
・センターの活動などを発信できるブースを設け、深草地域の方々にセンターのことを知ってもらう。

2. 概　要

○事前勉強会『ふれあいの集い』

ボランティア参加学生に10月15日または17日にセンターへ集まってもらい、活動当日の説明を兼ねて深草地域の歴史や名産品を伝えて興味や関心を持ってもらう『ふれあいの集い』を実施した。その時使用したスライドは、企画メンバーが調べ出してオリジナルのものを作成した。

○イベント当日

以下のイベント運営の補助やセンターのブース運営を行った。

・地域の方が運営している模擬店の販売や、看板での案内、ごみ分別、くじ引き等各種ブースの補助
・センターのブース出展（展示ブースと子ども遊びブース）
・着ぐるみの着用及び補助
・ステージプログラムの一部である「5学区対抗戦」の司会と補助

3. 参加者の声・得られた効果など

ボランティア参加者がどのようにしてこのボランティアを知ったかアンケートを取ったところ、42%もの人が昼休みのチラシ配りで知ったというデータが出た。積極的にボランティアの呼びかけをすることで一般学生の増加につながる事が分かった。活動については、参加学生から次のような感想があった。

・初めてのボランティアだったが、すごく楽し

めた。
・子どもから高齢の方までいろいろな人との交流ができたし、ボランティア同士の交流もあって楽しかった。
・また来年も参加できたらいいなと思った。
・地域のお祭りで、つながりを感じられた。

今年は過去で一番多くのボランティア参加学生数を達成する事ができ、その中のほとんどの人が参加しての満足度が高かった。また、感想にも「また参加したい」「いい経験になった」という声が多数寄せられており、ボランティアの啓発や最初の一歩を踏み出してもらうために実施した企画としては、私たち学生スタッフにとっても一般学生にとっても有意義なものになったのではないかと感じた。

4. 学んだこと・今後の課題

去年から反省点に挙げられている休憩に関しては概ね12時前後の想定の時間帯に取る事ができたが、模擬店のピークと自分達が取りたい休憩時間帯が重なってしまい、なかなかスムーズに交代することができなかった。

前日までの作業に関しては夏休みに入る前に役割分担をしておく事により、準備期間を長く

取る事ができた。余裕を持って準備できたので、当日が近づいてもあわてる事はなかった。

また、広報については、チラシ配りのほかにも立て看板や通りがかりで知るなど様々な方法で知られる可能性があるため、出来る限り色々な方法、媒体を通じて広めていく努力が必要だと感じた。

5. 経　費

展示物作成用消耗品（プラダン購入）	3,179円
子どもブース用お菓子	1,447円
合　　計	4,626円

〈報告者：黒﨑　雄太〉

事　業　名	スペシャルオリンピックスを知ろう（継続企画3年目）
日　時 場　所	事前交流会：2019年10月21日（月）17時30分～19時00分 龍谷大学瀬田キャンパス学生交流会館カンファレンスルーム ボランティア体験：2019年11月2日（土）10時00分～13時00分 エースレーン近江八幡（滋賀県近江八幡市出町）
主　催	スペシャルオリンピックス日本・滋賀
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	事前交流会：8名（うち学生スタッフ6名） 運動会当日：17名（うち学生スタッフ9名）
企画メンバー （学生スタッフ）	中川和謙（理工3）　頼田翔平（理工3）　田井拓暉（社会3）　余村瑠香（社会2） 近藤真佑華（農学2）　家原美月（社会1）　井尻由梨香（社会1）

1. 経緯・目的

私たちはこれまでの企画から、健常者も知的障がい者もともにスポーツを通して垣根なく楽しめることを知った。しかし、スペシャルオリンピックスの認知度は、まだまだ低いと感じたため、スペシャルオリンピックスの存在を龍大生に知ってもらう機会としてこの企画を実施する。

健常者も知的障がい者も一緒に楽しめるスポーツを通じて交流を図り、相互理解を深める。そして、今後どのような関係性をつくっていけばよいのかをみんなで考えるきっかけにしたい。

2. 概　要

(1) 事前交流会・説明会内容

・参加者間での交流

・スペシャルオリンピックスについての説明

・参加する上で気をつけること

(知的障がい者との接し方など)

参加者間での交流は、企画メンバーが担当し、スペシャルオリンピックスについての説明と、参加する上での注意事項については、スペシャルオリンピックス日本・滋賀の藤川氏と檜山氏にお話しいただいた。

(2) ボウリング大会でのボランティア体験

・アスリートとボランティア学生が二人一組のペアになり交互に投球を行い、2ゲームを行った。

・スコアの高かった上位3組のペアを表彰した。

・昼食は、スペシャルオリンピックス日本・滋賀に提供していただき、レーンごとに食事しながら楽しく交流した。

・ボウリング中に使う応援グッズをレーンごとに協力して作製してもらった。

・アスリート、学生ボランティア、関係者など、約100名が集まり、それぞれのペア、レーンごとに楽しく活動することができた。

3. 参加者の声・得られた効果など

・アスリートの方々と一緒にゲームや応援をして、大いに盛りあがった。

・普段関わることの少ない知的障がい者の方々と交流し、ゲームを楽しむことができた。

・最初はお互い緊張していたが、明るく笑顔で接すると初対面のアスリートの方々も笑ってしゃべってくれるようになり、うれしかった。

・知的障がい者の方々と話したり、交流する機会は少ないので、非常によい経験になった。

・障がいがある方との交流を今までしたことがなく、このボランティアに参加するまでは不安で心配していたが、まったくその心配は杞憂で、むしろ一緒にゲームを楽しめた。

・ボウリングでストライクが出た時など、うれしかったり、興奮したりして、一緒に感動を分かち合うことができた。

・障がいのある方とどう接したら良いのか不安だったがこのボランティアを通していろんな話ができ、仲良くなることができた。

4. 学んだこと・今後の課題

・ボランティア募集期間が短かったため、十分に広報できなかった。昼休みに食堂前でのビラ配り、センターに来室した一般学生に参加を募る、授業前広報を行う等のほかに、一般学生の参加を促す方法をいろいろ工夫する必要がある。

・ボウリング大会当日と深草龍谷祭の日程が重なり、一般学生の人数が予定していたよりも少なくなった。

・昼食をとる際、会話が止まってしまい、黙々と食事をする人もおり、アスリートとボランティア学生が話しやすくなるよう、企画メンバーから働きかけをすればよかった。

・各レーンのアスリート参加者の数を把握しきれておらず、人数調整のため、開始の時間が遅れた。あらかじめ当日参加する人数を把握し、欠席者の連絡をスムーズに行うことが必要である。

・アスリートとボランティア学生が二人一組になって競技を行ったことにより、アスリートと学生の距離が縮まり、一緒に競技をしているという一体感が生まれた。スペシャルオリンピックスが目指しているユニファイドスポーツ（障がいのある人とない人が混合チームを作り、スポーツを通じてお互いを理解し支えあう関係を作る取組み）を行えたと思う。

・今回の企画が、参加した学生にとって、障がい者と関わり、お互いを知り合うきっかけとなった。またスポーツを通して、一緒に楽しんだり、協力できるということを知ってもらえたと考えている。今後も、このような機会を提供いただいたスペシャルオリンピックス日本・滋賀との関係を持ち続け、より多くの方々にスペシャルオリンピックスとアスリー

トに対する理解を広めていきたい。

交通費	3,710円
合　計	7,685円

5. 経　費

消耗品（応援グッズ作成用）　3,975円

〈報告者：余村　瑠香〉

事　業　名	南区民ふれあいまつり「ちびっこひろば」へのブース出展（継続企画5年目）
日　時	2019年11月10日（日）10時00分～15時00分
場　所	東寺（教王護国寺）
主　催	南区民ふれあい事業実行委員会
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	20名（一般学生3名、学生スタッフ17名）
企画メンバー（学生スタッフ）	中川寛喜（経済3）　樋口大輝（政策3）　西村志穂（政策2）　平尾　萌衣（政策2） 福島麻斗（政策2）　田渕真玖（文学1）　濱田　葵（文学1）　早川歩伽（文学1） 竹内祐人（法学1）　谷垣俊弥（法学1）　藤原壱成（法学1）

1. 経緯・目的

現在の龍谷大学ではゼミなどでまちづくりに関わり、地域住民と接することが多い学部もあるが、そういった機会が少ない学部もある。そんな学部生にもボランティア活動を通して地域に関心を持ってもらい、地域住民の方々と交流できる場を提供したい。

東寺で開催される「南区民ふれあいまつり」は、住民の交流や愛着意識を高めてもらうためのイベントで多くの来場者があり、世界遺産を会場に開催されるのは他のボランティアにはない魅力であると考える。そのため、以下のことを目的にブース出展を行う。

・「南区民ふれあいまつり」のうち、子ども向けの『ちびっこひろば』で工作や遊びのブースをセンターから出展し、歴史ある東寺で地域住民とふれあえる活動として龍谷大学生へ参加を呼び掛け、今後のボランティアのきっかけにしてもらう。
・ブースに足を運んでくれた子ども達にゲームやものづくりを通して、龍谷大学生とお祭りの思い出を作ってもらう。

2. 概　要

『ちびっこひろば』にて、以下のブースを出展した。

(1) 空気砲の的当て

画用紙で作った的を、ペットボトルの空気砲で倒していくゲーム。的は3つ設置しておき3発中、倒せた個数によって景品であるアメ・ラムネなどを配布した。

(2) 虹色望遠鏡

学生と子ども達が会話をしながら、最後の仕上げである画用紙に絵を描いてもらい、紙コップに貼り付けた。

これらの活動内容に対してシフトを組み、ブース運営という形で子ども達にルール説明や誘導、一緒に作業を行うことをボランティア内容とした。

3. 参加者の声・得られた効果など

○参加者の声

・たくさんの子ども達が来てくれて、楽しそうだったし、ボランティアしている側も楽しかった。
・ボランティアの活動だけでなく地域の方々との交流、ふれあいも重要であると学ぶことができた。

・他の参加学生をはじめ、地域の子どもから大人まで様々な方と交流できたことが楽しかった。
・機会があれば他のボランティア活動にもどんどん挑戦したい。

上記の声から、地域の方々との交流だけでなく、参加者間でも交流ができたこと、また、参加者アンケートから地域のお祭りなどのまちづくり分野への参加意欲を感じることもできた。

今回は、当日までの作業を一人一人が時間を見つけて取り組んだり、企画メンバー以外の学生スタッフの協力もあったので、工作準備については余裕をもって完成することができた。

4. 学んだこと・今後の課題

○当日
・遊びの空気砲では、行列の整理ができておらず、最後尾が分からなくなっていた。今回はボランティアの人数が少なかったので、コーンを置くなどわかりやすくする工夫が必要だった。
・空気砲の景品としてお菓子を用意していたが、小さい子どもは飴が食べられないなど、保護者の方が気にしていたので、経費が余っていれば飴だけでなくラムネなど増やせるとよかった。
・工作の虹色望遠鏡では名前から想像がつきにくく、何を作っているのかわからず迷っている方がいたので、口頭で説明をするなど対応できたが、事前に説明書きなど用意しておくとよかったと思った。
・虹色望遠鏡を完成した状態まで準備していたため、子ども達が絵を描くだけになり、去年ほどの関わりができていなかった。

○準備
・南区についての資料を作ろうと試みたがまとまらず、チラシと合体することにしたため、チラシ完成に時間がかかり広報期間が2週間しか取れなかった。このことも影響したのか、今回の一般参加者は3名と少なかった。
・他の企画や班ミーティングが重なっており、本企画のミーティングをする時間を取れず、共有しきれないことがあった。放課後など、集まれる時間を少しでも設けるべきだと感じた。

5. 経　費

南区民ふれあい事業実行委員会より必要経費が支出されたため、経費なし。

〈報告者：平尾　萌衣〉

事　業　名	「防災・減災そなえパークの日」へのブース出展（継続企画6年目）
日　時	事前交流会：2020年3月6日（金） 当　日：2020年3月8日（日） ※新型コロナウイルス感染拡大防止のためイベント中止
場　所	滋賀県営都市公園びわこ文化公園 催し物広場及び公園管理事務所
主　催	滋賀県営都市公園びわこ文化公園 指定管理者 びわこ文化公園ゆうゆうパートナーズ
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加予定人数	交流会：23名（うち学生スタッフ　15名） 当　日：26名（うち学生スタッフ　15名）
企画メンバー（学生スタッフ）	樋上翔太（理工3）　木下綾華（社会2）　高岡宏幸（社会2）　南　佳奈（社会2） 渡中新太郎（農学2）　井尻由梨香（社会1）　林　大誠（社会1）　大和虹輝（農学1）

1. 趣旨・目的

近年、日本では、地震、そして台風や豪雨などを含め､災害が多く発生している｡地域の人々や龍谷大学生に防災知識を学んでもらうと同時に、防災・減災への意識を高めてもらいたいと思い、びわこ文化公園で行われるイベント「防災・減災そなえパークの日」にブースを出展する。

この企画は2014年から継続して実施している企画である。今年は、台風15号や台風19号による暴風や大雨が人々の生活に甚大な被害を及ぼした。そこで今回のブースでは、水害、風害への防災減災知識を重点的に扱い、参加してくださった方への学びの機会とする。また、自然災害は他人事ではなく自分の身に起こり得る事として、防災意識を少しでも高めてもらいたいと考えている。昨年度までは参加者である地域住民同士をつなげるという目的でブース運営を行っていたが、今回は、防災知識・防災意識を高めることを主な目的として企画した。

2. 概　要

(1) 打ち合わせ

びわこ文化公園、協力団体との事前打ち合わせ

第1回：2019年12月4日（水）

第2回：2019年12月19日（木）

第3回：2020年1月18日（土）

(2) 広報手段

授業前広報、チラシ配り

(3) 準備

イベント当日は、①避難所再現ブース②展示コーナーの運営を予定していた。そこに龍谷大学生にボランティアとして参加してもらいながら、共に学べるように考えた。

①避難所再現ブース

・ブースに未完成な日本の避難所を再現

・避難所で起こると想定されるトラブルについて参加者に考えてもらうコーナー（クイズなど）

②展示コーナー

・災害時に役立つ知識

・スフィア基準について

・海外（イタリア）と日本の避難所の比較

避難所の比較については、意見や感想を書いてもらう。

(4) イベントの中止とその後の対応について

①2020年2月26日（水）中止の連絡が入る。

イベント主催者である、びわこ文化公園より、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、中止するという連絡を受けた。

②中止の連絡を受けて、参加予定だった一般学生、学生スタッフには、LINE のグループを利用して連絡をした。LINE グループに入っていない一般学生には、メールで連絡をした。

③打ち合わせ等で協力していただいた団体には、個別でお礼の連絡をした。

④今後について

2020年度の龍谷祭の展示ブースにて、避難所再現や展示をする予定である。

3. 学んだこと・今後の課題

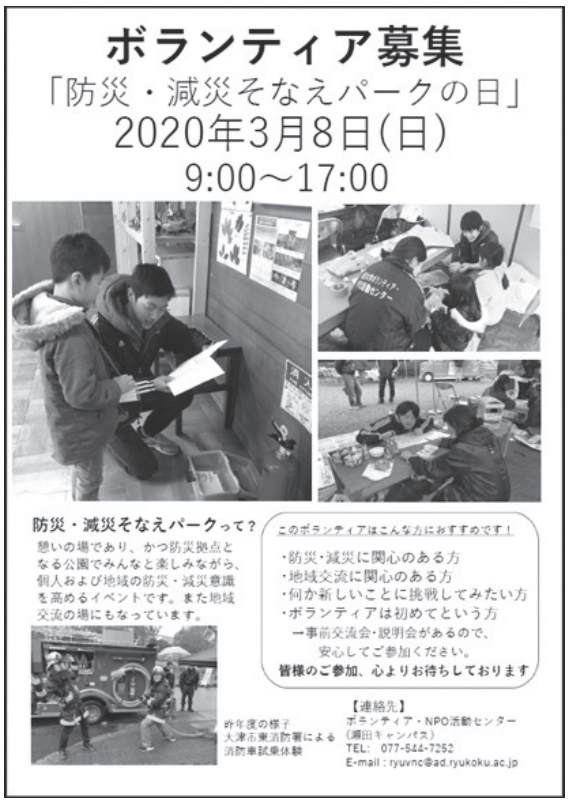
(1) ミーティングについて（チームづくりについて）

・ミーティングをする前に、前もってやる事を情報共有して、アイデアをあらかじめ考えてもらうようにした。意見をすぐに出してもらう事が出来て、効率よくミーティングを進め

ることができた。
・企画を最初からつくっていくことの大変さを実感した。
・企画を進めていくうえでメンバー同士の苦手分野を補い合うことが大切だ。みんな得手不得手があるので、お互いのことをわかって活動できるのは学生スタッフの強みだと思う。
・メンバーそれぞれが担当する仕事や役割に一生懸命取り組めた。
・メンバーの仲が良く、遠慮せずに意見の言える場になったのが良かった。悩んだ時にみんなに相談して解決できたことが良かった。

(2) 学生スタッフの感想
・最初は、自分のアイデアをあまり自発的に言えなかったが、ミーティングを重ねることで積極的に自分のアイデアを言えるようになった。
・これまでボラセンの活動に参加していたものの、受け身なことが多かったが、上回生として積極的に動くことができた。
・自分のチームの中での役割がわかった。
・自分の得意、不得意が少しわかった
・一回生がたくさん意見を述べてくれる中でみんなの意見をまとめていく、合意形成の難しさを身をもって体験できた。
・新しいことを考えるのは苦手だと感じていたが企画で案を考えることに楽しさを感じた。
・要点をまとめて説明するのが苦手なんだと気が付くなど、自己分析の機会でもあった。

(3) 防災について
　この企画をよりよいものにするために、防災に関してのセミナーに参加した。外国籍の方が



(学内募集のために作成したちらし)

避難所にいる時を想定した研修であったが、英語など他言語を使わなくても、「やさしい日本語」で話したり、ジェスチャーを使えばコミュニケーションをとることが出来るとわかった。また、避難所運営の難しさも学べた。

4. 経　費

　支出なし

〈報告者：渡中　新太郎〉

5．共催・協力事業

ボランティア・NPO 活動センターには、さまざまな地域団体や行政などから事業への協力依頼があります。センター内でどのように関わっていくのかを検討し、多くの場合、学生スタッフやコーディネーターが協働でそれらの依頼に対応しています。

事　業　名	NGO スタディツアー合同説明会
日　時	夏季ツアー説明会：2019年6月15日（土）13時30分～17時00分 冬季・春季ツアー説明会：2019年11月30日（土）13時30分～17時00分
場　所	夏季説明会：龍谷大学大阪梅田キャンパス　研修室 冬季・春季説明会：龍谷大学大阪梅田キャンパス　研修室
実施主体（共催）	特定非営利活動法人　関西 NGO 協議会、株式会社　マイチケット 龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	夏季84名／冬季・春季40名

1．経緯・目的

スタディツアーは、主に途上国で NGO が活動する現場を視察し、ボランティア活動などを行うツアーのことで、体験学習や現地の人々との相互理解を目的としています。一般のツアーとの最も大きな違いは、旅を通して「学ぶ」ことです。さらに、体験プログラムやホームステイなど現地の人々と直接交流する機会が設けられており、社会課題に触れることができることが魅力の一つです。センターには学生から「海外でのボランティアに関心がある」「長期休暇中にスタディツアーに参加してみたい」「どんなスタディツアーがあるのか知りたい」という相談が多くあります。そこで、センターの提携団体である（特活）関西 NGO 協議会と、海外体験学習プログラムで各種手配に携わっている㈱マイチケットとの共催で、スタディツアーを企画している NGO を集めて合同説明会を2009年度より年2回開催しています。

2．概　要

(1) 13：45～14：00

「スタディツアーって何？あなたにぴったりのスタディツアーって？」

スタディツアーの概要についてマイチケットスタッフより説明していただきました。

(2) 14：00～16：30

「各ブースで説明を聞こう！」

参加 NGO（別表）が会場内にブースを設け、それぞれの企画するスタディツアーについて説明し、参加者は関心のある団体のブースを訪問し、団体の取り組みやツアー内容などを個別に質問していました。出展団体以外のチラシや団体パンフレット等も設置し、参加者が手に取って比較・検討できるようにしました。

(3) 16：30～17：00　プレゼント抽選会

出展団体のオリジナル商品や、旅行券が当たる抽選会が実施されました。

	ブース出展団体
6月	・ICYE ジャパン（インドネシア） ・アクション（フィリピン） ・アクセス－共生社会をめざす地球市民の会（フィリピン） ・ウータン・森と生活を考える会（インドネシア） ・CFF ジャパン（フィリピン・マレーシア） ・ACE（インド） ・ツナミクラフト（タイ） ・PHD 協会（ネパール・ミャンマー） ・緑の地球ネットワーク GEN（中国） ・ジュレーラダック（インド） ・アジアキリスト教教育基金 ACEF（エクアドル） ・マイチケット ・関西 NGO 協議会（NGO 相談員） 計13団体

11月	・ICYE ジャパン（インドネシア） ・アクション（フィリピン） ・アクセス－共生社会をめざす地球市民の会（フィリピン） ・ウータン・森と生活を考える会（インドネシア） ・CFF ジャパン(フィリピン・ミャンマー・マレーシア) ・アーシャ＝アジアの農民と歩む会（インド） ・WE ジャパン（フィリピン） ・ツナミクラフト（タイ） ・PHD 協会（ネパール・ミャンマー） ・緑の地球ネットワーク GEN（中国） ・環境保全ネットワーク京都（台湾） ・マイチケット ・関西 NGO 協議会（NGO 相談員） 計13団体

3. 参加者の声・得られた効果など

・海外で活動している人や、スタディツアーに参加している学生の話が聞けて、意欲が高まった。
・直接団体の方や、過去に参加した学生の話が聞けてよかった。不安が解消された。
・いろいろなブースを一度に回ることができ、1日でいろいろなツアーの話しが聞けるのがとても良い。
・今までに説明会を利用して2つのツアーに参加しています。
・金額も高く時間もないので、今まで無理だと思っていたが、まずは一度話だけでもと思って行動してみた。想像以上に楽しかった。来てよかった。
・スタディツアーでなければ経験できないことがたくさんあるのだとわかった。
・現地でのコミュニケーションや、言葉の不安が解消されて、行ってみようと思った。

4. コーディネーター所感

ツアーに参加した学生は1週間ほどの短い期間に多くのことを体験し、考え、そして帰国後も問題意識を持って学生生活を送っています。日本国内ではできないような経験を通して視野を広げ、世界の問題から、日本の社会問題へと視線を広げていくようになります。海外にいくことにハードルを感じる学生も多いですが、この説明会でツアー引率者や参加経験のある学生から直接､生の声をきくことで､スタディツアーに関心をもつきっかけとなるように、今後も多くの学生にこの説明会を広報していきたいと思います。

〈報告者：上手　礼子
（瀬田キャンパス　コーディネーター)〉

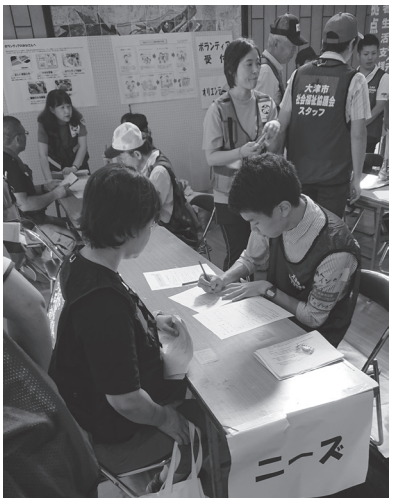
その他報告

センターでは、これまで報告してきた事業以外にも、提携団体や地域団体からの呼びかけに基づき、以下の学内外の取り組みに参加しました。

■セーフトラベルセミナー

NGOや大学などを対象に、海外スタディツアーを実施する際の注意点などを学ぶセミナーを実施し、当センターを含む11団体計18名の参加がありました。

開催日：2019年4月18日（木）
場　所：キャンパスプラザ京都6階　龍谷大学サテライト教室
内　容：第一部【基礎編】感染症、旅行保険、旅行業法の基礎知識についてのレクチャー
　　第二部【事例報告】事故、感染症、食など、具体的な場面でどのような対応がなされたかの事例共有
共催団体：（特活）関西NGO協議会、㈱マイチケット



■大津市総合防災訓練

大津市社会福祉協議会からの呼びかけで、学生4名、コーディネーター1名が参加しました。

開催日：2019年9月15日（日）
場　所：大津市立藤尾小学校
内　容：災害ボランティアセンター開設・運営訓練、
　　避難所運営訓練の災害用仮設トイレ設置、段ボールベッド組み立ての訓練など
主　催：大津市　危機・防災対策課

■第16回親子でふれあう秋まつり

親子でふれあう秋まつり実行委員会からの呼びかけで、学生9名が参加しました。

参加日：2019年9月15日（日）
　　※このイベントは14日（土）・15日（日）の2日間開催
場　所：ヌヴェール愛徳修道会（京都市伏見区内）
内　容：やきそば、かき氷などの模擬店や、ヨーヨー釣りなど遊びブースの手伝い
主　催：親子でふれあう秋まつり実行委員会

■深草・稲荷学区合同　令和元年度 総合防災訓練

深草学区自主防災会からの呼びかけで、学生9名が参加しました。

開催日：2019年11月17日（日）
場　所：京都工学院高校　体育館及び周辺区域
内　容：避難所運営（災害情報提供や安否確認の掲示や案内など）、車椅子介助デモンストレーション、グッズ（新聞紙スリッパ、ツナ缶の照明）作り、非常食配給訓練　など
主　催：稲荷学区・深草学区　自主防災会

6．体験学習プログラム　～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO 活動センターは、学生が長期休暇を利用して国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地 NPO・NGO などとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

異文化間における相互理解と共生を学ぶ海外プログラムでは、本学教員が企画・引率する1プログラムと、NPO・NGO 団体が実施する海外のスタディツアーの中から学生にとって学びの多い3プログラムを選定し、企画しました。しかしながら、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、春季プログラム2プログラム（アメリカ、インド）を直前に中止することとなりました。教員、団体、旅行会社の各方面から多くの協力を得て準備をすすめてきており、参加予定の学生もおおむね半年をかけて渡航準備をしていただけに非常に残念な結果となりました。

国内プログラムでは、地域のさまざまな課題に目を向け視野を広げることのできる内容で、本学の専任教員が企画・引率するものを1プログラム、センターのボランティアコーディネーターが地域の団体と協力して企画するものを1プログラム実施しました。

全コースが終了した後に実施する参加学生によるふりかえりを兼ねた報告会までを一連のプログラムとしており、報告会を通じてプログラムで得た経験を共有し、各自がさらに学びを深める機会とするだけでなく、報告を聞きにきた学生が、次回プログラムへの参加を考えるきっかけにもなっています。

	プログラム企画者・団体	行　先	テーマ	実施日時・期間	人数
国内	社会学部 教授 筒井のり子	福島県福島市、 南相馬市、本宮市、 郡山市	福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～	2020年 2月16日（日）～ 2月20日（木） 5日間	14名
	ボランティア・NPO 活動センター	滋賀県近江八幡市、 甲賀市	近江八幡スタディツアー ～ボーダレスなまちづくり～	2020年 2月25日（火）～ 2月28日（金） 4日間	14名
海外	ツナミクラフト	タイ王国	インド洋大津波からの復興タイ験	2019年 8月30日（金）～ 9月7日（土） 9日間	3名
	NPO 法人 環境保全ネットワーク京都	台湾	台湾の自然・文化体験エコツアー	2020年 2月22日（土）～ 2月27日（木） 6日間	4名
	社会学部 准教授 坂本清彦	アメリカポートランド	全米一住みたいまちポートランドの持続的なまちづくり	2020年 3月1日（日）～ 3月8日（日） 8日間 （新型コロナウイルスの影響により中止）	6名
	NPO 法人 アーシャ＝アジアの農民と歩む会	インド共和国	インドで学ぶ SDGs～インド農村の持続可能な取組み～	2020年 3月1日（日）～ 3月10日（火） 10日間 （新型コロナウイルスの影響により中止）	4名

○国内体験学習プログラム／福島県【春季】

■参加学生	
野中　美希（政策学部　政策学科　4年次生）	河合　政明（文学部　仏教学科　3年次生）
朝倉　勇人（社会学部　現代福祉学科　3年次生）	大橋　寛海（社会学部　現代福祉学科　3年次生）
村上　大樹（文学部　哲学科　2年次生）	阿部　更紗（経済学部　現代経済学科　2年次生）
今井　　杏（経済学部　国際経済学科　2年次生）	西垣　柚依（経済学部　国際経済学科　2年次生）
濱田　　葵（文学部　臨床心理学科　1年次生）	早川　歩伽（文学部　臨床心理学科　1年次生）
石井　翔大（法学部　法律学科　1年次生）	朝野　健太（社会学部　現代福祉学科　1年次生）
稲岡　和穂（農学部　食品栄養学科　1年次生）	岸野　洋祐（農学部　食料農業システム学科　1年次生）
■テーマ、企画・引率教員	
福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～ 社会学部教授　筒井　のり子	
■協力団体	
阿部農園、NPO 法人　うつくしまブランチ、社会福祉法人　南相馬市社会福祉協議会 NPO 法人　デイさぽーとぴーなっつ、株式会社　小高ワーカーズベース　ふたばいんふぉ　他	

■行程　　2020年2月16日（日）～2月20日（木）　5日間

日　程	時　間	活　動	場所／ゲスト
2月16日（日）	8：00	京都駅八条口出発	ホテル京阪京都グランデ前に集合
	18：30	福島市着	ユースゲストハウス ATOMA・泊
	19：00	夕食＆ゲストからの話	NPO 法人うつくしまブランチ
2月17日（月）	8：30	宿発	
	8：50	阿部農園訪問	阿部農園の梨畑
	9：40	福島市発、浪江町へ移動	
	11：40	浪江町着・昼食休憩	なみ・まち・まるしぇ等
	13：00	浪江町内を視察	小林　奈央子さん
	15：10	東京電力廃炉資料館の見学	
	15：50	ふたばいんふぉを訪問	
	17：40	宿着・ふりかえり	農家民泊　いちばん星
	19：00	夕食	
2月18日（火）	8：20	南相馬市内の視察	いちばん星の星さんの案内
	10：00	デイさぽーと　ぴーなっつ青田由幸さんのお話	市民情報交流センター・中会議室（原町駅前図書館に併設）
	12：00	昼食休憩（お弁当あり）	同センター・クラフトルーム
	13：00	高橋　美加子さんのお話	同センター・中会議
	14：10	お土産買う時間	道の駅南相馬
	14：30	小高区周辺を自由散策	
	15：00	小高ワーカーズベース和田智行さんの話	小高パイオニアヴィレッジ
	17：00	宿着・ふりかえり	
	19：00	夕食	
2月19日（水）	9：00	南相馬市観光協会のボランティアの方と合流	
	9：00	南相馬市内の見学	
	11：00	南相馬市市社会福祉協議会に訪問	
	15：30	郡山温泉へ出発	国道6号線を南下し、郡山へ
	18：30	郡山温泉着	郡山温泉
	18：40	夕食	
	19：30	入浴・休憩	
	21：00	郡山温泉発	車中泊
2月20日（木）	8：00	京都駅八条口着	
	8：15	深草キャンパス着	

野中　美希
（政策学部　政策学科　4年次生）

福島を訪れて、まだ終わっていないということを強く感じた。震災を伝えよう、街をよりよく変えていこうとされている方々の想いを知ることができた。街には帰還困難区域として柵で閉ざされてしまった震災当時から変わらない様子や、山積みになったフレコンバッグ、放射線測定器があった。何気ない会話にも震災の話題がでて、心の面でも消えることはないと実感した。政治や経済の問題も絡み、人ごとではないと思った。

また課題からビジネスを創出するという取り組みで何事もポジティブに捉えて行動されていて、楽しいからこそ行動できると伺うこともできた。

実際に見て聞くことでわかることがあり、無知は罪であるという言葉が響いた。情報に溢れ、それぞれ守るものが違う中で、様々な意見や知識を知り、客観的に物事を捉え長期的に見て考える力が必要だと感じた。今後震災からさらに時が経ち、知らない世代も増える中で伝えるのは私たちの使命だと考える。

宿舎での夜ご飯。たくさんの品数で味付けも素材も毎食美味しかった

河合　政明
（文学部　仏教学科　3年次生）

参加の目的は今の福島を見て、学び、それを伝えることです。

4日間で多くの方々と話し合うことができ、私にとって今後の考え方が変わったきっかけにもなりました。除染された土が入ったフレコンバッグが町からなくなり、町に人が戻ってからが「復興した」と言いたいと思います。そのためには、日本全体での協力が必要ではないでしょうか。IT 社会が到来すると言われていますが、人間でしかできないことも残されています。私達が伝えることがより多くの人々の心に伝わることを願います。

南相馬市防災センターで当時の話を聴く様子

朝倉　勇人
（社会学部　現代福祉学科　3年次生）

福島県を訪れて、津波による被害に加えて原子力発電所（以下、原発）の事故の影響が大きいと感じた。町中にあるフレコンバッグ、また居住できない原発近辺の地区をバスで通った時に、当時の生活の雰囲気を感じる家や建物がそのまま残っており時が止まっていた。

この福島スタディツアーで、震災によって失ったものやそこから未来に向かっての取り組みを、震災を経験した様々な立場の方から話を聴くことを通して、自分がどのように生きるかについて深く考えるきっかけになった。

今回で3度目の参加だが、町の景色に慣れてしまったことが怖いと感じた。

震災から約9年が経ったが、オリンピックや万博等によって復興がおろそかにされている部分も感じた。インフラの整備を進めるだけが復興とは呼べないと思う。原発のことや災害について同じ日本に住んでいる私たち自身が今一度震災について知ることが必要であり、なによりも実際に現地を訪れて感じてほしいと思う。

消防署の2階に非常持ち出し品を展示していた。ここまで準備が必要だと初めて知った

大橋　寛海
（社会学部　現代福祉学科　3年次生）

今回のスタディツアーで3回目となる福島への訪問。複数回福島に来ているからこそ分かるようないい意味での変化や福島の魅力ももっと見つけたい、というテーマで参加した。

阿部農園から今年ようやく運び出されるフレコンバッグの作業の様子

今年参加して一番良かったと思ったことは阿部農園でずっと放置されていたフレコンバッグの山が遂に運び出されたということである。掘り起こされた場所には山砂が入れられるということで一概によかったとは言えないのかもしれないが、運び出される様子を見ることができて安心した。

福島を訪問して毎回思うのは、お話ししてくださる方々は本当に福島が好きなのだということである。

我々は勉強をしに行っているので震災のことを聞くのは当然ではあるものの、福島を被災地としてしかとらえないのも間違いであると感じている。福島を被災地ではなく観光地として“スタディ”関係なしに旅行に行きたいと今回の参加で強く思った。これからも福島に関わり続けることを大切にしていきたいと思う。

村上　大樹
（文学部　哲学科　2年次生）

今回スタディツアーに参加し、震災からの復興の現状や福島で暮らす人々の思いなど、これまで報道等で見聞きしていた以外のことを多く学んだ。

バリケードを張られ一歩先は立ち入り禁止となっている区域や、汚染土をいれたフレコンバッグが当たり前のように残っている現状を目の当たりにし、復興はまだまだ先の見えないものであると感じた。一方で、震災から9年の月日を経て、人々の生活が改善された部分や福島で暮らす人々の温かさ、新鮮でおいしい魚介類など、ポジティブな一面に触れることもできた。こうした経験を経て私にできることは、今まで以上に復興への取り組みやそこに住む人々について知り、発信していくことではないかと思う。ありのままの福島の様子を多くの人に知ってもらい、関心を持ってもらうことが福島から離れた地にいる私にとって、復興のためにできることであると考えた。これからも福島、震災に関心を持ってできることを考えていきたい。

大平山から海岸沿いを見た風景

阿部　更紗
（経済学部　現代経済学科　2年次生）

私が福島スタディツアーに参加した理由は、震災を風化させないための一員になりたいという気持ちと、今後また災害が起きたときに少しでも役に立ちたいと思ったからです。

1番記憶に残っているのは、バスで帰還困難区域を走っている間に見た景色です。道路脇には真っ黒なフレコンバッグが積まれ、全ての道が「帰還困難区域」と書かれた看板とバリケードで封鎖されていました。放置されたままの家々には生活のあとがそのまま残っていました。メディアでは、まるで大部分で復興が着実に進んでいるかのような報道もなされますが、人が戻れない町、山積みのフレコンバッグ、枯れ草だらけの海岸などの景色を見て、私は東北が復興しているとは思えませんでした。

今回のツアーで、「現地に足を運び、自分の目で見て、話を聞くこと」の重要性を改めて感じました。ツアーを通して得たもの・感じたことを忘れず、これからも時間をかけて学びつづけていきます。これまでの学生生活で1番、考えさせられ、心を動かされ、モヤモヤの消えない、自分にとって非常に意味のある体験になりました。

バリケードで封鎖された浪江町立津島小学校へ続く道

今井　杏
（経済学部　国際経済学科　2年次生）

私が、初めて福島県を訪れて考えたことは2つあります。

まず1つ目は、震災はまだ終わっていないということです。仮置き場に積まれているフレコンバッグや帰還困難区域の景色は震災当時からまるで時間が進んでいないように感じました。震災から9年たちましたが、まだ残されている課題が多くあることを学びました。

2つ目は無知の怖さです。原子力発電所が建設された背景など知り、ただ大きい震災が起こったから仕方が無いということでは済まされない問題であると思いました。私も選挙権を持つ一人としていつ加害者側になってもおかしくありません。ただメディアやSNSの情報を鵜呑みにするだけではなく、真実を理解しようとする姿勢が必要です。

福島県の復興が一日でも早く進むよう、実際に現地を訪れ感じたことを、身近な人々に伝えていきたいです。そして、同じような悲劇を生まないよう務めることが残された私たちの使命ではないのでしょうか。

バスの中から見た、「震災を乗り越えて復興」の文字。
力強いメッセージであった

西垣　柚依
（経済学部　国際経済学科　2年次生）

この福島スタディツアーにおいて、印象に残った場所がある。福島の浪江町という津波をもろに受けた元港町である。町を一望できる大平山に登ると、時が進んでいると感じる漁港と、震災直後と錯覚するような荒れ地が一緒になっており、パラレルワールドに放り出された感覚になった。

このスタディツアーではいろんな場所に行き、いろんな立場の方の話を聴いた。同じ県の中でも住む地区によって、自身の立ち位置によって全く意見が違った。同じ場所でも時間軸が異なる、それぞれの意見に整合性が無い、という状況で、情報が整理できなかった。

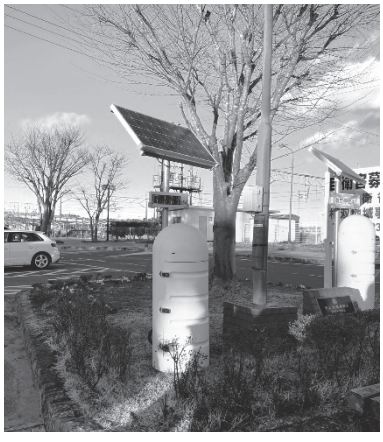
しかし、被災者の方の話を聴く中で、スタディツアーで話してくれた方々は、自身の立場から感じた被害について、私達にヒントを伝えてくれたのではないだろうか。そう仮定し、この方の話はどのようなヒントになるのだろうかということを考えながら話を聴くことで、ただ話を体験談として聴くのとは違った視点で話を聴くことが出来た。

阿部農園に埋められていた汚染土

濱田　葵
（文学部　臨床心理学科　1年次生）

私は今回初めて福島に行くことが出来ました。このツアーを通して震災から9年経った今でも知られていないことが多くあることを実感しました。4日間で様々な立場の方からお話を聴くことができ、福島の震災当時の状況や現状を知って、今まで同じ日本で起きていた事について、大切な事を何も知らずに過ごしていた事に気付きました。

私が特に考えさせられたことは、復興という言葉についてです。通る道路のすぐ側には、除染で出た土を詰め込んだフレコンバッグがたくさん並んでいたり、放射線量を測る測定器が所々に置かれていたり、それらが無くならないと復興が終わることにはならないのかなと思いました。しかし、フレコンバッグの処理がいつ終わるのかは決まっていない現状と原発の中でも作業が行われている状況の中でも、港町や町の所々では復興が少


小高区に行った際に見かけた駅の前に置かれている放射線量を測る測定器

しずつ進んでいて、これからどのように変わっていくのか自分の目で見て感じていきたいと思いました。

実際に福島に行く事でしか感じられない、自分の目で見た国道6号線からの光景や浪江町の海の景色など、初めて知った事故の詳細、福島の現状、私が感じた福島の良いところなどを身近な人に伝えていけるようになりたいです。そして、自分自身の福島や震災・原発事故についての知識をもっと深めたいです。

早川　歩伽
（文学部　臨床心理学科　1年次生）

私がこのツアーに参加したのは、被災地の今を自分自身の目で見て、現地の方々の生の声を聞きたいと考えたからである。初めて訪れた福島県では、9年たった今でも震災の爪痕が色濃く残っていた。

津波の被害をうけた地域を目の前にした時はどこまでも広い田畑が広がる光景に言葉を失った。福島県は地震、津波の被害だけで無く原発による影響も受け、まだ今も帰還困難区域がある。様々な場所で目にした汚染土を入れた土のう袋はその数に恐怖すら感じた。

今回私が目にした被災地は至る所で様々な工事が行われており、復興に向かって進んでいると感じられたが、その一方でまだまだ沢山の課題がある。このツアーでは沢山の被災者の方々から貴重なお話をお聴きし、自分の無知さを痛感した。このツアーを通して、私がこれからできることは聴いたこと、見たこと、学んだことを自分の周囲の人々に伝えるということであると考える。

津波の被害を受けた福島県南相馬市鹿島地区

石井　翔大
（法学部　法律学科　1年次生）

私が今回の福島スタディツアーで印象に残っていることは3つある。

1つ目はうつくしまブランチの渡辺氏が言っていた「無知は罪である」ということだ。渡辺氏は震災当時福島市に住んでいたが、避難しなかったそうだ。しかし当時、今の知識があれば必ず逃げていたと強く感じていた。自分も災害が起きた時に情報不足で後悔しないようにいろんな情報に目を向けようと感じさせてくれた。

NPO 法人うつくしまブランチさんに震災当時についてのお話をしてもらっている

2つ目はデイさぽーとぴーなっつの青田氏のお話だ。その中で「てんでんこ」という言葉が出てきた。その言葉を私の理解している意味と違う意味として青田氏は理解していた。このことに気づき、自分の知っている情報が全て正確であるとは限らないということを感じることができた。

3つ目は小高ワーカーズベースの和田氏のお話だ。課題が山積みしていることを課題解決ビジネスや研究のネタが豊富と捉えていらっしゃった。このように自分の頭を柔らかくしてくれる例を挙げてくれて、自分の考えに固執しすぎるのもよくないなと思えた瞬間だった。

この福島スタディツアーで学んだことを意識して日々の活動に生かしていこうと強く感じた。

朝野　健太
（社会学部　現代福祉学科　1年次生）

今回福島スタディツアーに参加して、現地の方の様々な思いを知ることができた。

私は話を聞く中で「復興とは何か」について改めて考えた。原発事故によって避難していた人が地元に戻ってくることができれば復興なのか、倒壊した建物が再建されたら復興となるのか、人によって復興の定義は違ってくると思う。そんな中で思い思いの復興に向かって進んでいく姿を知り、福島の人の強さを学んだ。

県内をバスで移動していると汚染された土砂

が入っている黒いフレコンバッグという袋が山のように積み重なっている場所が多く見られた。山積みになりどこで最終処分をするのかも決まっておらず、ただ置かれているだけだった。私にはあの黒い袋が人々を寄せつけず、苦しめているようにも見えた。

このスタディツアーからは学ぶことや考えさせられることが多かったので、ぜひ来年も参加して前年との比較、被災者の心境の変化などを知りたいと感じた。

震災当時のままの請戸小学校。体育館の床がへこむなど、震災の悲惨さを物語っている

稲岡　和穂
（農学部　食品栄養学科　1年次生）

ツアー前の福島のイメージは、9年も経っているからそこまで震災の跡は残っていないだろうと思っていた。でも、実際はそうでなかった。建物ひとつない荒れ地には伸びきった雑草とフレコンバッグの山。道ですれ違うのは2台に1台がトラック等の工事用車両。半壊したままの建物。何の変哲もない建物の前に置かれた立ち入り禁止の柵。そんな場所があった。震災はまだ終わっていなかった。でも、新しい堤防や建物も建設されており、着実に復興していることも見て取れた。

ごく普通の建物の前に設置されている立ち入り禁止の柵

実際に目で見て肌で感じた福島は良い意味でも悪い意味でも想像とは全く違うものだった。映像で見るよりはるかに震災の恐ろしさを痛感した。それでも私の中ではどこかまだ人ごとで自分は大丈夫だと思ってしまっている部分もある。だからこそ、この経験を生かして知らないことに興味を持ち知っていく。そして、将来に役立てていきたい。今回福島の方々からたくさんのことを学び、とても良い経験になったと思う。

岸野　洋祐
（農学部　食料農業システム学科　1年次生）

街並みを見ると、国道6号線はきれいに整備されているものの、道路の脇には原発事故で汚染された土が入っているフレコンバッグといわれるものが大量に置かれ、それらを一時的に保存する中間貯蔵施設に向かうトラックや、被災したお店や住宅がその当時のまま放置されていた。本当に自分の住んでいる日本かどうか疑うもので、「ここには居たくない、早くここから立ち去りたい」という感情が沸いた。

南相馬市を視察する際にガイドさんから、黒いガードレールは津波で壊され建て替えられた表示と聞き、高台である場所も黒いガードレールになっているのを見て改めて恐ろしさを感じた。それと同時に、震災当時は1000年に1度の想定外の大災害であり、防災意識や危機管理能力が今ほどではなかったのは当たり前だが、今後30年以内に南海トラフ地震は起こるとされている今、3.11の教訓や一人一人が防災意識を持たなければならないと強く感じた。

そして、東京オリンピックや大阪万博の開催などもあり、東日本大震災は年々忘れ去られている。だからこそ、いい経験だったで終わらせるのではなく、多くの人に今回経験したことを伝えていきたいと思う。

津波に流され建て替えられた際にあえて黒色にしている

○国内体験学習プログラム／滋賀県近江八幡市【春季】

■参加学生	
村上　大樹（文学部　哲学科　2年次生）	土肥　亮太（社会学部　現代福祉学科　2年次生）
早田　有希（社会学部　現代福祉学科　2年次生）	妹尾　柚郁（農学部　植物生命科学科　2年次生）
渡中新太郎（農学部　植物生命科学科　2年次生）	佐藤瑛連菜（短期大学部　社会福祉学科　2年次生）
新谷　朱音（文学部　日本語日本文学科　1年次生）	木村　洸太（理工学部　環境ソリューション工学科　1年次生）
早藤　涼花（社会学部　社会学科　1年次生）	安原　拓真（社会学部　社会学科　1年次生）
喜多　優貴（農学部　植物生命科学科　1年次生）	熊谷　真由（農学部　植物生命科学科　1年次生）
牛山　雅結（農学部　資源生物科学科　1年次生）	西山　佳佑（農学部 資源生物科学科　1年次生）
■テーマ　「近江八幡スタディツアー　～ボーダレスなまちづくり～」	
■協力団体　株式会社まっせ　社会福祉法人しみんふくし滋賀　社会福祉法人グローまちや倶楽部　やまなみ工房　一般社団法人近江八幡観光物産協会 社会福祉法人近江八幡市社会福祉協議会　近江八幡市　　他	

■行　程　2020年2月25日（火）～2月28日（金）　4日間

日	時　間	活動内容	場　所
2月25日（火）	8：00	JR 京都駅八条口出発	JR 京都駅八条口アバンティ前
	9：30	近江八幡市着　宿泊場所へ荷物預ける	MACHIYA INN
	10：00	観光ボランティアガイドの案内によるまち歩き	白雲館集合
	12：00	昼食・休憩	しみんふくし滋賀（野間邸）
	13：00	近江八幡市のまちづくりについてのレクチャーと意見交換会	まちや倶楽部
	17：00	宿泊先での諸注意など・休憩	
	17：45	夕食・食堂ヤポネシア店主からの話	食堂ヤポネシア
	19：00	一日のふりかえり	MACHIYA INN
2月26日（水）	7：30	朝食・ミーティング	MACHIYA INN
	8：30	グループまち歩き	
	10：00	ボーダレスアートミュージアム NO-MA 見学と説明	ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
	11：00	社会福祉法人グローや NO-MA の取り組みについてレクチャー	まちや倶楽部
	12：00	昼食・休憩	
	13：00	しみんふくし滋賀とおやじ連の取り組みについてレクチャー	しみんふくし滋賀（野間邸）
	15：30	八幡堀めぐり	八幡堀
	18：00	夕食	食堂ヤポネシア
	19：00	一日のふりかえり	MACHIYA INN
2月27日（木）	7：30	朝食・ミーティング	MACHIYA INN
	9：00	左義長製作現場見学、祭りの話、製作体験など	白雲館集合
	12：00	昼食・休憩	まちや倶楽部
	13：30	「ほんがら」上映会と意見交換会	島町コミュニティセンター
	16：30	宿泊先へ移動	バス
	17：00	宿泊先　着	MACHIYA INN
	18：00	夕食	食堂ヤポネシア
	19：00	一日のふりかえり	MACHIYA INN
2月28日（金）	7：30	朝食・ミーティング	MACHIYA INN
	8：30	宿泊先出発	バス
	9：00	ラ コリーナ視察・たねやの SDGs の取り組みについての話	ラ コリーナ
	11：00	やまなみ工房へ移動	やまなみ工房
	12：00	昼食（試食）・休憩	
	13：30	やまなみ工房視察	
	15：00	ふりかえり　終了後、やまなみ工房出発	
	17：30	京都駅八条口着・解散	JR 京都駅八条口周辺

村上　大樹
（文学部　哲学科　2年次生）

私は、今回の近江八幡スタディツアーで多くの方と交流、意見交換を行い、近江八幡の町並みの中で活動する中で、ボーダレスとは何かということについて考えることが出来たと思う。その中で、障がいの有無や性別といったボーダーに限らず、世代間や国籍、伝統文化など様々なところにボーダーは存在しているという事を感じた。こうしたボーダーを取り除き、ボーダレスなまちづくりを実現するために、行政や、社会福祉協議会、民間など様々な立場の方が活動を行っている事も学んだ。ボーダレスなまちづくりに私たちが出来ることは、まちづくりへの取り組みを知ること、そして、学生の立場として、自分の専門領域での学びを活かしてボーダレスへの取り組みを考えることである。私は教育を学んでいるので、学校教育や地域学習などで、どのようにボーダレスを実現させていくことが出来るか、今回の経験を踏まえて考えていきたい。

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA で作品を鑑賞する様子

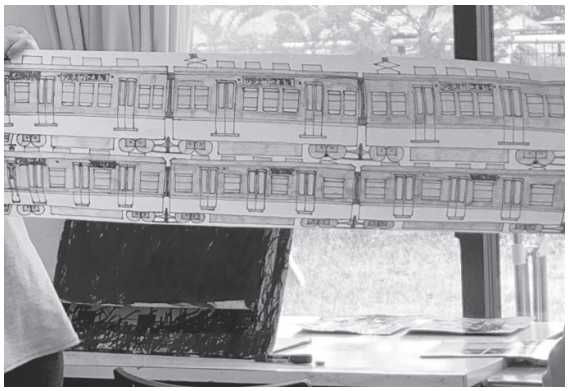
土肥　亮太
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

今回、「ボーダレスなまちとは何か」と考えてみて、大きく2つの意味が見出せました。

1つ目は「文化や景観等を含めて誰からも愛されるまち」です。これを感じたのには、左義長まつり保存会の方の「外部の人の力を得る為に、外部にも情報を発信している」というお話があります。ここから「多くの人が伝統文化を愛し、守っていく為の努力をしている」という事を感じました。

2つ目は「住民各々が、自由に生活できるまち」です。やまなみ工房の職員の方の「この人は何をしているのが楽しいのか、というのを探る事を心掛けている」という言葉が印象に残っています。このような事等から「ボーダレスなまちには、住民の自由な暮らしも必要である」と感じました。

ボーダレスなまちづくりの背景に、様々なボーダーが多様な形で絡んでいる事や住民のニーズを尊重する事の必要性を学びました。完全にボーダレスにしていくことは難しいかもしれませんが、地域等の活動に積極的に参加し、誰もが暮らしやすいまちづくりに少しずつ貢献していきたいです。



やまなみ工房の利用者が描いた電車の絵。広げるとかなりの長さとなる

早田　有希
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

私は今までボーダレスについて深く考えることはなかった。今回参加して、1番良かったと思うことは一緒に参加しているメンバーの意見を聞くことで、自分の学びにつなげることができたことである。具体的には「ボーダレスは自分の居場所があるかどうか」という意見である。この意見は自分では思いつかなかったが、すんなりと自分の中に入ってきた。ここが自分の居場所だと実感できれば、ボーダーに感じることはないと考えたからだ。私にとっての居場所は家族や学校、気の合う友達などが挙げられる。つまり、居場所といってもただ単に場所を指すのではなく、人とのつながりも関わってくるのではないかと考えた。例えば、車椅子を利用する方にとって、道がきれいに整備されておらず移動しづらい場合でも、近くに手伝う人がいればボーダーに感じることはなく、ボーダレスといえると考えたからだ。改めて学びの深いプログラムであったと感じる。

一見通りやすくなった道でも、見方を変えることが大切

妹尾　柚郁
（農学部　植物生命科学科　2年次生）

何に関しても便利なことは良いことではあるが、ただ便利で快適にするだけではより良い町づくりとは言えないということを学んだ。子供や高齢者が使いやすいように段差を少なくし、車椅子に乗った人の為にスロープやエレベーターを整備することはもちろん大切だ。しかし、歴史的景観が長所の町において、その行き届いた便利は時にデメリットになる可能性がある。その町が何を残していきたいのか等をしっかりと把握した上で町づくりをしなくてはいけない。便利さと不便さの塩梅が重要なのだ。障がいがあるからといってバリアフリーに改装された町家を訪れても歴史を感じられないという意見もあるようだ。だれでもその地域の歴史や本来の空気感に触れられるよう、あえて昔ながらの不便さを残すというのもボーダレスなのだとわたしは思う。それには周りの人のサポートが必要不可欠で、その環境をみんなで協力して整えることが町づくりに繋がるのだろう。

便利に改装されつつも町家の趣を残した宿泊施設

渡中　新太郎
（農学部　植物生命科学科　2年次生）

この春季体験学習プログラムに参加して出会った近江八幡の人達は、左義長祭りの準備や自分達の仕事を楽しんでいるように感じた。実際に、左義長祭りの準備をされていた方は、「楽しくなければ続いていない」と話されていた。ラ コリーナ近江八幡で働いている方も「働いている感覚がなく、好きなことをやっていて給料を貰えるのが正直、変な感覚がある」と話されていたのが印象的だった。この楽しさが、近江八幡の伝統や町並みが守られ、発展していく源であり、困難に直面しても乗り越えていく力であると思った。

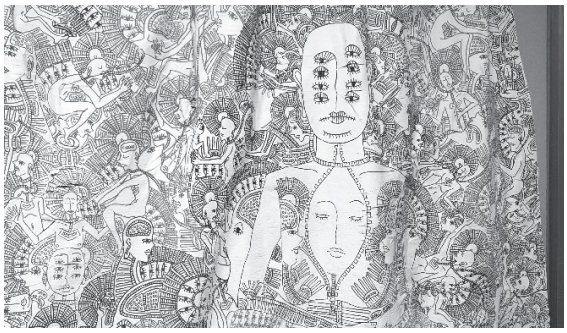
まちづくりには楽しさが必要であるように感じる。障がい者や外国人、移住してきた人にとっては、地域の人と交流が生まれることで、ボーダレスなまちになっていくのだと思う。そのきっかけが祭りやボランティアなど楽しいと思える活動や行事なのかもしれない。今回のプログラムで自分の中に新しい価値観や考え方が加わり、多くの学びを得ることができた。

左義長祭りのダシの材料は、ほとんどが穀物などの食べられるものが使われる

佐藤　瑛連菜
（短期大学部　社会福祉学科　2年次生）

国内体験学習プログラムに参加することで、近江八幡市の町の歴史や町に関わる方の声を聴き、近江八幡市のまちづくりについて知ることができた。近江八幡市を代表する左義長祭りは多世代の方が関わる祭りであり、実際に左義長祭りの左義長のダシを製作している方に話を聞き、祭りの歴史や祭りへの思いを知った。私は祭りとは縁のない環境で育ったため、近江八幡市の町民が祭りに懸ける思いに驚いたが、若い世代に祭りを繋げていく思いは、同時に伝統的な文化を残すことに繋がることを知った。次に印象に残った体験はやまなみ工房の見学である。この法人は、障がいの重さに関係なく、それぞれの障がいや個人に必要な配慮を行い利用者を受け入れている。こうした施設が増えることで障がい者やその家族が安心して暮らすこと

ができる。また、障がい者と共生して暮らすまちづくりができるのではないかと感じた。今回のプログラムを通して、ボーダレスなまちづくりは、様々な世代の方が生活しやすい環境を整えていくことだと感じた。



やまなみ工房の利用者さんの作品。とても大きい

新谷　朱音
（文学部　日本語日本文学科　1年次生）

まちづくりに興味があったので、体験学習プログラムに参加することにした。プログラムのテーマであるボーダレスについて、はじめは深く考えていなかったが、プログラムを通して考え、終えるころには、考えが一転した。

近江八幡市は、かつて城下町や商人の町であった歴史を感じる景観が残されていた。昔ながらのまちなみを残すのと同時に、その土地に住む人が暮らせるように、どのように残して、保存するかは難しい問題である。まちづくりや地域活性に携わる団体には、それぞれが得意とする分野がある。しかし、大きなことを行おうとすると様々な団体との協力が必要になる。そのために、立場や必要とすることが異なることを理解し、心配りをして、話し合うことが大切だと教えてもらった。

個人として向き合い、心配りや対話などのちょっとしたことから、ボーダレスは実現できるということである。そして､心配りや対話は､人と関わるどんな時でも必要なことだ。

明治期の和洋折衷の建築「旧近江八幡郵便局」

木村　洸太
（理工学部　環境ソリューション工学科　1年次生）

今回のスタディツアーは自分にとってとても新鮮で刺激的な体験になりました。まず印象的だったのは街並みでした。街を歩いてみるとただ町家が並んでいるようですが、中にはお店を営んでいたり、ミュージアムがあったりと様々な姿をもった町家がたくさん見つかりました。外見は昔ながらの町屋、しかし中は今どきのおしゃれなお店が広がっています。町家を有効活用したリノベーションにより古きものと現代風のものがうまく調和されていて町全体に一体感を感じました。また、色々な団体の方から話を聞きましたが、その全員が街を大切に思っていると感じました。そういった気持ちがボーダレスなまちづくりに大前提として必要であり、近江八幡市にある伝統的な街並みを残し続けることができている秘訣だと痛感しました。これからはそのことを頭に残しつつ、地元で街並み保存だけでなく、ボーダレスな社会のために自分にできることがないか模索し実行していこうと思います。

映画「ほんがら」鑑賞後、実際に祭に関わっておられる方と意見交換の様子

早藤　涼花
（社会学部　社会学科　1年次生）

私はこのスタディツアーに参加して、近江八幡には「地元愛」が溢れていると思った。そう思った理由は2つある。1つ目は地域の風景や人々を大切にしながら発展させようという近江八幡の人々の意識である。今も近江八幡には江戸時代に建築された建物が多く残っている。そんな街並みを残すべく、町に合ったお店を誘致したり、空き家を地域の人の憩いの場にしたりと様々な取り組みを行っている。2つ目は町の文化継承のためにボランティアがドブ川であった堀を復活させたことだ。かつて水路であった

八幡掘は、高度経済成長期にドブ川になってしまった。そんな堀を一時は埋め立ててしまおうという案もでたが、「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」と主張しボランティアでドブさらいを行い、埋め立て案を撤回させた結果、今の美しい八幡掘がある。

効率化や機械化の波にのまれることなく、近江八幡では自分の町の特色を生かす取り組みをしている。私も自分の町の特色を知りたいと思った。

今も地域の人に愛される八幡掘

安原　拓真
（社会学部　社会学科　1年次生）

まちづくりの様々なあり方について勉強したいと思い、近江八幡の体験学習プログラムに参加した。近江八幡市の街の現状や取り組みについて知ることができた3泊4日だった。今回、参加して、普段あまり接点のない様々な年齢層や立場の方とコミュニケーションをとる機会が得られた。みなさん熱心に話してくださり、私たちの話もしっかりと受け止めてくださった。

体験学習プログラムに一緒に参加したメンバーにも刺激を貰った。毎日の振り返りの中で、見ている視点や角度、価値観の違いで、同じものを見たり聴いたりしても捉え方が異なるということを実感した。それぞれに自分のフィールドを持っており、自分にはない考え方を知ることが出来た。自ら多様な年齢や立場の方と関わる機会を作り、コミュニケーションをとる中で、自分の視野を広げていけるようにしたい。また、このプログラムを通して得たことを内に秘めておくのではなく、積極的に発信したり活動に取り組んで行きたいと思う。

株式会社まっせの田口氏との意見交換の様子

喜多　優貴
（農学部　植物生命科学科　1年次生）

近江八幡市は町家など昔ながらの建物が多く、風情ある景観が魅力的である。また、昔から続く祭がある。これらが地域市民の思いやつながりによって今も存続していることを、まちづくりにかかわる様々な団体の方から伺った。しかし、その担い手となる若者が減っている。地域活性化を計るには地元をはじめとした人と人とのつながりが大切であり、そのつながりがボーダレスなまちにつながっていくと考える。

また、スタディツアーに参加し、障がい者は介護や支援されるというだけでなく、表現者など主体的な一面もあるということに気が付いた。福祉は、マイナスを補うのではなく、一人の人間としての存在意義を高める手段となり、ボーダレスに繋がると考えた。ボーダレスとは何か、どういう状態なのかを一くくりにはできない。考え続ける必要がある。一人一人が意見をもって行動することによって、より深まっていくものだと気づいた。

近江八幡の地域活動について語るおやじ連の方たち

熊谷　真由
（農学部　植物生命科学科　1年次生）

4日間の活動を通して感じたことは、人々の居場所を作ろうとしていることである。特に、

おやじ連について説明を聞いた時に、話をしてくださった方が生き生きとしていたのが印象に残った。自分独りではなく、仲間と一緒に楽しく過ごすことによって生きがいを得ることができ、また、日常生活においても助け合いが生まれているのだと思った。祭りについては、少子高齢化によって伝統を受け継ぐ人が少なくなる中、地域や世代を越えたつながりを保っていくことの大切さを学んだ。地域の伝統を守るためにも、世代を問わずみんなが寄り集まることのできる居場所が必要であると思った。これらの居場所があることによって、住みやすい街に、そして、ボーダレスな街になっていくのだと感じた。

このプログラムに参加して学んだことを、自分たちの住んでいる地域と比較しながら、地域活性化のために生かしていきたい。

左義長祭に向けて作られるダシのねずみ

牛山　雅結
（農学部　資源生物科学科　1年次生）

2月後半に近江八幡市でボーダレスな町づくりをテーマに4日間学んだ。たくさんの意見や考察があり、学ぶことや考えることが多くあった。

今回のスタディツアーで特に印象に残った事柄は、地域での連携だと思う。近江八幡市では左義長祭りやほんがら松明といった地域の神事やおやじ連などの地域の人々のつながりが垣間見えた。私を含め若者は地域の人々とのつながりが希薄だと思う。近江八幡の方々の活動を通してのつながりが少しうらやましく感じた。ボーダレスな町づくりは難しいと私は思う。何をボーダーと捉えてボーダレスにしていくか、対象は誰か、配慮はできているかなどを考えていく必要があると思う。しかし、何をするにしても誰かの力が必要であり、人と人とが手を取り合って活動していくことがボーダレスの第一歩だと考える。

ラ コリーナ近江八幡の風景

西山　佳佑
（農学部　資源生物科学科　1年次生）

私は、近江八幡市での活動を通して、複数のことを学んだ。まずは、出身・性別・年齢を超えて祭りに関われる機会を増やし、幅広い人に祭りを知ってもらうことが、祭りなどの伝統を継承していくための一つの重要な要素となり得るということだ。また、より良い社会を構築していくためには、年齢・性別・障がいの有無関係なく一人一人と対等な人間として関わっていく必要があるということである。そしてSDGsの活動には、ごみの分別など私達ができることも多数あり、自分が関わるという意識を強く持つ必要があるということである。

4日間で、様々な視点でまちづくりを学び、多数の人からの意見を吸収することができた。今回の近江八幡での学びを活かし、大学での学びに繋げ、将来、社会や地域に貢献できるような人間になりたいと考えている。そして、祭りを愛し、地域のよりどころとされている近江八幡市の方々のように自分の故郷をもっと好きになりたい。

環境に配慮したSDGsの取り組みを推進している
ラ コリーナ近江八幡

○海外体験学習プログラム／タイ王国【夏季】

■参加学生	
森本　　心（経営学部　経営学科　3年次生）	山中　梨帆（社会学部　社会学科　3年次生）
福島　麻斗（政策学部　政策学科　2年次生）	
■テーマ、企画団体	
「インド洋大津波からの復興タイ験スタディツアー」 ツナミクラフト	

■行程　2019年8月30日（金）～9月7日（土）　9日間

日　　程	時　間	活動内容	場　所
8月30日（金）	9：30	関西空港集合	プーケット
	11：45	タイ国際航空 TG623関空11：45→バンコク国際空港15：45	
	16：45	乗り継ぎ TG217バンコク国際空港16：45→プーケット国際空港18：05	
	20：00	専用車にてホテル着　夕食時に旧プーケットタウンの街並み保全を見学　【ホテル泊】	
8月31日（土）	9：00	（タイ基本情報を学ぶ）専用車にて移動 ホテル出発	カオラック
	16：30	ホテルからタクシー移動　震災遺構、市場の訪問　夕食 【ホテル泊】	
9月1日（日）	11：00	（児童養護施設訪問）専用車にて移動 ホテル出発 児童養護施設　バーンターンナムチャイ　到着	ナムケム村
	午後	津波避難所兼、ユースセンター　【ユースセンター泊】	
9月2日（月）	全日	（インド洋大津波、タイ最大の被災地ナムケム村滞在、アートによる復興）専用車にて移動 ナムケム村を巡る 漁港、メモリアルパーク、ミャンマー人施設 バンムアン町の旧避難所跡　さをり織り体験 昼食 タクアパ旧市街のアートプロジェクト見学、タクアパ特別支援学校訪問 バーンターンナムチャイにて子ども達と交流会 【ユースセンター泊】	ナムケム村
9月3日（火）	全日	（ホームステイ1日目） ナムケム村出発→バンサンファン（児童養護施設） →アンダマンディスカバリーズ社訪問 タレーノーク村到着 　アクティビティ①　ろうけつ染め体験　【ホームステイ】	タレーノーク村
9月4日（水）	全日	（ホームステイ2日目） タレーノーク村でのアクティビティ② 　マングローブ探検、せっけん作り、おかし作り、屋根づくり 　イスラム衣装体験など。　【ホームステイ】	タレーノーク村
9月5日（木）	午前	（ホームステイ3日目） タレーノーク村でのアクティビティ③ 　マングローブ探検、せっけん作り、おかし作り、屋根づくり 　イスラム衣装体験など。	タレーノーク村
	午後	専用車にて出発→FED（ミャンマー人労働者の子ども達の通う学校を視察）　【ホテル泊】	
9月6日（金）	午前	（ふりかえり） 朝市見学、体験	プーケット
	午後	昼食後出発→マーケットで買い物→空港へ	
	19：00	TG218プーケット19：00→バンコク20：25 TG622バンコク23：59→関空7：30（翌日）	
9月7日（土）	7：30	関西空港着	
	8：30	解散	

森本　心
（経営学部　経営学科　3年次生）

私は、現地にて「人と人との協力」と「取り組むべきこと」について体感し学んだ。タイという国は、バカンスや観光地として世界中から人気のある国だ。スマトラ沖地震発生時には、世界各国の人々がタイに滞在しており被災した。だからこそ、世界各国から支援、協力があり、ここまで復興することができたのだと思う。

被災当初、現地の方々は心理的不安からも働くことを求めており、そこで導入されたのが「手仕事」だ。私たちは「ろうけつ染め」「絞り染め」「さをり織り」「屋根作り」「石鹸作り」などを体験したのだが、どのアクティビティも集中力が必要で、作業中は余計なことを考えられない。このことが重要であり、精神的リハビリに繋がった。

震災から15年の時を経て、現在、持続可能な支援として、教育や職業訓練、防災が重要視されている。津波で大きな被害を受けたにもかかわらず、力強く復興をなしとげているタイの小さなコミュニティを知ることで、これからの未来は自国だけでなく、他国にも目を向けて助け合って生きていかなければならないと感じた。

津波避難場所となる建物に併設されている幼稚園を訪問、視察、授業に参加させてもらった

山中　梨帆
（社会学部　社会学科　3年次生）

私がこのツアーに参加しようと思った理由は、津波被害の支援の在り方について学びたいと思ったからだ。

タイの方と交流している中で印象に残っていることが2つある。1つ目は昭和の日本にタイムスリップしたかのような感覚に陥ったことである。ホームステイした村は日常的に誰かの家で団欒し、村全体が1つの家族のようだった。また、子どもたちの様子を見ても、外で学年関係なく、裸足で遊んでいる姿を見て、伝え聞いた古き良き日本の風景とはこういうものだったのだろうと感じた。

2つ目は支援の在り方について学んだことである。このツアーに参加し、私が今まで持っていた支援の概念が変わった。必要な物資を届けるだけでなく、被災者に寄り添う支援を継続し、被災者自身が自立できるようにサポートする支援を学んだ。日本でもこの考えをもっと取り入れて支援していくべきだろう。ここで得た経験を活かし、今後も支援の在り方について考えていきたい。また、心に響いたタイの方々の温かさを忘れず私も努力していきたい。

ホームステイ先のガイドさんとアンダマンディスカバリーズ社職員ビーさんと海辺で撮った写真

福島　麻斗
（政策学部　政策学科　2年次生）

2004年のインド洋大津波によって大きな被害を受けたタイは被災後、迅速に復興がすすんでいる。海の近くに津波の避難所を作り、6か国語で津波の襲来を知らせる警報器の設置をするなど、タイ国民だけでなく外国人に対する防災も考えられていた。

今回訪れたタレーノーク村は、津波で人口の3分の1の人々が命を落とすなどの甚大な被害を受けたが、その後、村や学校を海から離れた場所や高台へ移転し、村人が主体となって地域づくりをすすめている。そこからは村人たちが主体となって津波被害に向き合うという強い意志を感じた。しかし15年たった今でも津波による課題が残っているのも事実である。津波被災者の墓地には身元不明者の遺体が300体ほど冷凍保存された状態のままになっている。DNA鑑定を行うことで違法労働でタイに入国していることが判明すればその家族が裁かれるという事情からどうすることもできない現状がある。今でも災害の爪痕が残っているという、つらい現実に胸がふさがった。

○海外体験学習プログラム／台湾【春季】

■参加学生	
村井　俊介（文学部　歴史学科　4年次生）	岩畑　広輝（社会学部　社会学科　2年次生）
中原　紘子（農学部　資源生物科学科　2年次生）	三戸呂優美（文学部　英語英米文学科　1年次生）
■テーマ、企画団体	
「台湾の自然・文化体験エコツアー」 NPO 法人環境保全ネットワーク京都	

■行程　2020年2月22日（土）～27日（木）　6日間

日　程	時　間	活動内容	場　所
2月22日（土）	9：40	関西国際空港集合	高雄市
	11：40	中華航空 CI167にて関西空港発	
	14：25	高雄着	
	夕方	専用バスで移動 高雄　ハマセン　倉庫をリノベーションした駁二芸術特区見学 京華餐廳にて夕食（火鍋料理）　【ホテルヤム泊】	
2月23日（日）	8：00	ホテル出発	屏東県
	9：30	屏東県屏東県霧台郷神山部落訪問 屏東科技大学・陳美恵教授の案内で社区林業（金線蓮などの熱帯植物、養蜂）の現場を視察 　原住民ルカイ族頭目の家で文化を学ぶ	
	夕方	魯凱百歩蛇にて夕食（原住民料理）　【撒拉伯民宿泊】	
2月24日（月）	9：00	ホテル出発	屏東県
	10：00	林務局屏東管理処川永農場訪問 健康食品によるブランド商品化を学ぶ	
	14：30	ルカイ族青葉部落の壁画を協会理事長・ナンパオさんの案内で見学 台南市に移動	
	夕方	度小月擔在　にて夕食（台南料理）　【日昇大飯店泊】	
2月25日（火）	8：30	ホテル出発	台南市
	9：45	成功大学学生と交流（昼食は大学で弁当を用意）	
	14：30	地元旅行社の案内で水仙宮市場、西門市場などを訪問し食の魅力を探るほか、各種の道教寺院、神農街の伝統的な町並みを散策	
	17：00	北門の塩田見学	
	19：00	Chef Table Food & Wine にて夕食　　夜市視察　【日昇大飯店泊】	
2月26日（水）	8：20	ホテル出発	台北市
	9：30	安平古堡（ゼーランディア城）視察 台北に向け移動	
	16：00	新竹県・北埔郷の茶園訪問（山口大学・陳禮俊教授親戚経営） 有機栽培の現場で客家の擂茶（れいちゃ）体験	
	19：00	金品茶楼にて夕食（小籠包）　【六福客栈泊】	
2月27日（木）	9：00	台北市内視察	台北市
	10：00	忠烈祠で衛兵交替式視察 西門の西本願寺視察後、周辺散策	
	12：00	洪師傅牛肉　にて昼食（牛肉麺） 専用車にて桃園国際空港へ移動	
	17：25	中華航空 CI158 桃園国際空港発	
	20：50	関西空港到着、空港にて解散	

村井　俊介
（文学部　歴史学科　4年次生）

私は今後の仕事や人生において糧になる学びをこのツアーで得られた。

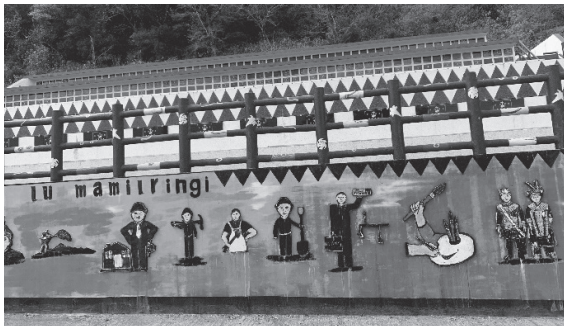
一つは台湾における自然を活用した取り組みである。日本と同様に多くの森林を有する台湾でも、地域の環境保全や新たな産業の創出、山岳地帯の人口減少が課題となっており、解決に向けた様々な取り組みが行われている。特に興味深かったのは森林資源の活用方法である。それは「林下経済」と名付けられ、平地では育てにくい作物を森林でしかできない栽培方法で育て、販売するというものである。山間部の活性化は私の地元・奈良でも実施されており、似た課題を抱えている。環境を守りつつ活用するための新たな方法を学ぶことができた。

もう一つは国立成功大学の学生との交流である。日本について深い関心を持っており様々なことを英語で質問されたが、うまく答えられずスムーズな会話とはならなかった。この経験を忘れずに語学力の向上に励みたい。

新型コロナウイルスの予防。症状があれば申告を促す看板。テレビでも繰り返し同様の CM が流れていた

岩畑　広輝
（社会学部　社会学科　2年次生）

私は2月22日から2月27日に台湾で行われた、NGO 主催の「台湾の自然･文化体験エコツアー～森林、原住民、食から学ぶ～」に参加した。参加の目的としては、より多くの異文化に直接触れ自分自身の視野を広げることであった。高雄から始まり、原住民の住む霧台や台南などを巡り、台北まで行くという台湾を約半周するツアーであった。各地域で景観を始めとした、文化や現地の植物、食などの違いがありそれらを肌で感じることができた。特に直に感じることができたのは食だった。台湾の南に位置する高雄からの出発だったのだが、南部の食事は「甘い」「濃い」という印象が強く個人的には非常に苦手な味だったが、文化として受け入れることができた。食を「文化」として体験でき、自分の未知な世界を知るという点で目的を果たすことができ、非常に有意義な経験となった。



アミ部落の共同墓地。日本が統治する前は、自分の家の下に祖先の遺骨を埋めていた。日本の統治以降、外に墓地を作るようになったそうだ

中原　紘子
（農学部　資源生物科学科　2年次生）

このプログラムは、台湾の豊かな自然を活かした産業への取り組みや台湾の歴史や文化に触れる機会が多く設けられており、観光だけでは得られない経験をたくさんすることができた。その中でも印象に残っていることは、森林や生態系の環境を維持しながら自然を活かした「林下経済」である。これは山村地域で行われている取り組みで、住民だけでなく、政府や大学などが連携して行っている。実際に養蜂や薬用植物の栽培の様子を見学し、この地域の森林を活かした独自の産業であると感じられた。こうした産業を発展させることで、地域独自のブランド商品の開発や地域の活性化につながると考えられる。このプログラムを通して、森林や生態系と共生し、産業を行う取り組みに興味を持った。また、機会があれば、このような取り組みや活動に参加してみたいと思った。

神山部落にあるレストランでその地域の食材を用いた料理をいただいた

三戸呂　優美
（文学部　英語英米文学科　1年次生）

私はこの春、台湾のスタディツアーに参加した。このプログラムでは5泊6日で台湾の色々な場所に行くことができた。元々台湾は行ってみたい国だったので、このツアーに参加できてよかった。このツアーでは毎日たくさんのことを経験したが、一番心に残ったのは、成功大学の方々との交流である。私たちと同じ学生でありながら、その語学力にとても驚いた。私達に日本語や英語でどんどん話しかけてくれ、英語も日本語もとても流暢に話していた。私も一生懸命英語で自分の考えていることを伝えようとしたが、自分の語学力の低さを痛感することとなった。

今回のツアーは私にとってとても充実した1週間だった。まず普通の旅行では行けないところに行け、見ることのできない場所に行くことができ、とても貴重な経験ができた。成功大学の方々と接して、私もいろんな国の言葉を話したい、語学力を身に着けたいと思った。その為に学生の間にできること、学べることを考えていきたい。

塩田に行ったときに撮った写真。天気も良くてとてもきれいな写真が撮れた

事　業　名	体験学習プログラム報告会
日　時	2019年度　夏季：2019年10月21日（月）18時00分～18時45分（瀬田） 2019年10月25日（金）12時30分～13時00分（深草） 2019年度　春季：新型コロナウイルスの影響により中止
場　所	2019年度　夏季：深草キャンパス　和顔館　アクティビティホール 瀬田キャンパス　6号館プレゼンテーション室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	2019年度夏季：30名

1. 経緯・目的

国内・海外の体験学習プログラムに参加した学生が、現地でどのようなことを学び、考え、今後のボランティア活動や大学生活等にどのように活かそうとしているのかを発表する機会として、プログラムの一環で報告会を行っています。より多くの学生に本プログラムに関心をもってもらえるように、深草、瀬田2つのキャンパスで誰でも報告を聴けるオープン形式で実施しました。

2. 概　要

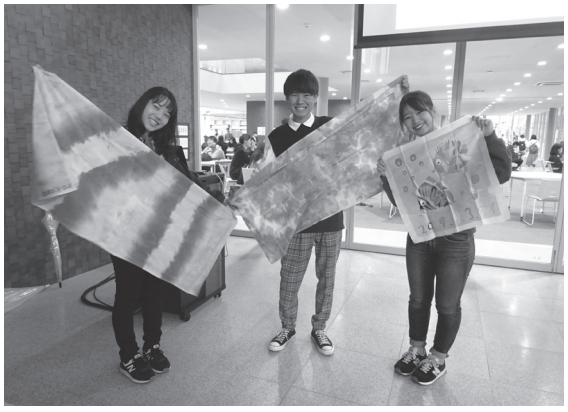
参加した学生が、それぞれの体験を通じて学んだことを報告しました。プログラムに参加した学生以外に、参加学生の保護者、海外プログラムに関心を持つ学生、一般の方にも参加いただきました。

3. コーディネーター所感

プログラムに参加した学生は、それぞれの体験を通じて様々なことを感じ、そこから気づきや学びを得ています。プログラム終了後に行う事後学習会では、各々の思いを共有し、この報告会に向けた準備をすすめ、聞いて下さる方に伝わるようにまとめる作業を行います。学び、感じたことを仲間と共有し、さらに、報告会に来ていただいた方に伝わるように写真や、音楽、動画を使って短い時間にまとめています。ぜひ、多くの方に来ていただきたい報告会です。

	体験先・参加者	テーマ
19年度　夏季	タイ王国 参加者：3名	インド洋大津波からの復興タイ験

〈報告者：上手　礼子
（瀬田キャンパス　コーディネーター）〉



7．ボランティアリーダー育成事業

ボランティア・NPO 活動センターでは、本学の学生を対象にボランティアに関する各種講座を実施しています。入門編として、ボランティアについての基礎的な講義とボランティア体験を行う「ボランティア入門講座」、応用編として、センターを運営する学生スタッフや既にボランティア活動を行っている学生を対象に、スキルアップや組織運営の向上を目指した「ボランティアリーダー養成講座」を開催しています。

事 業 名	ボランティア入門講座	
	深草キャンパス日時／参加人数	瀬田キャンパス日時／参加人数
第１回	2019年5月20日(月)17時30分～19時30分／49名	2019年5月24日(金)17時30分～19時30分／39名
第２回	2019年6月1日～6月16日の土､日に計8ヶ所で体験を実施／参加者87名	
第３回	2019年6月18日(火)17時30分～19時30分／37名	2019年6月19日(水)17時30分～19時30分／31名
協　力	受入団体：8団体（第2回ボランティア体験）	
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター	

1. 経緯・目的

学生が何か新しいことを始めたいと感じる年度初めに、毎年本講座を実施しています。ボランティアに関心はあるが、活動未経験や活動経験が少ない本学学生と、ボランティア・NPO 活動センターの学生スタッフ新登録者を参加対象とし、その後のボランティア活動に繋がるきっかけとなることを目指しています。

全3回の構成で、第1回目ではボランティアの基礎的な考え方について講義形式で学び、第2回目には地域の団体の協力を得て、実際にボランティア活動を体験、第3回目はセンターの学生スタッフがリーダーとなってそれぞれの体験をふりかえるグループワークを行います。最後にセンターで現在紹介しているボランティアを紹介して今後の活動につなげます。

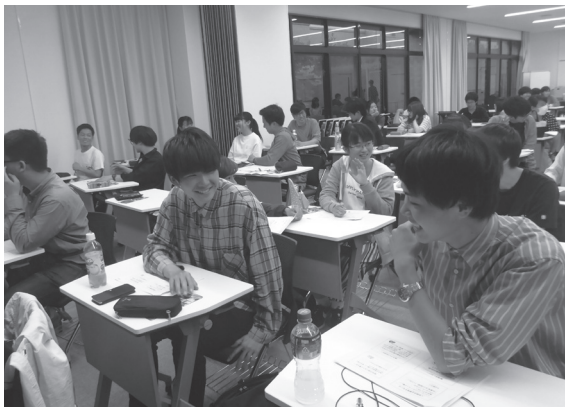
2. 概　要

第1回　講義「ボランティアって何だろう」

講師／内容（両キャンパスとも）：

南　多恵子氏(京都光華女子大学准教授)

ボランティアの基礎的な事柄について学びました。ボランティアの理念をエピソードやグループワークを交えながら、和やかな雰囲気の中で進めていただき、学生達はとても熱心に受講しました。



第2回　ボランティア体験プログラム

8ヶ所（4日間）に分かれてボランティア体験

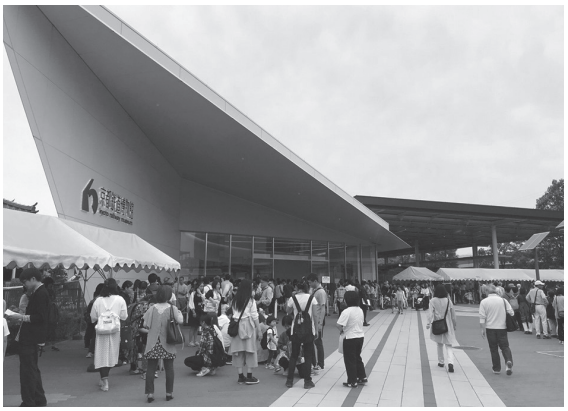
①6月1日（土）

受入団体：NPO 法人京都・深草ふれあい隊
竹と緑

参加人数：21名

活動場所：深草キャンパス近辺の竹林

②6月2日（日）



受入団体：京都府自閉症協会
参加人数：10名
活動場所：京都鉄道博物館

③6月2日（日）

受入団体：障害福祉サービス事業所　瑞穂
参加人数：12名
活動場所：事業所での「みずほ祭り」

④6月15日（土）

受入団体：しが健康医療生協
参加人数：6名
活動場所：子ども食堂「にじの家サロン」

⑤6月15日（土）

受入団体：第20回 NGO スタディツアー合同説明会
参加人数：8名
活動場所：龍谷大学大阪梅田キャンパス

⑥6月16日（日）

受入団体：京エコロジーセンター
参加人数：10名
活動場所：センターでの「暮らしの省エネまつり」

⑦6月16日（日）

受入団体：森の風音
参加人数：15名
活動場所：びわこ文化公園

⑧6月16日（日）

受入団体：認定 NPO 法人アクセス
－共生社会をめざす地球市民の会
参加人数：6名
活動場所：団体事務所（京都市伏見区深草西浦町）

第3回　活動のふりかえり

8ヶ所で様々な体験をしてきた学生たちが、体験の写真を見ながら活動内容を発表し感想を共有した後、「ボランティアをひとことで表すと？」をテーマにグループワークを行いました。終了後には掲示しておいたセンターからのオススメボランティアのチラシを見て、学生スタッフに熱心に相談する姿も見受けられました。ぜひ次の一歩を踏み出して欲しいと思います。

3. 受講者の声・得られた効果など

・ボランティアの性質として、自発性（主体性）、無償性、社会性、先駆性などがあり、特に先駆性が重要だと考えており、誰もやってないからやらないじゃなくて、やってないからこそ自分がやる、という意思をもちたい。
・1回目の講義で、ボランティア活動の説明だけでなく、ボランティア先で気を付けるべきこと、身だしなみ、コミュニケーションのとり方までお話していただけたのでとてもよかった。ボランティア体験プログラムについても1つずつどのような活動をしているのかが写真付きで説明があったので、よく分かり、これから行くのが楽しみになりました。
・大学生になって初めて参加したボランティアでしたが、とてもためになったことと、入門講座に参加していなかったら出会えていなかった人とも話せて、本当に良かった。
・初回のボランティアの定義の説明がわかりやすかった。また、初めてのボランティアでしたが、フォローがしっかりしていて参加しやすかった。
・ボランティアに行きたいとは思っていたが、実際やってみると、とても達成感と充実感があって、その中に楽しさもあった。
・自分の行ったボランティア先だけでなく他のボランティア先に行った人の感想を聞いたり、他の学生と交流できたのがとても良かった。
・まず講義形式でボランティアについて学ぶことができ、それを実践するという形で経験する流れが良かった。ふり返りで自分が経験したことを改めて整理することができた。自分にとって良い経験になったし、また一つ自分も成長できたかなと思う。

4. コーディネーター所感

まずは講義形式でボランティアについて学び、そのあと様々な体験先で活動を行う形式をとっています。新入生の参加が多く、今までボランティアに参加したことがない学生が多いため、あいさつや笑顔が大切という、基本的なことも伝えています。

実際に活動先に行くときは、コーディネーターが引率し、さらに学生スタッフ数名に一緒に活動してサポートをしてもらっています。初対面のメンバーが、初めて行く場所で、初めての活動をするので、時には小さなトラブルも起こりますが、学生達が一生懸命頑張る姿に、体験先の方から驚きの声をいただくことも多く、臨機応変に対応する学生達の柔軟な姿勢に学ばされることも多々あります。

第3回目の振り返りでは、8か所で様々な活動をしてきた学生が交流することで、さらに、ボランティア活動への意欲がわくことを期待しています。同じ体験をしていても違った感想をもつところに、体験学習の醍醐味があるのではないでしょうか。

センターで実施する入門講座は、深草、瀬田、大宮3キャンパス合同で行っているため、普段は交流する機会のない学生が出会える良い機会となっています。大学に入ってきたばかりの新入生が、この入門講座をきっかけとして、大学には、さまざまな課外活動の機会があり、多彩な学びをすることができることを体験し、ここから続く学生生活をより積極的に過ごすことができれば良いと考えています。

〈報告者：上手　礼子
（瀬田キャンパス　コーディネーター）〉

事　業　名	第1回ボランティアリーダー養成講座 「伝える力、巻き込む力を鍛えよう」
実　施　日	2019年8月6日（火）9時30分～12時30分
場　　所	瀬田キャンパス　2号館多機能教室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	本学学生55名

1. 経緯・目的

最近の学生スタッフの活動の様子や他のサークルの相談などから、同じ仲間であっても活動を進めていく上で必要以上に気を遣ったり、共感してもらえないなど巻き込み力に課題を抱えていることが伺えます。また、各自のモチベーションや関わり度合いが異なるため、なかなか賛同が得られないといった悩みを抱えているケースも少なくありません。

これらのことから、市民活動や地域活動においてまちの多様な人々を活動に巻き込んだ経験が豊富な方を講師に迎え、ボランティア活動やサークル活動などをグループで運営していく上で、活動メンバーの共感を得るための話し方や聞き出し方、エンパワメントの方法などについて学ぶ講座を開催しました。

2. 概　要

講師：大津市社会福祉協議会
　　事務局次長　山口　浩次　氏
　　主事　伊地知　彩乃氏・堀江　菜々子氏
内容：
(1) 現場実践のエピソード
(2) リーダーシップを育むワーク
　1) ワークシート1　私の物語（セルフ）
　2) ワークシート2　私たちの物語（アス）
　3) ワークシート3　コーチング
　4) ワークシート4　関係づくり
(3) 振り返り

最初に山口氏の自己紹介、大津市社協の取り組み紹介と大切にしていることについてお話された後、伝える力・巻き込む力、関係づくりを鍛えることを目的に、二人一組のペアや1テーブル4～5名のグループで繰り返しワークが行われました。

ワークの前半は、「自分の価値観に影響を与えた過去の出来事」や「自分が所属するチーム（ゼミ、サークル、バイト先、家族など）が抱える課題」について語るというテーマ設定でした。参加学生たちは自身の経験を踏まえながら、各テーマにおいてどのような困難があり、どんな選択をしてどんな結果になったのかということをペアになって語り合いました。

後半は、課題を感じている人が自分の頭で考え、自分で解決策を導き出すための働きかけ方である「コーチング」という手法について説明いただきました。そして関係構築の演習「1対1ミーティング」では、仮想の場面を設定して実践するワークとなり、伊地知氏と堀江氏に、各ワークの前に、悪い例・良い例のデモンストレーションをしていただいたり、ワークにも入って

いただいたりもしました。

3. 受講者の声・得られた効果など

・周りのメンバーに的確な指示をしたり、判断能力があることが大事だと思っていたが、周りを巻き込む力、引き込む力が重要だと気付いた。
・自分を相手に紹介するとき、困難、選択、結果を伝えることでより関心を持ってもらえることを知りました。また、コーチングは大学の活動やアルバイトで活用していきたいと思います。
・時間がもう少しあれば、よりじっくり考えられたと思った。コーチング、自分はうまくいかなかったが相手に良い返しをもらえた。

4. コーディネーター所感

難しく感じている学生もいたようでしたが、講師の山口氏が「自転車に初めて乗る時のように、最初から上手くはいかない。こけても練習していくうちに、少しずつ実際の場面でもできるようになる」と何度もおっしゃっていたのが印象的でした。

今回の平均満足度は87％でした。今後もセンターでは、参加学生が色々な気づきが得られるような講座を提供できるよう取り組んでいきたいと考えています。

〈報告者：ヒギンズ　尚美
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事　業　名	**第2回ボランティアリーダー養成講座 「今日からできる、いいチームづくり　～正しく悩めば面白いチームはできる！～」**
実　施　日	2020年2月3日（月）13時30分～16時30分
場　　所	深草キャンパス 和顔館 B105教室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	本学学生33名

1. 経緯・目的

学生団体やサークルにとって、春休みは代替わりをするにあたっての最終的な引継ぎをしたり、4月の新歓に向けて新メンバーを募集する準備に取りかかる団体も多い時期だと考えられます。そこで、学生ボランティアグループの育成にも関わっておられる市民活動団体の方を講師に迎え、自分が所属するチームが現在抱えている課題を掘り起こした上で、その解決方法や次年度の取り組みについて考える講座を実施しました。

2. 概　要

講師：公益財団法人　京都 YMCA
事業部長　中村　彰利　氏
内容：
(1) 自己紹介ワーク：名前、今日の呼び名、今の気分は何％？などを A4用紙に書いてグループ内で紹介し合う
(2) 京都 YMCA の学生ボランティア（「ボランティアリーダー」と呼ぶ）システムの紹介
(3) ワーク
1) 各グループのメンバーが、自分の所属するチームのいいところと困っていることを付箋に書いて出し合い、全体に向けて発表
2) ワーク1で出した内容の中から、一番考えたい点について、どうやったら解決できるかをグループ内で考え発表
3) 2020年度の計画を活動チーム（班など）に分かれて話し合い
(4) 講師からのアドバイス

ワーク1では、「リーダーに負担が集中する」「メンバーの活動に対する熱量やモチベーションが違う」「活動に消極的なメンバーへどのように声がけしていけばいいのか」などの意見が出されました。

これらの困りごとに対する解決策について、中村氏から京都 YMCA での経験をふまえた工夫や取り組みを、以下のポイントを交えてお話しいただきました。

○チーム作りで大切なこと（抜粋）

役割を振ること／続けること／楽しめること

○チーム作りチェックポイント（抜粋）

メンバー各自に役割がありますか？／先輩は後輩を支えていますか？／互いに信頼できていますか？

3. 受講者の声・得られた効果など

・チームにおける先輩の立場について学びがあった。来年度は後輩が入ってくるので、後輩が過ごしやすい場所をつくっていきたい。一人一人の積極性、お互いの信頼関係がチーム作りには大切だということがわかった。
・普段、活動に追われてしまって、「チームづくり」をおろそかにしていることに気がついた。自分の所属するグループ、団体について振り返って考えることができた。
・この一年、上回生として悩んできたことの解決策がたくさんあった。ほかのメンバーの課題も自分の悩みに置き換えて考えることができた。来年は後輩を支える立場として、自分のすべきことを考えていきたい。

4. コーディネーター所感

中村氏からは、「課題の根底にあるものは何か」を考えつつ、話し合いの時に意見を言いやすい雰囲気づくりをアドバイスいただいたり、最後は「これだけ自分たちで解決策を考えられるなら、必ずできる」と締めくくられ、参加学生にとってのエンパワメントにもなったのではないかと思います。

参加した学生からの平均満足度は85％と高いので、いかに学生が「参加したい」と思えるような広報ができるか、事務局側の今後の課題だと感じています。

〈報告者：ヒギンズ　尚美
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事　業　名	ボランティアコーディネーション力3級検定 「市民の社会参加を支える“チカラ”を身につけよう！」
実　施　日	2019年9月28日（土）直前研修ならびに検定試験
場　　所	深草キャンパス　21号館101教室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター／特定非営利活動法人　日本ボランティアコーディネーター協会
参加人数	学生23名、一般18名　合計41名

1. 経緯・目的

本学学生や地域で市民活動に取り組んでいる方々が、市民活動への理解を深め、実践的な取り組みの担い手として活動できる力をつけることを目的として、特定非営利活動法人　日本ボランティアコーディネーター協会が主催する「ボランティアコーディネーション力3級検定直前研修並びに検定試験」を共催で実施しています。

2. 概　要

(1) 当日の流れ

○直前研修

主催者挨拶およびオリエンテーション

【講義】今なぜ、ボランティアコーディネーション力なのか？

【講義】ボランティアの理解

【講義】ボランティアコーディネーションの理解

○検定試験

(2) 受験資格【※年齢は問いません】
※①②③のいずれかに該当していること。
①これまでにボランティア活動の経験がある。
②これまでに地域社会、組織（施設・機関、NPO など）においてボランティアコーディネーションに関わった経験がある。
③ボランティアコーディネーションに関わる予定がある。

(3) 受験料
・本学学生：6,380円（受講料：無料、テキスト代：2,380円、検定料4,000円）
・一般・その他：11,700円（全て込みのセット価格）

(4) 講師
龍谷大学社会学部教授、ボランティア・NPO 活動センター長
日本ボランティアコーディネーター協会理事
筒井　のり子氏

3. 受講者の声・得られた効果など
・本学学生「ボランティアの意義や、コーディネーションの役割を学び、自分が今まで考えていた以上にさまざまな背景や働きがあることがわかった。学生スタッフとして活動していくうえで、知っておけば役に立つことや、なるほど！と思うこともたくさんあり、今後、学んだことを生かしていけると思う。」
・一般参加者「テキストだけを読んでいると難しく感じていたことも、先生の講義を聴くと改めて理解が深まり、実感できたことがたくさんありました。おかげで検定試験もスムーズに回答することができたと思います。」

4. コーディネーター所感
日頃、職場や地域でボランティアに関わっておられる一般の方と、センターでボランティアコーディネーションを行っている学生達が共に学ぶことができる貴重な機会です。今年は一般の方からたくさんの申し込みがあり、ボランティアコーディネートに対する社会からのニーズの広がりを感じました。講師の筒井氏の事例や体験を交えた講義は単にボランティア、市民活動について学ぶだけにとどまらず、一人一人がこれからの人生を社会の中でどのように歩んでいくかを考えることにもつながっています。学生と社会人が共に学びあい、共感できる機会として、ぜひ様々な分野の方に参加していただきたいと思います。

〈報告者：上手　礼子
（瀬田キャンパス　コーディネーター）〉

8．センターを運営する学生スタッフの育成

大学ボランティアセンターの運営形態は大学によって様々ですが、本学のボランティア・NPO 活動センターでは、教育職員・事務職員・学生スタッフの三者が協働して運営しています。中でも、学生スタッフは「ピアサポート」という観点から、本学学生のボランティア活動を応援する重要な役割を担っています。

ボランティア相談をはじめとする日常的なコーディネート業務、チラシ整理やメールマガジン、SNS などでの情報提供、ボランティア活動を始めるきっかけとなる様々な企画など、学生スタッフが取り組んでいることは多岐にわたり、そのためには幅広い知識や経験が必要となってきます。

このことから、ボランティア・NPO 活動センターでは、ボランティア活動を推進していくために、社会課題に対する意識を持ち、社会に働きかけていく力をもった学生スタッフの育成を図るとともに、組織運営力、コーディネート力をつけることなどを目的として、学生スタッフへさまざまな研修の機会を提供しています。

事　業　名	2019年度オリエンテーション合宿 「継続は力なり～合宿だけでは終わらせない～」（継続企画11年目）
日　時	2019年6月8日（土）12時00分～6月9日（日）16時45分
場　所	深草キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	学生スタッフ83名
企画メンバー （学生スタッフ）	太田有里（社会3）　田井拓輝（社会3）　松田　廉（社会3）　川村有希（政策3） 松田侑子（国際3）　林　海斗（文学2）　南　佳奈（社会2）　西村志穂（政策2）

1．経緯・目的

オリエンテーション合宿は、新学生スタッフがボランティア・NPO 活動センター（以下、センター）での活動を理解するとともに、仲間意識を深める場としている。上回生スタッフは今までの活動の振り返りや、今後の活動の在り方などについて改めて考え、後輩に伝えていく場でもある。特に今年度は以下の4つのことを目的として行った。

1）ボランティア活動及びセンターでの活動を理解、再認識する。
2）この2日間を通して深草・瀬田の学生スタッフ間や、学生スタッフと職員との交流を行う。
3）この2日間だけでは終わらせず、今後挑戦していく姿勢や活動意欲を向上させる。
4）各ワークを通して、本学学生や教職員に活動やボランティアを伝えていく大切さに気付く。

2．概　要

〈1日目〉

12：00　集合
12：30　開会式
12：45　コミュニケーションワーク1
「意識の始まり
～継続は理想のコミュニケーションなり～」

参加者の名札にパズルのピースを入れ、同じ絵の人を探しつつ、声をかけた人に質問するというアイスブレイクを行った。その後、グループに分かれて「気持ちの良い話し合いとは？」を意識しながら最終合意形成につながるワークを行なった。アイスブレイクを挟み、「優先座席」というテーマに沿って互いの多様性について考えるグループワークを行った。

16：15　センターの理解
18：00　交流会
20：00　解散

〈2日目〉

10：00　集合
10：35　コーディネートワーク
「学び、習得の始まり
～継続は技術向上なり～」

先輩と後輩が二人一組のペアになり、来室者ペアにコーディネートをするという模擬コーディネートを行った。来室者役の興味のあるボランティアを先輩が聞き出し、後輩がセンターへチラシを取りに行き、先輩がコーディネートした。

11：45　昼休憩

13：00　＋αワーク（プラスアルファ）

「仲間意識の始まり

～継続はつながりなり～」

各キャンパスの同回生ごとに交流した。学生スタッフ企画について自分が興味のある企画の背景や目的などをまずは各自で考える。次にそれら企画に携わった学生スタッフから実際の活動についての説明を受け、さらに関連のあるボランティアについてグループ内で考えを深めていく。その後の活動意欲を高めるため、これからできること・したいことも考えた。

14：50　まとめワーク

「継続は力なり

～合宿だけでは終わらせない～」

2日間のワークを振り返り、ワークを踏まえて各キャンパスに分かれ、これから継続させたいことを各キャンパスのマスコットキャラクターが印刷してある模造紙に一人一人書き出した。その後、全体で共有を行なった。

16：25　クロージング

16：45　解散

3. 参加者の声・得られた効果など

○コミュニケーションワーク

・知らない人とも質問をしあってお互いのことを話すことで、打ち解けることができた。
・改めて自分がどのように相手に話せばよいのか、話をどう振ればよいのか確認できた。今後、自身がどのように改善すればよりよいワーク進行、話し合いができるのか学べた。
・合意形成のお題もみんなの価値観によって順位が変わり、答えのないものでやっていて良かった。

○コーディネートワーク

・先輩役それぞれのコーディネートを比較することができ、各先輩の特徴を吸収できた。また、コーディネートができない分、自分なりに客観的に見られた。
・自分がよく行く分野の情報しか知らなかったので、あまり行かない分野の情報を知ろうと思った。
・紹介する団体を1つに限定せず、複数あれば来室者が選べる幅が増える。逆に1つに絞り、日程や場所からある程度活動しやすいボランティアに導くことも大切。

○＋αワーク

・他キャンパスの活動について興味関心が高まった。
・両キャンパスの詳細を各所属学生から聞くことで、ほかのボランティアについても知ることができ勉強になった。
・自分が興味のあるボランティアが瀬田キャンパスの地域で行われていると気づき、参加する意欲が湧いた。

○まとめワーク

・自分なりに振り返りができたし、今後の目標や新たな発見があった。
・今後の目標を共有することで「自分はこれも必要」と感じ、刺激になった。

4. 学んだこと・今後の課題

・ワーク内容や進行の流れに意図を込めていて、言葉で伝えた部分もあるが、全員に伝えきれていない場面も見られた。「気付いてほしい」だけで終わるのではなく、ワークによっては進行ごとに意図を伝えた方がよい場合もあると学んだ。
・合宿の2週間前に、当日参加ができない人の協力を得てリハーサルを行なったことで、ワークの内容改善や伝え方の工夫すべき点などに気づけた。第三者に見てもらうことに重要性を感じた。

・昨年に引き続き、ワークが予定時間に収まらず省略する場面が見られた。一つ一つを丁寧にするためには、2日間で4つのワークを行なうのは難しい。毎年行なっているワークをやめるなど、今後の課題としてワーク構成を見直す必要がある。
・オリエンテーション合宿のワーク内容が新学生スタッフ向けのワークになってしまい、上回生が新スタッフに教えるという場面が多くなった。今後は上回生が教える場面だけではなく新学生スタッフが主体的、能動的に行なえるワークが必要である。

5. 経　費

【深草】	合宿補助費	46,000円
	消耗品費	2,781円
	交通費補助	11,180円
【瀬田】	合宿補助費	44,000円
	消耗品費	5,158円
	交通費補助	49,390円
合計		158,509円

〈報告者：田井　拓暉、川村　有希〉

事　業　名	深草夏合宿「コンフィデンスマン VC　仲間編」（継続企画9年目）
日　時	2019年9月17日（火）～9月18日（水）
場　所	丸三旅館（滋賀県高島市安曇川町西万木1045-1）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	深草学生スタッフ44名（宿泊あり41名、日帰り3名）、コーディネーター1名
企画メンバー（学生スタッフ）	神田瑞季（経済2）　黒﨑雄太（経済2）　松尾宗次朗（経済2）　世田丈貴（法学2） 西村志穂（政策2）　平尾萌衣（政策2）　福島麻斗（政策2）　川根脩那（経済1） 藤原壱成（法学1）　小林初音（国際1）

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センターが行っている学生企画は、学生スタッフの有志が企画メンバーとなって進行、実施している。学生企画への関わり方は、企画メンバーになる・ならないというように、学生スタッフそれぞれで濃淡があってもよいとされている。学生企画はセンターが実施しているものであるから、企画メンバーでない学生スタッフも何らかの形で学生企画に関わることはできるが、企画メンバー以外の学生スタッフが企画に携わろうとする姿があまり見られないこともあり、それは課題だと感じる。

以上のことを踏まえて今年度の夏合宿は、企画メンバーとそれ以外の学生スタッフの相互関係に焦点を当て、以下の3つを目的として実施した。

・学生企画が学生スタッフ全員で作り上げるものであることを再認識する。
・仲間同士の「助け合い」、「支え合い」、「励まし合い」の大切さを知る。
・この合宿を、学生スタッフが自主的にセンターへ足を運びたくなるような雰囲気づくり・きっかけづくりの場とする。

2. 概　要

〈1日目〉

12：30　JR 安曇川駅より送迎バス出発
12：40　会場設営等、合宿開始までの準備
13：30　オープニング
13：45　オリエンテーション合宿振り返り
　　前期振り返り
14：50　休憩
15：00　「コミュニケーション」について
17：00　休憩
17：30　夕食（BBQ）
21：00　交流会
23：00　就寝、企画メンバー1日目振り返り

〈2日目〉

7：00　起床
7：30　朝食
9：00　「伝える力・聴く力」について
12：00　昼食
13：30　「情報共有・認識のずれ」について
15：30　まとめ
16：15　エンディング
17：00　送迎バスで JR 安曇川駅へ移動、解散

3. 参加者の声・得られた効果など

・同期の学生スタッフが合宿の企画メンバーとして頑張っている姿を見て、企画メンバーでなくても、少しでも手伝ってあげることが大切だと気づいた。
・「企画をみんなのものに」という意識をこれからも忘れないようにしたい。この合宿を通してその壁がなくなっていけばいいなと感じた。
・企画メンバーが「楽しく」ということを意識してくれたため、終始楽しかった。

参加者からは以上の感想が多く得られた。さらに、この合宿の後に学生企画が3つ続いたため、合宿の効果が実際に現れているのかどうかを観察した。結果として、企画メンバー以外の学生スタッフがセンターに足を運ぶ姿が多々見られ、下級生を中心に効果が現れていると実感した。

また、アンケートの項目の1つである「今後の合宿に求めるもの」という欄には、「普段の活動ではできないような話し合いをしたい」や「楽しい場面と真剣になる場面の両立がしっかりとしている合宿」など、考えは様々ではあったが学生スタッフ一人一人が合宿に対する考えをはっきりと持っていたことが分かった。これを基に、スタッフミーティングの場で再度話し合いを実施し、そこで出された意見をまとめた資料を残した。今後の合宿では、その学生スタッフの声を参考に企画して欲しい。

4. 学んだこと・今後の課題

今年度の夏合宿の責任者を担当して感じたこととして、まず今の学生スタッフは、全体的に企画メンバーとして合宿運営に携わろうという意欲が低いことが挙げられる。

理由としては「合宿運営＝ワーク作り」というイメージがあり、学生スタッフの活動の中ではミーティングやボランティア企画など、合宿以外でもワークをする場面は多いものの、参加する側にとって充実感を得られるような内容になることはなかなかない。このため、ワークそのものを作る側になることは、かなり大変であると学生スタッフが感じていることがある。

また、合宿参加への意欲不足は、普段の活動意欲に関係するものであると考えられる。その対策として、今年度は合宿運営側と合宿参加者の双方が「飽きない」合宿を目指して企画メンバーを募り、進めていった。しかし、その結果として、目的の1つである「学生スタッフがセンターへ足を運びたくなるような雰囲気づくり、きっかけづくりの場」にはなったが、「学生企画について深く考える場」にはできなかった。

今後の合宿を実施する上では、事前の実施目的の再認識や重要性を学生スタッフ全体で考えると共に、楽しくかつ真面目にセンターの今後を考えられるようなメリハリと、普段の活動に直接つながるワークを作り上げていくことが課題である。

その他の反省点として、合宿を行う施設や宿は余裕を持って見つけることや、合宿を実施するに適しているかどうかの判断を合宿当日から2、3ヶ月ほど前にすることが、ワーク作成やスケジュール決め等、合宿の中核に悪影響を及ぼさない結果につながると感じた。

また、今年度の合宿において新たに実践したこととして、合宿のしおりのデータ化が挙げら

れるが、参加者から「紙媒体のしおりがないとさみしい」との声もあったので、今度の合宿ではその都度、作成するか否かを企画メンバーと話すと良い。さらに、例年、企画メンバーはそれぞれが作成を担当した部分のワークのみ、当日も担当するという形を取っていたが、今年度は担当外のワークでも役割を与え、合宿への主体的な参加意識や責任感の強化に努めた。その結果として、例年のような担当外のワークへの関心が低い状態にはならなかったが、少し負荷がかかりすぎてしまったように感じた。

以上より、今後の合宿では現在まで続いてきた夏合宿の実施目的を全学生スタッフが認識し、かつ今までにない新しい合宿の形を目指して企画、運営をしていくことが求められる。

5. 経　費

下見交通費（7割上限1,000円）7名分	6,540円
消耗品等	2,138円
交通費補助（7割上限2,000円）42名分	56,830円
宿泊費補助	2,000×41名＝82,000円
行事保険	238×44名＝10,472円
合　計	157,980円

〈報告者：世田　丈貴〉

事　業　名	瀬田夏合宿（継続企画9年目）
日　時	2019年9月3日（火）～9月4日（水）
場　所	近江希望が丘ユースホステル（滋賀県野洲市）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	学生スタッフ34名　コーディネーター1名
企画メンバー（学生スタッフ）	頼田翔平（理工3）　田井拓暉（社会3）　正中菜帆（社会3）　赤木宏斗（社会2）　大屋晴太郎（農学2）

1. 経緯・目的

今までの合宿では、学生スタッフのコミュニケーション力やコーディネーション力など、スキルアップのためのワークを行っていた。しかし、ワークをしても合宿だけで終わってしまい日頃の活動に繋げることが難しかった。

そこで今回の合宿では、日頃の活動において重要なテーマである「班係活動」について取り組んでみようと考えた。学生スタッフは全員が班係に属しており、ボランティア・NPO 活動センター（以下ボラセン）において分担して活動している。これまで班係について考える機会を設けることができなかったので、今回の夏合宿では以下の3つのことを目的として行った。

○班係活動を見つめ直し、学生スタッフがより一層円滑に活動できるよう考える場をもつ。
○今年度の目的・目標・指針を基に前期の活動を振り返り、後期に向けて活動意欲を高める。
○学生スタッフ間の交流を深め、互いに協力し合える関係性を築く。

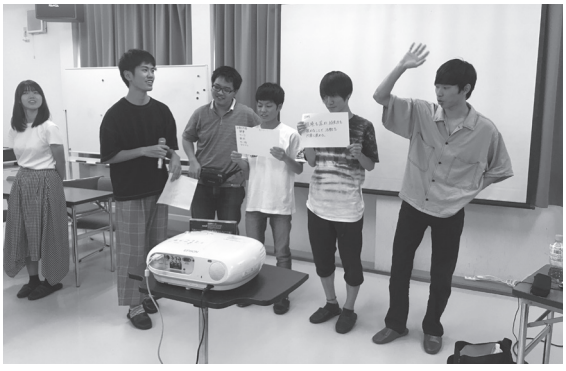
2. 概　要

〈1日目〉

13：00　ボラセン理解
　　6つの班係（Let’s ボランティア、掲示管理、メディア、うまくなり隊、広報誌、発掘し隊）に分かれて、それぞれの班係の目的、昨年の活動、課題や、あったらいいと思う班係などについて話し合い、まとめる。その後全体で班係の活動について共有する。
14：20　アイスブレイク「嘘を暴け」

14：40　理想の班係構成を考えよう
現在の班係構成にとらわれることなく、どのような班係構成なら活動しやすいのかを考える。まずは個人で考え、その後5つのグループに分かれてグループごとで一つのアイデアにまとめる。5つのグループ案ができたら全体で話し合い、最終的に全体で一つの班係構成（案）を作成する。
18：30　夕食
20：30　交流会
23：00　就寝

〈2日目〉
7：30　起床
8：30　朝食
10：00　理想の班係構成で考えよう
1日目で考えた理想の班係構成（案）を基に、それぞれの班係では、どの様な活動をするかをそれぞれ分かれて話し合う。班係の目的、活動内容、班係名も検討する。（今回考えた班係：新発掘し隊、助け隊、仲良くなり隊、Power up ボラセン、広報）
12：00　昼食
13：00　理想の班係構成で考えよう
それぞれの班係で話し合い、考えた目的、活動内容、班係名を全体で共有する。
13：50　振り返り、後期の目標
3〜4名のグループになり前期の活動を振り返る。その後、それぞれで後期の目標を考える。二人一組のペアをつくりお互いに目標を書いた紙を見せ合い、自分の後期の目標と、その思いを伝え合う。ペアを変えて数回おこなう。
15：00　閉会式



3. 参加者の声・得られた効果など

・普段は班係について話し合う機会がなく、ほかの班の活動などがわからなかったが、今の班係の状況を知ることができた。
・合宿を通して色々な良い意見や面白い考えを知ることができたので、今後に活かしていきたい。
・日頃、仲間同士で議論することは少ないが、自分の意見を相手に伝える機会が沢山あり、良い経験になった。
・ボラセンで活動する上で重要な班係活動について見直すきっかけとなり、今後の活動に繋げることのできる合宿だった。
・話し合う機会が沢山あり、自分とは異なる色々な人の意見を聞くことができた。ほかのメンバーがボラセンでの活動に対してどう思っているかを知ることができた。

4. 学んだこと・今後の課題

・ボラセンの活動や班係について話し合う中で、学生スタッフそれぞれで色々な視点があり、普段は表に出さないが個々人で意見を持っているということが合宿を通して分かった。
・全員が考えを出し合い、一つの班係構成案を作り上げるには、どういう過程を経て、どういう場づくりをすればよいか、方法を考えるのにとても苦労した。また、それぞれの意見を取り入れられるようにするにはどうしたらいいか、合意形成を図るにはどのような決め方をすればいいのか、様々なことを考慮しながら合宿の構成、ワークの内容を考えた。最終的に構成案を一つにする際には、多数決では決めず、企画メンバーが全体のファシリテーションを行い、参加者全員と対話をしながらまとめるという方法をとった。ふりかえると、色々な人から意見を引き出すことはできたと思うが、まとめることを意識しすぎ、全員の意見を反映させて一つの案をつくると

いうのは難しかった。
・ボラセンの活動において重要な班係をテーマにしたため、入って間もない一回生には分からないことが沢山あった。全体として、一回生が進捗状況を把握できているか確認は取っていたが、企画メンバーで手分けして、一人一人丁寧に確認できればよかったと思う。
・合宿を通して、参加する側の目線や気持ちを意識し、話し合いの意図をより具体的に理解してもらえるように、説明力を向上させる必要があると痛感する。今後の合宿でも、言葉だけではなく、パワーポイントやレジュメを活用し、分かりやすく説明できるように工夫する必要がある。
・後期、また来年度の活動に向けて、この合宿で作成した班係構成案を今後どのように活用していくか考えていく必要がある。この案を基にさらに、普段のミーティングで議論を重ね、新たな班係構成を整えていきたい。

5. 経　費

宿泊費補助	62,000円
交通費補助	12,790円
消耗品	432円
合　計	75,222円

〈報告者：大屋　晴太郎〉

春合宿（瀬田・深草）

毎年、春季休業期間中に、1年の総括と新年度に向けての目標立てなどのため、学生スタッフはキャンパスごとに春合宿をおこなっています。

2019年度春合宿は、瀬田は2020年3月9日（月）～10日（火）、深草は2020年3月18日（水）～19日（木）で、どちらも近江希望が丘ユースホステルにて実施予定でした。しかし、新型コロナウィルスの感染拡大に伴う合宿などの課外活動自粛要請のため、春合宿は中止することとなりました。

準備を進めていた企画メンバーとは、春合宿実施にあたり話し合ってきた問題意識などを整理し、合宿が実施できるような状況になった際には、今回実施しようとしていたことも活かすことが出来るようにしたいと考えています。

セミナー名	大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2019
日　時	2019年9月2日（月）～3日（火）1泊2日
場　所	セミナー会場：大阪市立青少年文化創造ステーション　KOKO PLAZA 宿泊会場：新大阪ユースホステル
実施主体	NPO 法人ユースビジョン
全体参加人数	大学ボランティアセンターで活動している学生スタッフ 合計32名（11大学・キャンパス）
本学参加人数	学生スタッフ3名

1. 目　的

大学ボランティアセンターの学生スタッフが、全国の学生スタッフとの交流や学習を通して、活動を広げ、レベルアップとスキルアップを目指して参加しました。

2. セミナー概要

〈1日目〉
①アイスブレイク（センター自己紹介）
②全体会1「ボランティアを改めて考えてみよう」
③テーマ別セミナー
　・コーディネーションを学ぼう
　・センターの広報戦略を考えよう
④交流会
〈2日目〉
①全体会2「学生がボランティアをする意味、意義、価値を考えよう」
②全体ふりかえり
　「セミナーでの学びをどう活かす？」
③集合写真撮影、セミナー終了

3. 参加者感想

高岡　宏幸

（社会学部　社会学科　2年次生）

今回のセミナーは、他大学の取り組みを聞くことから、自分たちの活動を振り返り、今後の活動への刺激を数多く受ける場であった。

大学紹介で大学ごとにセンターの設立目的や運営体制をお聞きし、交流会では特徴的な活動や悩みを共有し、自分たちのボラセンの特徴を客観視することができた。また､交流の中から､今後のより良い活動へのヒントも見つけられ､同じ学生スタッフとして活動している者たちが集まるこの機会が、貴重なものであることを再認識した。

テーマ別セミナーでは、広報について考えたことが印象に残っている。学内でボランティア啓発をする上で様々な広報を行うが、学生スタッフ自身がその広告塔であるということ、楽しい雰囲気でボランティアを呼びかけたり、生き生きとしたコーディネーションを行い、活動にやりがいを感じることの大切さを学んだ。また、一方的に情報を発信する広報よりも、学生のニーズに基づいて情報を届けるということも大切なことだ｡セミナーで得た気づきや学びを、これからの活動に取り入れていきたい。

東　里音

（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

今回の学生スタッフセミナーでは、他大学の学生とたくさん交流することができた。日頃の活動では出会えない仲間と話すことで、普段とは違う話の広がり､展開を感じ､交流会では様々な学生スタッフの在り方についても考えることができた。自分の悩みを相談する中で、もやもやと悩んでいたことを「自分も周りも変えていこう」と後押ししてもらえたことは大きかった。いつも話している仲間との意見交換とちがい、初めて出会った仲間とのセッションは刺激的だ。同じことを繰り返すのではなく、時には自分の仲間から離れて外から自分達を見直すことで、より良い方向へ変わっていけるのではないかと感じた。

模擬コーディネーションの際、かなり細かな設定がありただ練習するよりやり方が身についたように感じた。リアリティのあるコーディネーションに加え、自分たちが日頃紹介しているボランティアを、資料を見ずに相手に説明するという練習は、より理解が深まるということを実感した。

各大学の学生スタッフはそれぞれ自分達のやり方で経験を積み重ねていると思うが、そこから生まれる違いをこういった場で共有し、互いの刺激とする機会は本当に貴重で大切だ。これからもここで得た繋がりを大事にしながら、学んだことをこれからの活動につなげていきたい。

杉山　わかな

（社会学部　現代福祉学科　1年次生）

私が1番印象に残ったのはテーマ別ワークだ。私はコーディネーションのワークを選んでおり、そこで模擬練習を重ねていたが、普段交流のない他大学の学生スタッフによるコーディネーションを見ることが出来、とても参考になった。また、ワークの方法も私にとっては斬新だった｡相手役の設定が細かく決まっており、ボランティアをするきっかけ、興味のある分野など、かなり細かく設定されていて、その設定に合わせて話に深みを持たせる必要があり、設定されていないワークに比べ、現実的な模擬練習を行うことが出来ると思った。

セミナーに参加して私が感じたことは､「自分は何も知らない」ということだった。龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターのことも、他大学のことも、学生スタッフがやるべきことも、本当に知らないことがまだまだたくさんあることを改めて痛感した。他の学生スタッフと一緒にワークをしたり交流することで、これからもっと知っていきたい、自分も頑張りたいとモチベーションを上げることが出来た。

4. 経　費

交通費補助（7割上限2,000円）	4,080円
参加費補助（一人5,000円×3名分）	15,000円
合　計	19,080円

セミナー名	大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナー2020
日　　時	2020年2月12日（水）～13日（木）1泊2日
場　　所	セミナー会場：大阪市立青少年文化創造ステーション　KOKO PLAZA 宿泊会場：新大阪ユースホステル
実施主体	NPO 法人ユースビジョン
全体参加人数	大学ボランティアセンターで活動している学生で、2020年度運営の中核を担うリーダー層　合計35名（14大学・キャンパス）
本学参加人数	深草学生スタッフ4名、瀬田学生スタッフ4名

1. 目　的

このセミナーは、大学ボランティアセンターの学生スタッフのうち、次年度の活動を担うリーダーたちが「リーダーとは何か」についてもう一度深く考え、組織の運営を学び、よりよい活動を行うことを目的として、毎年実施されています。

ボランティア・NPO 活動センターからも代替わり後の正副代表が、他大学の学生スタッフとの意見交換や議論を通して視野を広げるために参加しました。

2. セミナー概要

〈1日目〉
①アイスブレイク（参加者自己紹介）
②ワーク＆講義（1）「チームでのコミュニケーション」
③ワーク＆講義（2）「合意形成とは？」
④交流会
〈2日目〉
①ワーク＆講義（3）「リーダーとは」
②全体共有「セミナー後の行動計画」
③集合写真撮影、セミナー終了

3. 参加者感想

安本　大輝
（法学部　法律学科　2年次生）

セミナーでは他大学と交流する時間が多く設けられており、様々な活動内容や悩みを共有することができた。龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターは、他大学と比べて設立から年数が経っており、学生スタッフも多いため、班活動や来室者対応の基礎が築かれている。しかし、参加大学の中にはまだ学生スタッフが数名しかおらず、広報や企画について十分に取り組むことが難しいという大学もあった。

一方、当センターの学生スタッフは毎週金曜日にミーティングをしているが、決まったメン

バーしか参加できない、ミーティングの時間が極端に長くなるなど、課題を抱えている。その点、他大学ではミーティングの実施頻度が2週間や1ヶ月ごとであったり、審議をする際はボランティアの募集や報告を行わないなど、工夫して行っていた。

今後は他大学の様々な手法を参考にしながら、その場面に応じて柔軟に取り組んでいきたい。

石井　翔大
（法学部　法律学科　1年次生）

私はこのリーダーセミナーを通して、情報共有の大切さと大変さを改めて知ることができた。話し合う中で必要なことだが言わなかった、言えなかったことが私たちのボラセンでは多いように感じている。そして大抵、そのことは話し合いが発展することを妨げている。このリーダーセミナーの中でも、問題解決ワークで班メンバーへの情報の伝え方やタイミングを誤ってしまい、情報の受け手側の理解不足も重なって、話し合いが進んでしまってからそれがキーとなる情報だったということがあった。

これからリーダーとして活動していく上で、学生スタッフそれぞれが自分の思っていることをちゃんと言えるような環境にするために、今回学んだコンセンサス（合意形成）を目指す議論、会議の種類、人の心の働きなどを十分に意識していきたいと思った。そして、リーダーだけではなく学生スタッフみんながリーダーシップを発揮できるような、明るく活発なボラセンにしていきたい。

竹内　祐人
（法学部　法律学科　1年次生）

私はこのリーダーセミナーに参加して、自分にとっての理想のリーダー像をもう一度考えるとてもいい機会になった。

他大学のボランティアセンターの学生スタッフと一緒に『リーダーに求められるもの』を複数の選択肢の中から順位付けするというワークをした時、私と他大学の学生ではリーダーに必要だと思っていることが異なっていた。自分はスケジュールの調整力が一番大切だと思っていたけれども、企画を作る能力が大切だという考えもあったり、情熱を持ってやることが一番大切だという意見の人もいた。情熱をもって活動をすることで周りの人が感化されてやる気が芽生え、それがより良い活動に繋がるという理由を聞き、今まで私はそのように考えたことがなかったので、自分の視野を広げることに繋がったと感じた。

今回このセミナーを通じて学んだことを必ず活かして、より良いボランティアセンターにしていけるよう努力していきたい。

谷垣　俊弥
（法学部　法律学科　1年次生）

今回のリーダーセミナーに参加して、今後の活動に役立つ様々なことを学んだ。リーダーの役割やリーダーシップについて、効果的なミーティングや話し合いの方法など、学んだことを今後の活動に反映していこうと思う。

たとえば、ミーティングひとつ取っても、参加者の並び方や、情報共有の方法などがいろいろあることがわかった。その中から龍谷大学ボラセンの学生スタッフに合ったミーティング形式を見つけ、より良いミーティングができるようにしたい。さらに、他大学のボランティアセンターの学生スタッフと交流することで、そのボラセンの活動を知ることができ、今後活動していく上での意欲を高めたり、悩みを共有しながらお互いの励みにすることができた。

このセミナーに参加することで、自分が回生のリーダーであるという自覚を持つことができ、今後リーダーとして頑張ろうと思った。

渡中　新太郎
（農学部 植物生命科学科　2年次生）

リーダーセミナーに初めて参加して、1泊2日の中でリーダーとリーダーシップの違い、コンセンサスの仕方、活動計画の基本など様々な事を学んだ。自分は今、大学のボランティアプログラムのリーダーをしており、もっと早くにこの内容を知りたかったと思った。

印象に残ったことは、メンバーが出したさまざまな意見を全員が納得できる意見になるまで合意形成すること、そして、そのために話しあうことがとても面白いと感じた。しかし、全員が納得する合意形成には時間がとてもかかるため、コンセンサスは、組織を作っていくうえで基盤となる目的・目標を決める時など、特に重

要な場面で使うべきものであると自分は感じた。

他大学のボランティアセンターの人達と、活動している中で出てくる悩みなどを交流会の時間に共有でき、他の大学でも自分達と同じような悩みを持って活動しており、どうやって解決しようか模索しているのだとわかった。今後はもっと大学同士で繋がろうとの意見も出て、自分もいろいろな大学に足を運んでみたい。

今回のセミナーで学んだ事を活かして、ボランティア・NPO 活動センターでみんながより良い活動ができるようにしていきたい。

東　里音
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

今回のセミナーで私が大切にしたのは、他大学の学生との交流であった。各ワークや交流会を通して仲間のことを知り、彼らの所属する団体を知ることで、自分達の団体について見つめ直すことができた。

私は昨年もこのセミナーに参加していたが、当時は他大学との違いに圧倒され、自分の至らなさに目がいくばかりであった。しかし今回、龍谷大学で行なっている活動を他大学が参考にしていることを知り、龍谷大学の学生スタッフは自分達の活動について、知識をしっかり持つことが出来ていると感じた。活動が有用的で、団体内で情報の共有がきちんとなされているという事だと思う。私達はそれを当然のことと思い活動してきたが、他大学から見るとそれらは龍谷大学の強みであると知ることができた。こういった他大学から見本とされている活動内容や知識の共有は私が入るずっと前からセンターでは行われてきていた。先輩たちが積み上げてきてくれたこれら強みと実績を大切にしながら、さらに新たな自分達の強みを作っていきたい。

同じくセミナーに参加した後輩、同学年の仲間と共に、今回こうした交流や、各ワーク、講座などで得た知識、方法を送り出してくれた仲間達に還元していきたい。

杉山　わかな
（社会学部　現代福祉学科　1年次生）

このリーダーセミナーを受講して私が最も参考になったのは「会議の作り方」だった。現在、私は1回生の代表をしており、全体ミーティングや様々なプロジェクトでファシリテーターを務める可能性があるので、会議の方法や役割分担、段階など基礎的なことを知ることが出来たのはとてもためになった。様々な場面で使えるスキルで、同回生の学生スタッフにもニーズがあると思うので、吸収してきた内容を皆に伝えたいと考えている。

また、体験型学習の内容も非常に印象に残っている。皆で協力して進めてくことにより目的をゲーム方式で達成するというものだったのだが、これがとても楽しく体験することができ、新しいワークの方法を学ぶことができた。このワークでは、順序立てて進めることや、役割を分担することの大切さ、そして何より、共通の明確な目的を持つことで集団がその本領を発揮出来るということを、ゲームを通して体験することが出来た。参考にした書籍も紹介していただき、今後、ミーティングや合宿の中で行ってみたい。

今回のリーダーセミナーで、ミーティングやファシリテーションの様々な手法を知っているかどうかは大きな違いがあるということを感じた。そして、仮に知っていたとしてもそれをうまく生かせるかどうかは自分次第だ。学んだだけで終わらせず、今後しっかり実践していきたい。また、この学びを自分だけで終わらせず、周りの仲間にも伝えていきたい。

朝野　健太
（社会学部　現代福祉学科　1年次生）

このセミナーを通じてリーダーとは何かについて改めて考えることができた。グループになってリーダーに必要だと思うものに優先順位をつけていく、というワークがあり自分なりに順位をつけた。順位をつけた後、なぜその順位にしたのかをグループで議論したのだが、自分とは全く逆の意見を出す人がいて驚いた。その人の意見は筋が通っており、納得させられるものだった。このようにみんなが想像している理想のリーダー像は一人一人違っていたが、どれも良いものだった。当たり前のことではあるが、リーダーとして自分の意見を押し付けるのは間違っている。このワークからは他者の意見を聞き、それを共有する大切さを学んだ。

また、「決定すること」についても学ぶこと

が多かった。「決定」には様々な種類があり、目的、時間などによって使い分ければより良い形となるということが印象に残った。ただこちら（リーダー側）が、一方的に決めてしまってはメンバーの不安を生むことにつながり、方向性が一つにまとまらないという恐れがある。重要なのはメンバーが納得していること、決定までのプロセスでなるべく多くの意見をメンバーから引き出すことであると感じた。そのためには広い視野をもつ必要がある。

今回のセミナーでは様々なことを学ぶことができた。これをセンターに持ち帰り、学生スタッフと共有しさらなる向上につなげていきたい。

4. 経　費

交通費補助（7割上限2,000円）	7,410円
参加費補助（一人5,000円×8名分）	40,000円
合　計	47,410円

事　業　名	KAGAVOCO　ボラセンエキスポへのブース出展
日　時	2019年8月29日（木）
場　所	大阪府立大学　I-site なんば
主催団体	関西学生ボランティアコーディネーターネットワーク（KAGAVOCO）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	40名（うち龍谷大学参加者は6名）
企画メンバー（学生スタッフ）	米本圭吾（経済4）　頼田翔平（理工3）　二木亮英（社会3）　高岡宏幸（社会2） 林　　新（経営1）　杉山わかな（社会1）　安原拓真（社会1）

1. 経緯・目的

関西学生ボランティアコーディネーターネットワーク（以下 KAGAVOCO）では、関西圏にある大学のボランティアセンターに所属する学生スタッフ同士がつながり、お互いに切磋琢磨できるような環境づくりを目指している。その一環として、KAGAVOCO で「ボラセンエキスポ」が開催されることとなった。そこに参加し、他大学とのネットワーク作りと学生スタッフとしてのスキルアップを図る機会にしたいと考え、以下のことを目的に参加をする。

①事前準備や資料作りを通じ、日々の活動を客観的に振り返る。ブースで他大学へ活動紹介を行えるようにする。

②龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターの活動を他大学に PR することにより、当センターの認知度向上に寄与する。

③他大学と交流を深めることにより、学生スタッフとしてのネットワークを広げる機会とする。

2. 概　要

関西圏の大学ボランティアセンターが集まり、大学ごとにブースを出展する。ボランティアセンターの概要・運営の体制・普段の活動・大学独自の取り組みなど、各大学がボランティアセンターの活動紹介を行う。

3. 参加者の声・得られた効果など

(1) 参加した学生スタッフの声

・改めてボラセンについて考える場ができた。
・他の大学のボラセンの取り組みや力を入れているポイントを知ることが出来て参考になった。また、もっと他大学の人と交流をしたかったという声があった。
・他大学との規模の違いや各大学のボラセンの特色について理解することができた。
・出展の準備をすることで自分の大学のボラセンについての理解を深めることができた。また、他大学について知ることで、自分たちの

取り組みを客観的に見ることができた。
・自分たちに与えられた環境が当たり前でないことが分かった。

(2) 得られた効果

今回、他大学のボラセンについて初めて知ったという学生スタッフが多くいた。参加者が自分の大学と他大学の環境を比較し、自分たちのボラセンの長所と短所について初めて考える機会になった。また、本学の取り組みを紹介したことで、普段行なっている活動への理解を深めることもできた。このことがきっかけになって、さらに龍大ボラセンの取り組みを詳しく知っていきたい。

プレゼンを行う中で、自分たちの長所が他大学の課題の解決策になるかもしれないという発見もあった。その一方で、他大学の取り組みを聞き、ボラセンにも取り入れたら良いのではと思える情報もあり、よりよい龍大ボラセンを作るためのヒントを得られたと思う。

4. 学んだこと・今後の課題

活動紹介で使うパワーポイントの完成がギリギリになり、内容について不安を残したまま当日を迎えてしまった。その影響もあり、質問コーナーで自分の所属とは異なるキャンパスについて聞かれたとき、回答に詰まる場面があった。スケジュールに余裕をもってしっかりと準備をすすめるようにしていきたい。

また、休憩時間などのフリータイム時に、他大学の学生との交流があまりできなかった。せっかくの機会なので、同じ大学でかたまってしまわず、他大学の学生と積極的に交流するよう今後意識したい。

今後の課題は以下の通り。

①学生スタッフ内での関心を増やす

今回は企画メンバー内のみで作業をしたので、このイベントに参加しない学生スタッフに関心をもってもらう事ができなかった。他大学との交流の利点は、大学ボラセンの比較ができ、自分たちの活動や所属するセンターを客観視できる事だ。この客観視することこそが、今後私たちのセンターが発展していくうえで欠かせない要素であると考える。今後も、この客観視を持てるような機会を増やしていくと同時に、他大学との関わりの重要性を学生スタッフに伝えていきたい。

②他大学のアイデアを学生スタッフに共有し、取り入れる方法を探る

他大学の取り組みを聞いた事で、そのアイデアを自分たちの大学に取り入れたいという意見があった。参加者がこのイベントで得た経験を他の学生スタッフに還元することが大切だと考える。今後、活動に行き詰った時には、他大学のアイデアを参考にしてみたい。

今後も他大学と交流していきたいという学生スタッフとともに、各大学の活動を共有する機会を増やし、お互いの大学でより良い環境作りのためのアイデアを生むきっかけを作っていきたい。

5. 経　費

交通費補助（7割上限1,000円）　　4,620円

〈報告者：米本　圭吾〉

9．新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴うセンター事業の状況について

2020年1月に国内初の新型コロナウイルスの感染者が発表されて以来、少しずつ私たちの活動にも影響が出始め、海外体験学習プログラムのアメリカ合衆国とインド共和国のプログラムが直前で中止になるなど、センター事業にも大きく影響がありました。ここでは、2020年2月～3月にかけて予定されていたセンター事業にこの新型コロナウイルスの流行がどのように影響したのか、大学の動きと照らし合わせながら、センターとしてどのように判断し、実施または中止の判断を行ったのかをまとめました。

	事業名	参加人数	実施有無	センターの対応	海外、国、大学の動き	
海外体験学習プログラム	「台湾の自然・文化体験エコツアー」 実施期間：2月22日（土）～27日（木） 活動場所：台湾	4名	実施	外務省ホームページで台湾の危険レベルを確認（レベル1）、プログラム実施団体、旅行会社とも相談のうえ、実施はできると判断し、下記の通り対応。 ①出発前の感染症予防策を学生に徹底する。 ②プログラム中には、台湾の実情にあわせた感染症対策を団体の指示のもと行う。 ③体験プログラムの一部変更。	1月31日（金）	【国】外務省海外安全情報において中国全土が危険レベル2（不要不急の渡航はやめてください）に引き上げられた。 【大学】危機対策本部が設置された。
	「全米一住みたいまちポートランドの持続的なまちづくり」 実施期間： 3月1日（日）～8日（日） 活動場所： アメリカ合衆国・ポートランド	6名	中止	2月25日に米国での活動ができないと判断し中止を決定し、下記の通り対応。 ①キャンセル料の学生負担はなし。 ②国内、海外、特にアメリカの状況を学生に伝え、中止を個別に連絡。 ③後日、センターより学生宛てに「海外体験学習プログラムに参加を予定していた学生のみなさんへ（中止決定のお知らせ）を郵送。	2月22日（土）	【米国】米国国務省が日本への渡航警戒情報を「レベル2」（渡航にあたり注意を喚起する）にあげた。
	「インドで学ぶSDGs～インド農村の持続可能な取組み～」 実施期間： 3月1日（日）～10日（火） 活動場所： インド共和国	4名	中止	2月5日大学危機対策本部の方針により、経由地を香港からタイに変更した。 2月26日にタイでの乗り継ぎが困難と判断し中止を決定し、下記の通り対応。 ①キャンセル料の学生負担はなし。 ②国内、海外、特にタイ・インドの状況を学生に伝え、中止を個別に連絡。 ③後日、センターより学生宛てに「海外体験学習プログラムに参加を予定していた学生のみなさんへ（中止決定のお知らせ）を郵送。	2月23日（日）	【タイ】経由地であったタイ保健省が日本を含む感染拡大地域からの入国者に対して検疫を強化することを発表した。
国内体験学習プログラム	福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き､そして「自分」を見つめる～ 実施期間： 2月16日（日）～20日（木） 活動場所：福島県･福島市、南相馬市、郡山市、浪江町、富岡町	14名	実施	国内での感染事例が出始めた頃であったが、従来より準備していたインフルエンザ等の感染予防対策が有効であること、比較的少人数（学生15名、引率2名）であることより、感染予防に十分注意しながら実施出来ると判断し、下記の通り対応。 ①風邪症状があった学生は、本人の健康状態と意向を確認して参加中止を決め、参加費用は返金。 ②感染対策の強化として、移動の車中にはクレベリンを配置、常に除菌スプレー、アルコールジェル及びウエットティッシュを装備し、手洗いの励行、マスク着用を促す。 ③参加学生の健康状態を出発前・後にLINE等で確認。 ④高齢者サロンのとの交流会を中止にし、別プログラムに変更。	2月19日（水）	【大学】危機対策本部より、国内での感染拡大が懸念されている状況を踏まえ、2月25日から4月末の期間で大学で開催する各種イベントについて、「所要時間」「実施規模（参加人数）」「飲食の有無」などの情報収集が実施される。 30名以上で集まることは自粛要請。

国内体験学習プログラム	近江八幡スタディツアー ～ボーダレスなまちづくり～ 実施期間： 2月25日(火) ～28日(金) 活動場所： 滋賀県近江八幡市・甲賀市	14名	実施	国内での感染事例が出始め、感染者数が増えつつあったが、活動地域が瀬田キャンパス所在地の滋賀県であること、比較的少人数（学生15名、引率1名）であり、感染予防に十分注意しながら実施出来ると判断し、下記の通り対応。 ①1名の学生のキャンセル申し出があり、キャンセル受付け、参加費用は返金。 ②感染対策の強化として、移動の車中にはクレベリンを配置、常に除菌スプレー、アルコールジェル及びウエットティッシュを装備し、手洗いの励行、マスク着用、検温実施等。 ③実施中に大学からの中止の指示があれば、途中で中止する可能性があることを確認。 ④受入れ団体に予定通りの受入れが可能か確認。高齢者施設の見学は中止し、別プログラムに変更。 ⑤参加学生の健康状態を出発前・後にLINE等で確認。	2月27日 （木） 2月28日 （金）	【国】小中学校の臨時休校要請が出される。 【大学】多人数（30人目安）が集まる会合（ゼミ合宿、研究会、課外活動など）について、実施責任者において自粛（中止、延期、規模縮小）を検討するよう要請。
	福島スタディツアー 事後学習会 実施期間：3月9日(月) 活動場所：深草キャンパス	14名	実施	人数が30名に満たないことから、感染予防に十分注意しながら実施出来ると判断し、下記の通り対応。 ①事前に、感染不安、体調不安のある人は休むように連絡 ②入室時にアルコール消毒 ③マスク着用を必須 ④換気の徹底 ⑤座席の間隔をあける		
	近江八幡スタディツアー 事後学習会 実施期間：3月11日(水) 活動場所：瀬田キャンパス	13名	実施	人数が30名に満たないことから、感染予防に十分注意しながら実施出来ると判断し、下記の通り対応。 ①事前に、感染不安、体調不安のある人は休むように連絡 ②入室時にアルコール消毒 ③マスク着用を必須 ④換気の徹底 ⑤座席の間隔をあける		
東日本	東日本大震災追悼法要での東日本大震災でのボランティア活動発表及び、震災に関する展示 実施日：深草3月4日(水) 瀬田3月6日(金) 深草：顕真館 瀬田：樹心館	3名 (発表)	実施	発表は、法要後の30分程度であり、開催場所も密な空間にならない十分な広さの場所であるため、感染予防に十分注意しながら参加した。また、展示場所は、常に解放されている空間であり、密な空間になることがないと判断した。		
学生スタッフの活動	学生スタッフ企画 「防災・減災そなえパークの日」へのブース出展 実施期間：3月8日(日) ※3月6日に事前交流会 活動場所： 滋賀県営都市公園びわこ文化公園	26名	中止	イベント主催者より中止決定の連絡があり、下記の通り対応した。 ①2月26日イベント主催者である、びわこ文化公園より、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、中止するという連絡を受けた。 ②中止の連絡を受けて、参加予定だった一般学生、学生スタッフには、LINEやメールで中止の連絡をした。 ③準備・製作してきた展示物は、龍谷祭などで展示を行うということをオンラインミーティングで決めた。		

学生スタッフの活動	各種学生スタッフのミーティング 実施期間： 2月中旬～3月末 活動場所： 瀬田・深草各キャンパス			この時期は、春合宿、オリエンテーション合宿、新歓活動、卒業生送別会などのためのミーティングが予定されていた。 不要不急なミーティングを実施しないように呼びかけ、実施する場合は窓を開放して換気、手指の消毒を促し、マスクの着用を励行。（持っていない学生には配布） ※3月末には、構内に学生が原則として立ち入り禁止となり、ミーティングはオンラインに切り替わる。	3月2日（月） 3月29日（日）	【大学】不要不急のイベントの自粛、濃厚接触の機会を減らすため、課外活動（合宿など）は原則中止とすることが決定される。 【京都市】感染拡大防止に向けた学生への緊急要請が出される。
	春合宿 実施期間： 瀬田：3月9日（月）～10日（火） 深草：3月18日（水）～19日（木） 活動場所： 近江希望が丘ユースホステル	各20名前後	中止	準備のためのミーティングは、少人数であること、換気等と手指の消毒を徹底しながら実施可能としていた。 2月28日に学生スタッフに中止を要請し、了承。事態が収束したら形を変えて実施を検討する。		
	卒業生送別会 実施期間：深草3月10日（火） 瀬田3月15日（日） 活動場所：京都及び大津市内	各40名前後	中止	瀬田・深草共に、企画していたメンバーと相談し、中止を決めた。		
	卒業生を送る会（学内にて） 実施期間：深草3月12日（木） 瀬田3月13日（金） 活動場所：瀬田・深草センター	各40名前後		卒業式自体は中止となったが、希望する学生が来室し、後輩から卒業生への記念品プレゼントや写真撮影を短時間で実施することを了承した。 感染予防のため、常時窓を全開にし、換気と手指の消毒、マスク着用を徹底した。	2月28日（土）	【大学】卒業式の中止が決定される。
センターの動き	「新型コロナウイルス感染拡大に伴うボランティア活動についての考え方 ～ボランティア活動を考えている学生・教職員の皆さまへ～」をセンターHPに掲載 実施日：3月24日（火） センターホームページで発表			ボランティア募集が次々と中止になり、センター事業も中止になっている状況であったが、「“こんな時期だからこそ”自分に何かできないか」と考える学生、教職員の思いを受け止めつつ、実際、いつから、どのようなことができるのかを模索するための相談窓口が必要だと考えたため、センターHPに掲載した。	3月12日（木）	【大学】入学式及び､4月1日（水）～4月6日（月）に予定していた新入生勧誘活動は中止が決定される。
	3月30日（月）、課外活動は全面的に中止となり、原則学生の大学入構が禁止となる。				3月30日（月） 4月6日（月） 4月7日（火）	【大学】教室での授業開始予定日の前日まで、課外活動を中止し、これに伴い、全課外活動施設の閉館、スクールバスの運行休止を決定。 【大学】2020年度第1学期（前期）の授業を全てオンライン授業実施することが決定された。 【国】「緊急事態宣言」が発令される。 【大学】「緊急事態宣言」の終了日まで全キャンパスへの入構が原則禁止となる。（課外活動の中止の措置等も「緊急事態宣言」の終了日まで継続）

龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター規程

制　　定　平成13年 3月 1日
一部改正　平成15年 5月15日
　　平成17年 7月21日
　　平成19年 9月27日

（設　置）
第１条　本学にボランティア・NPO 活動センター（以下「センター」という。）を置く。
（目　的）
第２条　センターは、営利を目的としないボランティア活動を通じて、相互に学び合うサービスラーニングという共生の理念を具現化し、本学の教育研究に寄与することを目的とする。
（事　業）
第３条　センターは、前条の目的を遂行するために、次の事業を行う。
（1）　ボランティア・NPO 活動を通じた人材育成及び教育支援に関する事項
（2）　本学の教育研究活動とボランティア・NPO 活動との連携に関する事項
（3）　本学の教育研究に相応するボランティア・NPO 活動の環境整備に関する事項
（4）　その他、ボランティア・NPO 活動センター委員会が必要と認めた事項
（役職者）
第４条　センターに、次の役職者を置く。
（1）　センター長　1名
（2）　副センター長　2名
（センター長）
第５条　センター長は、センターの業務を統括し、センターを代表する。
2　センター長は、専任の教育職員の中から、学長が指名する。
（副センター長）
第６条　副センター長は、センター長を補佐し、センター長が事故ある場合又はセンター長が欠けた場合は、センター長の職務を代理又は代行する。
2　副センター長は、専任職員の中からセンター長が推薦し、学長が委嘱する。
（委員会）
第７条　センターは、第3条に規定する事業を運営するために、ボランティア・NPO 活動センター委員会（以下「委員会」という。）を置く。
2　委員会の構成は、次のとおりとする。
（1）　センター長
（2）　副センター長
（3）　センター長の推薦する専任職員　若干名
（4）　センター事務部長
3　委員会は、必要に応じて委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。
（任　期）
第８条　センター長、副センター長及び委員会委員の任期は2年とし、再任を妨げない。
（委員会の招集）
第９条　委員会は、センター長が招集し、議長となる。
（事業報告）
第10条　センター長は、センターが実施した事業について、毎年、学長に報告書を提出しなければならない。
（事　務）
第11条　センターの事務を処理するために、ボランティア・NPO 活動センター事務部（以下「センター事務部」という。）を置く。
2　センター事務部に、必要な事務職員を置く。

付　則
この規程は、平成13年4月1日から施行する。
付　則（平成15年5月15日第11条改正）
この規程は、平成15年4月1日から施行する。
付　則（抄）（平成17年7月21日題名、第1条、第3条、第7条、第11条改正）
この規程は、平成17年7月21日から施行する。
この規程は、平成19年10月1日から施行する。

2019年度　龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター名簿

センター委員

筒井　のり子（センター長　社会学部・教授）
石原　凌河（副センター長　政策学部・准教授）
和田　恭幸（文学部・教授）
松島　泰勝（経済学部・教授）
松永　敬子（経営学部・教授）
松畑　尚子（法学部・准教授）
斎藤　文彦（国際学部・教授）
工藤　保則（社会学部・教授）
宮浦　富保（理工学部・教授）
三浦　励一（農学部・准教授）
阪口　春彦（短期大学部・教授）
西坂　正雄（REC 事務部・課長）
石原　芳典（学生部（瀬田）・課長）
鶴野　善久（センター事務部次長）

事務スタッフ

平井　良和（センター事務部課長）
竹田　純子（コーディネーター）
ヒギンズ　尚美（コーディネーター）
國實　紗登美（コーディネーター）
上手　礼子（コーディネーター）

学生スタッフ（2019年度　計131名）

〈深草キャンパス66名〉

玉川　隆明（文学4）	土橋　茉奈（文学4）	中野　優太（文学4）	平尾　匡識（文学4）
村井　俊介（文学4）	薮辻　裕美（文学4）	吉田　　響（文学4）	脇坂　弾夢（文学4）
小松舞由子（経済4）	清水　理沙（経済4）	米本　圭吾（経済4）	大丸　千佳（経営4）
坂井　　綾（経営4）	寺島安里沙（経営4）	渡辺　早耶（経営4）	石﨑絵梨香（法学4）
桑原田　海（法学4）	火威　沙耶（法学4）	織田香朱美（政策4）	島内　桃花（政策4）
杉本　理沙（政策4）	冨上　弥生（政策4）	山田　京花（政策4）	井上　愛加（文学3）
木村　太翼（文学3）	中川　寛喜（経済3）	長谷川鈴音（経済3）	平居　凜華（経済3）
荻原　主基（経営3）	竹本　智紀（法学3）	松岡　俊希（法学3）	吉田　　樹（法学3）
松田　侑子（国際3）	上田　雄介（政策3）	大嶋　優作（政策3）	川村　有希（政策3）
佐々木大悟（政策3）	佐藤　鴻河（政策3）	武村　祐資（政策3）	樋口　大輝（政策3）
林　　海斗（文学2）	森　日奈子（文学2）	神田　瑞季（経済2）	黒﨑　雄太（経済2）
西野　亜優（経済2）	松尾宗次朗（経済2）	山﨑迅一郎（経済2）	森清　文聡（法学2）
安本　大輝（法学2）	世田　丈貴（法学2）	西村　志穂（政策2）	平井　陽菜（政策2）
平尾　萌衣（政策2）	福島　麻斗（政策2）	田渕　真玖（文学1）	濱田　　葵（文学1）
早川　歩伽（文学1）	川根　脩那（経済1）	永野　凌平（経営1）	林　　新（経営1）
石井　翔大（法学1）	園原　　聖（法学1）	竹内　祐人（法学1）	谷垣　俊弥（法学1）
藤原　壱成（法学1）	小林　初音（国際1）		

〈瀬田キャンパス65名〉

多田　裕貴（理工4）　上村　真衣（社会4）　下岡　祥人（社会4）　杉村　歩美（社会4）
曽根　竜也（社会4）　田中　直樹（社会4）　玉田　遼河（社会4）　藤井　愛里（社会4）
美濃　優磨（社会4）　加藤　翔汰（農学4）　橋本　昌尚（農学4）　川﨑　良祐（理工3）
永井　沙季（理工3）　中川　和謙（理工3）　西野　大輝（理工3）　樋上　翔太（理工3）
山元　　樹（理工3）　頼田　翔平（理工3）　石川　秀凱（社会3）　乾　佐枝子（社会3）
井上　沙雪（社会3）　太田　有里（社会3）　奥村　　遥（社会3）　景井　湧麻（社会3）
木村　卓真（社会3）　澤　　優希（社会3）　田井　拓暉（社会3）　中坊　友亮（社会3）
二木　亮英（社会3）　正中　菜帆（社会3）　水谷　芽衣（社会3）　村田　大河（社会3）
山田　瑠莉（社会3）　吉田　甫紀（社会3）　瀬戸山瑠衣（農学3）　松本　優甫（理工2）
青山　友香（社会2）　赤木　宏斗（社会2）　東　　里音（社会2）　木ノ上莉那（社会2）
木下　綾華（社会2）　高岡　宏幸（社会2）　堤　　花成（社会2）　土肥　亮太（社会2）
平井　美来（社会2）　南　　佳奈（社会2）　余村　瑠香（社会2）　大屋晴太郎（農学2）
近藤真佑華（農学2）　橋本奈津子（農学2）　渡中新太郎（農学2）　小沼　芳暉（理工1）
矢羽田聡志（理工1）　朝野　健太（社会1）　家原　美月（社会1）　井尻由梨香（社会1）
一色　剛滉（社会1）　杉山わかな（社会1）　林　　大誠（社会1）　安原　拓真（社会1）
吉岡　秀太（社会1）　川上　賢人（農学1）　岸野　洋祐（農学1）　小谷　悠真（農学1）
大和　虹輝（農学1）

読売新聞記事切り抜き紙面

ヨミダス歴史館　読売新聞 2019年5月26日 朝刊 30 ページ［京都］

龍谷大学　2019年5月30日13:08

スリランカでの研修について報告する学生（伏見区で）

スリランカでの体験報告

龍谷大生「労働者の格差実感」

スリランカの紅茶工場見学体験や現地の人との交流について龍谷大生が発表する報告会が、龍大深草キャンパス（伏見区）で開かれた。

海外でのボランティアに関心のある学生が学びを深める「海外体験学習プログラム」に参加し、2～3月にスリランカと台湾に渡航した5人が発表。龍大ボランティア・NPO活動センターが主催し、最大6万円を補助する企画で、2007年度から続いている。

スリランカへ渡航したグループは2～3月、最大都市コロンボ近郊の家庭に滞在し、紅茶の産地として知られる南東部のウバ州で工場などを見学した。

国際学部国際文化学科2年、井道友士さん(19)は、紅茶農園で働く労働者の居住区を訪問し、生活環境の悪さを実感したと発表。「1日に20キロほどの茶葉を摘んでも800円ほどしかもらえず、民族による支配関係や格差を実感した。将来、困った人を助けられるような経験を積みたい」と語った。

(C)読売新聞社　無断転載・複製禁止。放送、出版等での二次利用の際は
読売新聞知的財産担当（mail: t-chizai06@yomiuri.com tel:03-6739-6961）まで。

2019年 5月26日　読売新聞　提供

掲載日：2019年09月19日，面名：H02XXO，記事ID：K2019091940000001100

(C)河北新報社

雄勝小・中

全児童が講師役に

祖父母、住民に手順紹介

特産・雄勝石活用した陶器作りで交流

地域住民と交流しながら皿作りに取り組む児童

石巻市雄勝小・中（児童17人、生徒15人）は13日、地域・祖父母交流会を開き、地元特産の「雄勝石」を材料に用いた陶器作りのワークショップを通して交流を深めた。

祖父母や地域住民約20人のほか、鵜谷大（京都府）の学生ボランティア30人が参加。小学生17人が講師役を務めた。児童たちは雄勝石の粉末を粘土でろくろに用いた「ホタテ形の陶器（ほってえ皿）」の作り方を紹介。粘土を切り出したり、型に片栗粉をつけてから粘土を押し付けたりする手順を実演した。

①皿の縁を波打たせて成形する②少し大きめに成形するなど、それぞれ個性的な皿作りに取り組む児童と交流しながら、しっかり手順を説明できた。販売会では完売を目指したい」と話した。

ほってえ皿作りは、京都造形芸術大の事業「こども芸術の村」プロジェクトの一環として2016年に始まった。東日本大震災の復興支援のほか、雄勝町の名産品を使った町のPRを目的として取り組んでいる。18年には、仙台市青葉区のせんだいメディアテークでワークショップを開催した。

鵜谷大の学生ボランティアは、11年から被災地支援として石巻市で活動。雄勝町では紙漉しや運動会などの地域行事を支援してきた。

2019年 9月19日　石巻かほく　提供

2019年10月14日 （月） 大阪本紙朝刊 朝刊 滋 賀

曳山 ボランティアが支え

大津祭本祭

担い手不足、町外の子供も活躍

湖国三大祭のひとつ「大津祭」が13日、本祭を迎え、きらびやかな曳山13基が笛や太鼓、鉦のお囃子とともに、大津市の旧市街地一帯を練り歩いた。江戸時代初期から約400年の歴史を持つとされる大津祭だが、近年は少子高齢化や人口流出で担い手不足が深刻化。大津祭曳山連盟などは伝統の維持に向けて試行錯誤を続けている。

曳山に乗って鉦や太鼓を打ち鳴らす「囃子方」を担当する各町内の子供の数も減少。西王母山では子供約10人の囃子方のほとんどが町外の子供たちだ。町外から参加している小学4年の丸島淡海さん(10)は囃子方になりたかった父親の夢を託され、小学1年から毎年、鉦を鳴らしている。

今年も囃子方を務めた丸島さんは「練習で新入りの子に一から教えるのが大変だったが、本番は楽しい」と笑顔を見せていた。

西王母山を運営する「桃山会」の会員の山田新一郎さん(77)は「われわれが子供のころは町内の子供だけで囃子方は足りていたが、今はそうもいかない。町外の子供たちが祭りに興味を持ってくれてありがたい」と話していた。

かつては地元の男性のみだった曳山の曳き手。現在は女性や大学生、外国語指導助手として来日している外国人らからなるボランティアが加わっている。年々減り続ける曳き手を補うため、同連盟は毎年ボランティアを募集しており、今年は約300人が集まった。

13基の曳山のうち、丸屋町の「西王母山」には龍谷大の1～4年の学生ら約20人が曳き手として参加。地元の曳き手の指導のもと、真剣な表情で綱を引いた。

「西王母山」で鉦を打ち鳴らす丸島淡海さん（右から2番目）。囃子方のほとんどを町外の子供たちが務める

本祭を迎えた大津祭の曳山＝13日、大津市

Copyright © The Sankei Shimbun. All rights reserved.掲載記事、写真の無断転載を禁じます。

2019年10月14日　産経新聞　提供

曳山巡行 湖国彩る

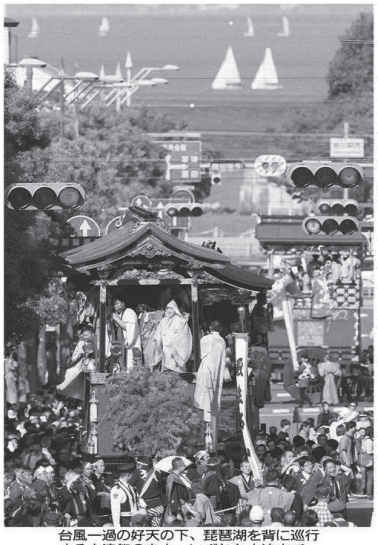
大津祭本祭

約四百年にわたり湖国の人々に親しまれる大津祭（国指定重要無形民俗文化財）の本祭が十三日、大津市であった。台風19号の影響で十二日の宵宮は中止されたが、一夜明けたこの日は十三基の曳山が無事に巡行し、街を彩った。（土井紫）

同市京町の天孫神社の例祭で、湖国三大祭にも数えられる。十三の旧町内が、それぞれ幕やからくりで飾りあげた曳山を曳き回し、見物に訪れた約十四万人（主催者発表）を楽しませた。紋付き姿の囃子方が笛や鉦、太鼓で「コンチキチン」の音色を奏でると、旧市街地のにぎわいは最高潮に達した。

天孫神社で神事を終えた十三基は、くじ取らずの「西行桜狸山」を先頭に出発。途中で曳山をとめ、趣向を凝らしたからくりを動かす「所望」も行った。中京町の「源氏山」では、石山寺で紫式部が源氏物語を書いた伝承にちなんだ仕掛けが披露された。上演後には曳山の上から厄よけのちまきがまかれ、見物客が手を上げて取り合った。

龍谷大（京都市伏見区）の学生ボランティア二十一人も参加し、「トコヨイ」の掛け声に合わせて丸屋町の「西王母山」を曳いた。リーダーとして参加した二年の土肥亮太さん（二九）は「伝統を楽しめた。大事にしていきたい」と話した。



台風一過の好天の下、琵琶湖を背に巡行する大津祭の曳山＝いずれも大津市で

上おはやしを奏で市街地を巡行する曳山

下曳山から投げられるちまきに手を伸ばす人たち

2019年10月14日　中日新聞　提供

発　行　日　2020年7月10日
発行・編集　龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター
印　　刷　双林株式会社

龍谷大学ボランティア・ＮＰＯ活動センター

■　深草キャンパス
〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
TEL　075-645-2047　FAX　075-645-2064
・京阪本線「龍谷大前深草」駅下車、西へ徒歩約３分
・JR 奈良線「稲荷」駅下車、南西へ徒歩約８分
・京都市営地下鉄「くいな橋」駅下車、東へ徒歩約7分

■　瀬田キャンパス
〒520-2194　大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL　077-544-7252　FAX　077-544-7261
・JR びわこ線「瀬田」駅下車、帝産バス約８分

URL　https://www.ryukoku.ac.jp/npo/
E-MAIL　ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

VEGETABLE OIL INK